

近代以前と以後における民衆向け育児書の変貌 ——『小児養育金礎』の解説、比較分析、および翻刻——

梶 谷 真 司

〈目 次〉

序

第1章 石田家と脾肝薬王圓

- 1) 鼎貫と薬王圓の来歴
- 2) 石田家の売薬業

第2章 『小児養育金礎』と近代化

- 1) 書誌学的考察
- 2) 病因論と主治の変化
 - ①江戸時代 ～ 根本薬としての地位
 - ②明治時代 ～ 西洋近代への適応
- 3) その他の変化

結び 曖昧さの合理性

参考文献

『小児養育金礎』諸版の翻刻

石田鼎貫『小児養育金礎』

【嘉永4年（1851）版】

【慶応元年（1865）・明治3年（1870）版】

【明治7年（1874）版】

石田勝信『小児養育心得』

【明治11年（1878）版】

石田勝信・勝秀『大人攝生小児養育心得』

【明治34年（1901）版】

序

日本において育児書は、江戸時代中期から書かれるようになった。その中で『小児養育 金 礎』(以下『金礎』と略記)は、他に類のない稀有の書である。それは大きく分けて次の三つ点で際立っている。

まず著者の経歴・身分である。育児書(とりわけ医療系の育児書)というのは、当時、医者なり学者なり、その道の専門家が著すものであった(現在でも多くはそうである)。江戸時代を代表する育児書『小児必用養育草』(1703)の香月牛山は、医者としても儒者としても一級の人物である。『小児戒草』(1820)の岡了允と、幕末の蘭医系育児書『愛育茶譚』(1853)の桑田立齋は、いずれも幕府に仕えた医師である。『小児養生録』(1688)の千村真之は、民衆に近いところにいたと思われるが、やはり医者である¹⁾。他方『小児養育金礎』は、医学や教育(当時であれば儒学)の専門的知見に通じたエリートではなく、石田鼎貫という市井の一薬屋の手になる育児書なのである。

第二に、読者層の広さが挙げられる。かつて本というのは、ある程度裕福な人しか手に入れない贅品であった²⁾。したがって、専門家たちによって書かれ、正式に公刊された育児書を読んだのは、裕福な人や身分の高い人など、限られた層の人たちであったろう。それに対して『金礎』は、鼎貫が製して販売していた脾肝薬王圓という薬の能書を兼ねており、宣伝の意味もあって、無料で頒布されていた³⁾。しかもこの薬は石田鼎貫、勝信、勝秀の三代、江戸時代から大正時代に至るまで⁴⁾、百余年にわたって全国各地で売られ、さまざまな階層の人たちに受け入れられた。そしてこの能書兼育児書も、その間に薬とともに人々の間に広まった。江戸から明治にかけて、おそらくもっとも長く広く、たくさんの人々に読まれた育児書であろう。

第三の特徴は、改訂回数の多さと時代的な特異性である。初版の文化10年(1813)から最後の版が出た明治34年(1901)までの間に、稿を変え版を改め公刊され、全部で少なくとも9つの版がある。とりわけ公刊された

期間のちょうど中ほどに明治維新を挟んでおり、西洋医学の受容という近代化の流れとともに内容を変えながら版を重ねた。したがってそれらの版の異同を考察することで、西洋的な枠組みがこの書の内実、身体観や病気や健康についての考え方に与えた影響を読み取ることができるのである。

これは、ある分野の知が近代以前と以後でどう転換したかを見ることとは異なる。たとえば、医学書であれば、そこに記される知は、著者もろともまったく別のものと入れ替わる。そこにあるのは断絶であり、飛躍である。しかしこの育児書は、脾肝薬王圓という薬を媒介にしつつ、一つの書としての同一性、連続性を保ちつつ変貌していった。それは薬屋として民衆の近くにいて、彼らのための実用に即すという立ち位置ゆえに可能でもあったし、必要でもあった。そこに現れるのは、専門的な学問レベルではなく、民衆的な知識レベルでの近代化の有様である。本論がこの書の諸版を分析して捉えようとするのは、そうした知の様態なのだ。

本論では、このテーマを以下のような構成で論じていく。第1章では、脾肝薬王圓とそれを製造・販売した石田家について解説する。1) では初代の当主にして『小児養育金礎』を著した鼎貫と薬王圓の来歴を、2) では石田家三代にわたる売薬業の展開を跡づける。第2章では、1) でこの書の書誌学的な考察を行い、2) でその内容が江戸から明治にかけてどのように変わったか、いかなる形で西洋近代の影響が及んだかを論じていく。そのさいまず病因論と薬の主治に焦点を当て、続けてその他に目立つ変化について述べる。

【追記】

脾肝薬王圓を販売していた石田家の事蹟を調べていくうちに、丹波亀岡の自家筋に当たった石田家のご子孫、石田敏さんとお会いし、話をすることができた。石田さん自身、家伝の文書をもとに先祖の事蹟を調べておられ、石田家の家系について多くのことをご教示いただいた。深く感謝する次第である。さらに、石田さんがおもちになっていた小城製薬社主の小城忠一氏の資料も参考になった。小城氏は、以前から脾肝薬王圓、石田家のことを個人的に調べ、そのつどまとめておられた。直接存じ上げないが、小

城社主にもお礼申し上げます。また、石田さんに連絡を取ってくださった亀岡市文化資料館の八木めぐみさん、および八木さんを紹介してくださった京都市歴史資料館の小林丈広さんにも謝意を表する次第である。

【注記】

論文の中で諸版から引用・参照する場合、以下の略号と丁数で記す。

文化10年版：B10

嘉永4年版：K4

慶応1年版：Ke1

明治7年版：M7

明治11年版：M11

明治15年版：M15

明治34年版：M34

第1章 石田家と脾肝薬王圓

1) 鼎貫と薬王圓の来歴

脾肝薬王圓は、石田鼎貫（謙次・勝元とも称する）が製造・販売した石田家の秘伝である⁵⁾。そして彼が著した『小児養育金礎』は、上述したように、この薬の能書を兼ねている。そのため『金礎』には、薬の由緒とともに店の創業者たる鼎貫の来歴が記されている。幸い嘉永4年、慶応元年、明治34年の版を参照することで、鼎貫の生涯の全体像を描くことができる。以下、誕生から死去まで時期を追って、彼の人生を再構成してみよう（*文中の語義については、あとの翻刻を参照）。

安永元年（1772） 鼎貫0歳

4月8日 丹波国に生まれる。

「翁姓は平、勝元と諱し、鼎貫と號し、木工と稱す。父は勝幸と諱し、源治と稱す。母は埜原氏なり。安永元年壬辰四月八日、丹波國桑田郡穴川邨に於いて生まる。」(M34 3丁ウ)

天明8年(1788) 鼎貫17歳

1月30日 京都の「天明の大火」⁶⁾を見物しに上洛し、そのまま居を定める。

「天明八年戊申正月三十日、京師に大火ありて、人家過半、烏有^{ある}に属す。翁、其火を觀んと欲し、大江坂(俗に老之坂と悞稱す)に至^{いた}り、遂に京師に出で、魚店巷高倉街に住めり。」(M34 3丁ウ)

文化4年(1807) 鼎貫36歳

脾肝藥王圓の販売を開始する。

「脾肝藥王圓は、文化四卯年より誓をたて、弘通せしめしに、…」
(K4 1丁オ)

文化10年(1813) 鼎貫42歳

藥の販売開始から、7年間その効果を検証し、服用法と効能を確定する。そこで能書を兼ね、子どものための養生書『小兒養育金礎』を刊行する。

「賣藥一藥にて諸病を治することは、あまり大凡ゆゑ、これを様見ること、文化四丁卯年より同巳年迄三ヶ年(*文化6年=1809)の間、四方に施藥し試るに、同症の内に効あると無とあり。然ども是を選^{あはだ}こと詳^{しはう}ならず。反覆すること又四年、前後七ヶ年を施藥なし、酉年(*文化10年=1813)にいたりて治と不治とを明白に撰めり。故に此後効なき人、予が藥用ひなきやう。効驗の有無を委しく記す能書なれば、此藥用ひの方は、篤と會得のゆくまで讀給ふべし。たとひ此藥もちひなく共、小兒ある方の心得となるべきことも記して、小兒養育黄金の礎と題す。」(K4 3丁オ以下; B10 1丁ウ)

嘉永5年(1852) 鼎貫81歳

藥が身分の別なく広く用いられたので、感謝の念からこの年より85歳

までの4年間、禁欲生活をしつつ、謹んで調合した。

「平人はもとより、御堂上様方、御大名様方までも御もちひに相成
る事、実に難有存じ奉り、仍て弥葉製を大切になさん為、予八十
一歳より生涯塩米を断て、麥・蕎麥・青物類を水煮し、これを食
し、當辰年にいたりて、八十五歳まで四ヶ年の間、謹で製薬する事、
予に於て飲びても、猶余りあり。」(K4 1丁オ)

安政5年(1858) 鼎貫87歳

6月4日 下京大火で高倉角から五条橋東二丁目に引っ越す。

「時に年八十又七、安政五年戊午六月四日、下京大火となり、家屋
は其災に是にて罹るか。五條橋東第二町に遷居す。」(M34 3丁ウ)

元治元年(1864) 鼎貫93歳

貴族や大名にも広まり、天皇にも認められた(「叡聞に達し」)のを期
に、息子の勝信に家業を譲る。

「是に於て此方剂を乞ふ人日々益盛んなり。既に御堂上様方、諸
様方の御貴人に逮ぶ。爰に鼎貫、今年九十三歳の齢に至り、故有て
恐多くも、叡聞に達し、忝も鼎貫の高齢を宥させられ、家方の
製薬調献奉べき勅許を蒙る事、是何ぞ幸福ぞ乎。鼎貫聖憐の身
に溢るるの難有を愚子に譲。」(Ke1 1丁ウ)

慶応2年(1866) 鼎貫95歳

3月24日 鼎貫死去。実報寺⁷⁾に葬られる。

「慶應二年丙寅三月廿四日歿す。享年九十又五。烏邊山寶報寺に葬
る。」(M34 3丁ウ)

上の資料は、鼎貫本人とその息子の勝信による記述であり、誇張や粉飾
も含まれている可能性はあるが、基本となる事実はおおむねこの通りな
のであろう。人となりについては、本の中で「豪邁にして身體長大、音を
吐くこと雷の如く四鄰に達す。」(M34 3丁ウ)と描写されている。また
老境に至ってもなお、「翁、今も矍鑠として、猶ほ容貌童顔のごとく光澤
ありて、聲音壯大にして、實に地仙長く其の仙容を遺す」(Ke1 5丁ウ)

と言われるほどの壮健ぶりであったようだ。天明の大火のさいに17歳で上洛して、そのまま京都に住みつき、薬屋として大成功を収め、95歳という稀有の長寿に達している。よほど剛健にして商才豊かな人物だったのだろう。93歳まで家業を息子に任せず、現役であり続けたのも頷ける。

以上が石田鼎貫の生涯の概略である。では彼が京都で始めた売薬業は、どのような展開を見せたのであろうか。次の節で鼎貫と二世勝信、三世勝秀の代まで述べていこう。

2) 石田家の売薬業

石田家は代々薬業に携わっていたようである⁸⁾。そのことは、文化10年(1813)の『小児養育金礎』初版の「臨産之節心得の事」に、安生散の製法について、「先祖より代々秘蔵せし薬法なれども、…」(B10 5丁オ)と記されていることから察せられる。とはいえ、鼎貫がいつごろどのようにして京都で売薬業を興したのかは分からない。天明8年(1788)、17歳で京都に出てきてから、どこかの薬屋で徒弟として働いたことくらいはあったかと思われるが、はっきりしているのは、彼が36歳のときに脾肝薬王圓を売り出したということである。そしてこの薬が石田家の家業を大成功へと導くことになる。では、この薬王圓はどのようにして生まれたのか。

それについて初版の文化10年版の末尾では、「右良法加味の義は、予が先祖丹波守谷神先生の教へおかれし良方、代々数百人にあたへしに壺人も治せざる事なし。」(B10 18丁オ)と具体的な人物の名前が挙げられている。これが薬王圓のことを述べているのかどうかは、必ずしも明らかではないが、最後の締めくくりとして書かれていることを考えれば、薬王圓のことを含意していると見なしてよいだろう。ところが、後の嘉永4年版では、次のように説明している——「抑此脾肝薬王圓はわが家方にて家方ならず。所謂天我に此奇方を授与し給ひ、一心正念に精製し、普く四方に及ぼして、天下の病苦を患るものを救ふべしと命令し給ふ事を感じ得せり。」

(K4 1丁ウ)

先祖の教えとしていたのを天与のものと言い換えたのは、一つには自分の店と薬に「箔づけ」をし、より“正しい”由緒を与えるためののだろう。こうしたことは、商売にかぎらず、宗教や政治など、しばしば見受けられる慣習であるし、いかにもありがたそうな謂れをもつ薬は他にも多い。しかし嘉永4年版の上の引用から察せられるように、このような意味づけは、同時に、彼が薬を世に広める使命感につながり、彼の製薬・売薬への“良心的な”姿勢を方向づけている。

さらに『小児養育金礎』という誠実で懇切丁寧な能書兼育児書を無料で配布したことも、また貧しい人には薬まで無料で与えたことも、この延長線上にある——「よつて薬品を能々調べ、善を撰び、悪きを除き、調製に心^{こころ}を尽し、能書・包紙等、^{のうがき} 鹿畧^{つつみがみとう}にせず、^{そりやく} 将又、^{はたまた} 薬を求むる人の生質^{うまれつき}病根^{びやうこん}を診察し、^{わきまへ} 此薬^{このくすり}の當^{まさ}に應ずると不應とを考へ、^{わう} 其應^{わうぜざる}ずべきに薬^{かんが}を与へ、^{わう} 應^{わう}じがたきには断て与へず。^{ことわり} 適應^{あたら}ずべしとおもひて、^{たまたまわう} 服用^{ふくよう}せしむれども、^{ひとまは} 一廻^{こうげん}りにて功験^{こうけん}なきには、^{ことわりふたたびあた} 又理^{もつとも}て再与^{きげん}へず。尤^{いへ}其奇験^{きげん}あると雖ども、^{ざい} 財^{ともがら}（かね）乏^{むれう}しく、^{あた} 求めかぬる輩^{しなもの}は無料^{れいしや}にて与へ、^{うけ} 品物^{ぜんくはい}だに礼謝^{ほどこ}を請^{これ}ずして、^{いささか} 全快^{てん}まで施^{むく}す。是^{こころ}、聊^{かるがゆへ}上天^{まづし}に報^みゆる意^{はち}なり。故^{かならずきた}に貧^みき人は、^{はち} 身^{かならずきた}を恥^みず、必^{はち} 来^{かならずきた}り給へ。」(K4 1丁ウ以下)

彼のこうした良心的な姿勢は、たんなる言葉の上だけの自己宣伝にすぎないと思うかもしれない。しかし『金礎』の本文中で彼は、実際に病症ごとに薬の効果の程を述べ、効かない症状には使うべきではない、とはっきり述べている。たとえば「心疝の虫」については、「此むしに予がくすり^よを数十人にもちひためし見れども、^{すこ} 少しも効^{しるし}なし。よつて用^{もち}ゆべからず。」(K4 15丁オ以下)と言う。また、「留飲」については、「此薬一服もちゆると、^{すこし} 少々^{つよ}いたみ強^{せう}くなる症、^{せう} 百人のうちに壹^ち式^ち人もあり。」というケースがあり、そのような場合、「此症^{せう}は治^ちせず。用^{もち}ゆべからず。」(K4 25丁ウ)と述べている⁹⁾。

これらの箇所をはじめ、『金礎』の記述から見るかぎり、自著についての次のような言葉は、少なくとも当の鼎貫からすれば、たんなるポーズではなく、本心の発露と言ってい——「右の通り治^{とふ}する病^ちは治^{やまひ}すと記^ちし、

治せざるは治せずとしるす能書なれば、唯薬を弘めんとのみ種々文華をかざる能書と日を同ふして論ずべからず¹⁰⁾。病にもとづき、彼医師、此薬と迷ふうちに、手おくれとなりて、天数尽ざるに命を亡ぼす者世に多し。是を見るに忍びず、病論病症を挙て、世の人の天壽を保しめんと欲す。能々考へ服薬あるべきこと専要也。」(K4 28丁オ；B10 18丁オ)。
 そして次のような自負も、薬効に対する実証精神と商売上の成功に裏打ちされたものと見ることができる——「此能書をよみて、此やうにきくならば、医者はいらぬといふ人もあるべし。いかにも此能書にしるす疾病は、医師のいらぬことを用ひてしるべし。」(K4 28丁オ)

このような彼の努力の甲斐あってか、脾肝薬王圓は、早くからよく売れ、話題になったようである。薬効について鼎貫が親試実験を繰り返した文化4年から10年までの7年間に、多くの難病を治したらしく、それが「京羽二重」という、今で言う京都のガイドブックに詳しく載ったらしい (cf. K4 3丁オ)。そして前節で述べたように、庶民から大名、公家、天皇家の人まで、さまざまな身分の人に受け入れられた (cf. Ke1 1丁ウ)。

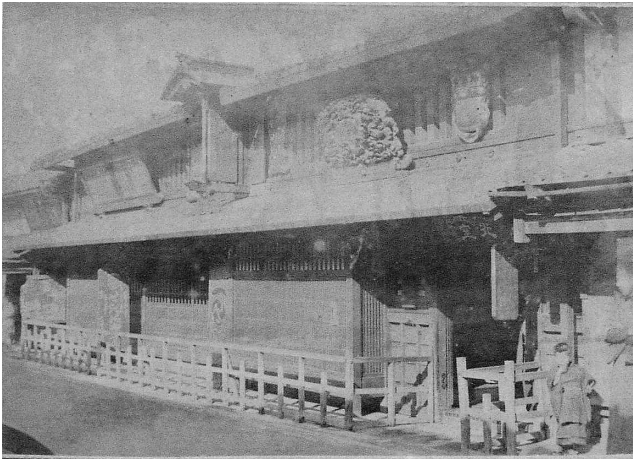
さらに注目すべきは、薬王圓が地理的な広がりの中でも、急速に販路を拡大したということである。『金礎』には、文化10年の初版をのぞけば、いずれの版にも末尾に「出張弘所」や「元弘所」、「賣弘取次所」といった販売拠点のリストが載っている¹¹⁾。それによると、嘉永4年(1851)の段階では、京都、江戸、大阪、土佐、信濃、陸奥、伊勢に計9ヶ所だった拠点が、慶応元年(1865)には九州や東北にまで広がり、計29ヶ所となった。さらに明治3年(1870)には52ヶ所、7年(1874)に99ヶ所に増え、11年(1878)には146ヶ所となり、北海道にまで達する。最盛期の明治30年ごろには232ヶ所に拠点をもち¹²⁾、最後の版の能書が出た明治34年(1901)には、187ヶ所となった。

この間、元治元年(1864)、鼎貫93歳のときに勝信(1821-1886)が家業を継ぎ、時代は明治に入り、その中葉——おそらく明治19年の勝信死去の後——には、勝秀(1845-1922)が当主となった¹³⁾。かくして脾肝薬王圓は、文字どおり全国各地に広まり、名実ともに京都を代表する薬となっ

た。石田家三代にわたる家業隆盛の成果である¹⁴⁾。そのことは、明治9年(1876)に刊行された番付表「京都売薬盛大鑑」(池田東園編)が印象的に示している¹⁵⁾。



〈図版1〉京都売薬盛大鑑 国会図書館蔵



〈図版2〉石田家薬屋店構えの写真（明治時代か） 石田敏氏提供

第2章 『小児養育金礎』と近代化

1) 書誌学的考察

以下の一覧が示すように¹⁶⁾、鼎貫による『小児養育金礎』は、初版が文化10年（1813）に出て、明治7年（1874）まで同タイトルで版を重ねている。その間少なくとも5回、すなわち嘉永4年（1851）、文久2年（1862）、慶応元年（1865）、明治3年（1870）、明治7年（1874）に再彫・改補を行っている¹⁷⁾。ここまでの版には内容的に大きな相違はない。根本的な改変は、明治11年（1878）に『小児養育心得』と表題を変えたときに起こる（序は明治9年）。このとき著者も鼎貫から息子の勝信に代わっている（鼎貫自身は慶応2年＝1862に死去している）。その後勝信は、明治15年（1882）の改訂を行い、明治34年（1901）には、次の勝秀が『大人攝生小児養育心得』とタイトルを再度変え、最後の改訂版を出している¹⁸⁾。つまり、この最終版までの間に合計8回は改訂があったことになる¹⁹⁾。

刷数については、データベースで確認できる限りでは、さらに安政3年(1856)、安政6年(1859)、文久2年(1862)、明治20年(1887)、明治28年(1895)のものがあり、これらは前の版とは多少とも中身が変わっている。また、書誌情報上発行年が同じであっても、丁数が違うものがあり、実際に印刷した時期が異なる可能性もある。もっともこれらが内容的に大きく相違しているとは考えにくい。『金礎』は薬王圓の能書、宣伝を兼ねており、いずれの版も末尾に弘所・取次所の一覧と他の薬の広告を掲載している。そのため本文の中身は同じでも、広告や弘所・取次所の変更があれば、必要に応じて該当部分だけを改めて印刷したと思われる。同じ版でも丁数が違うものがあるのは、一つにはこれが理由であろう。

この本のこうした性格上、また、いまだ実見していないものがあるため、すべての版・刷に関して遺漏のない正確な書誌を作るのは、現時点では不可能である。また現在把握していることでも、詳細に書くとかえって分かりにくくなるため、以下、簡潔に諸版一覧を記すことにする。

『小児養育金礎』諸版一覧

* アルファベットの略号が示す所蔵先は以下のとおり。

NLM：アメリカ合衆国国立医学図書館 (National Library of Medicine)

UCB：カリフォルニア州立大学バークレー校 三井文庫

UCSF：カリフォルニア州立大学サンフランシスコ校 医学部図書館

* 所蔵先のうち下線を引いたのは実見した版。○は自分が所蔵する版。

文化10年(1813)：18丁

所蔵先：名工大、日文研

* 名工大の版の丁数は、4丁目が2つ(4丁と後4丁)あり、また上1丁・2丁もあるので、実質的には21丁ある。

* 「文化十酉年より弘化四未とし迄の予が^{のうがき}能書に…」という記述があり、文章はほぼ文化10年ののものであっても、実際の刊行年は弘化4年(1847)から嘉永3年までの間になる。

嘉永4年（1851）：28丁／29丁 再彫改補

所蔵先：国会、日文研、香大、九大、島原、三春町歴民資、UCB

- * 序は安政3年（1856）のもの（UCB）と安政6年（1859）のもの（国会）がある。この二つでは、2丁オの後の挿絵と末尾の広告、弘所・取次所のリストが異なる。
- * 嘉永4年の序があるもの、安政の序のないものがあるのかどうかは未確認。

文久2年（1862）：29丁 再彫改補

所蔵先：京大富士川、東京医大

- * 京大富士川のものも、安政6年の序が付いているが（2丁オ）、鼎貫の年齢は「九十齡にてしるす」とある。
- * 挿絵は嘉永4年版で安政6年序のものと同じ。
- * 広告と29丁ウの元弘所のリストは同じだが、裏表紙見返に新たに元弘所が追加。

○慶応元年（1865）：29丁／30丁 再彫改補

所蔵先：鶴見大、内藤くすり、鳥取県図、九大六本松図、研医会図、
パリ東洋語図、日文研、UCSF、八戸図、東洋大

- * 序は元治元年（1864）に勝信が書いている。

明治3年（1870）：29丁／31丁 再彫改補

所蔵先：研医会図、UCSF

- * 序は元治元年で、中身は慶応元年のものと同じ。最後に以下の追加事項があり、その後の広告、弘所のリストも異なる。

明治三年庚午初春再彫之期改補

皇都五條建仁寺町西江入

石田勝信

石田勝秀

本國丹波亀山在穴川村

○明治7年（1874）：31丁 再彫改補 序：明治5年（1872）

所蔵先：竹田図由学館、岡大、研医会図

- * 序は明治5年。勝信による。この年に出たものがあるかどうかは不明。

『小児養育心得』に表題変更

○明治11年（1878）：24丁／25丁 改正

所蔵先：京都教育大、国立教育政策研、奈女大、日文研

- * 序は明治9年（1876）。この年に出了ものがあるのかどうかは不明。
- * 活版印刷になっている。
- * 国立教育政策研究所の版は序は明治9年だが、11年の発行年はない。

○明治15年（1882）：23丁 改正

所蔵先：京都教育大、日文研、蓬左尾崎、UCSF、NLM

- * 序はなし。著者は勝信。
- * 木版印刷に戻っている。

明治20年（1887）：24丁

所蔵先：東京学芸大、東大教、東大総、同大（今出川）

- * 明治20年は、裏表紙見返の勝秀による跋に記された年。明治15年のものと本文は同じだが、広告や末尾の弘所・取次所のリストが違う。

○明治28年（1895）：26丁

所蔵先：日文研

- * 各頁の上欄外に格言が印刷されている。本文は15年のものとほとんど同じ。
- * 発行年は不明だが、同じ版と思われるもので、28丁のものがある（私が所蔵する版）。

『大人攝生小児養育心得』に表題変更

○明治34年（1901）：22丁 改正

所蔵先：国会、麗澤大

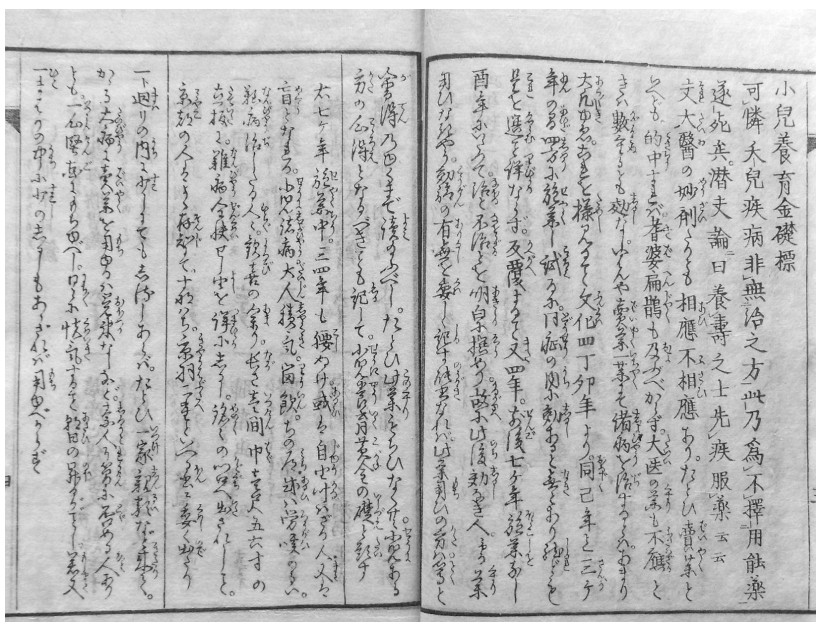
- * 序はなし。著者は勝信。ふたたび活版印刷になっている。
- * 表紙裏に「弊家製劑購求注意」、1－4頁に「勅語（教育勅語）」、「貴顕御製勸學唱歌」、「誓詞の唱歌」がある。丁数はその後の本文から付いている。
- * 本文末（15丁オ）には、明治15年に改正とあるが、実際には15年版は木版で、この34年版は内容的にも異なっている。
- * 末尾の広告が多くなっている。



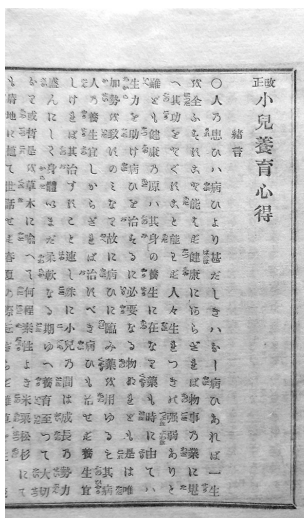
〈図版3〉大人攝生小兒養育金礎、小兒養育心得、小兒養育金礎



〈図版4〉広告引札（明治時代） UCSF所蔵



〈図版5〉慶応元年版



〈図版6〉明治11年版



〈図版7〉明治34年版

脾肝薬王圓の広告引札について

明治時代には、脾肝薬王圓の多色刷の広告引札が出ている（江戸時代については現在のところ確認されていない）。私が図版・画像の形で確認したのは、内藤記念くすり博物館所蔵の1点²⁰⁾、およびカリフォルニア大学サンフランシスコ校医学部図書館（UCSF）所蔵の3点²¹⁾、計4点である。そのうち、くすり博物館の1点とUCSFのうちの1点が同じもので、全部で3種類であるが、発行年が明記されているのは、明治28年（1895）のものだけである。69頁に載せた図版は、本文の内容と文末に記された能書の丁数から判断して、明治11年ごろのものだと思われる。

2) 病因論と主治の変化

『小兒養育金礎』は、薬王圓の能書として88年の長きにわたって改訂を繰り返した。その間に明治維新を挟み、近代化・西洋化の流れとともにこの書も大きく変貌を遂げる。前節で述べたように、転換点となったのは、タイトルが『小兒養育心得』となった明治11年（1876）の改訂である²²⁾。この前後——前を『金礎』期、後を『心得』期としよう——で、本の内容は“根本的な”変化を蒙った。ただしそれは“全面的な”ものではない。ここが重要な点である。

『心得』期になっても、江戸の『金礎』期と共通している部分、連続している部分も、むろん少なくない。そのような箇所を見ていれば、変化はそれほど大きくないように思えるかもしれない。一見して気づくのは、言葉遣い、語彙の違いであるが、それは表面的なことかもしれない。たんに商魂たくましい薬屋が宣伝のために、文明開化を匂わせる言葉を多用して新しい衣裳を身にまとい、近代化の波に乗り遅れまいとしているだけではないか。たしかにそういう面もある。実際、場当たり的な変更も見られる。それらは、厳密に見れば、他の部分と矛盾していたり、あまり整合性がなかったりする。けれども、表面に現れている変化の大半は、根底において起きた大変動の直接・間接の帰結なのである。その結果、『金礎』期

から変わらず引き継いでいるものが、かえって文脈から浮いて異物のようになっているところさえある。

そうした根本的な変化をもっとも顕著に示しているのが、病因論、薬の作用の仕方、および主治（主たる効能）についての記述である。以下、これらの点について江戸時代（『金礎』期）と明治時代（『心得』期）で分けて論じていこう。

①江戸時代 ～ 根本薬としての地位

『金礎』の中で主に問題となる病気についての考え方には、大きく分けて二つある。それは脾胃論と胎毒論である。脾胃論について、『金礎』では本文の最初の章「小児諸病脾胃論」の冒頭で、次のように述べている——「夫、^{それ}に^{にんげん}人間の^{からだ}身體は、^{ござうろつぷ}五臓六腑が^{もと}本なり。^{ござうろつぷ}五臓六腑の^{もと}本は^ひ脾なり。又、^{ばんもつ}万物の^{もと}本は^{つち}土なり。^{つち}土は^{ばんもつ}万物を^{やういく}養育（^ひやしな^ひ）し、^ひ脾は^{しょくもつ}食物を受化（^{じゅくは}うけとる）して、^{ござうろつぷ}五臓六腑を^{そだつる}育ゆへ、^ひ脾は^{ござう}五臓の^{はは}母とも又^{またつち}土ともいへり。^{つち}土^{ひとたびかわく}一度^{ばんもつ}虚なれば、^{そん}万物^ひみな^{きよ}損ず。^{ござう}脾^ぶ虚すれば、^{おとろ}五臓六腑^{おとろ}みな衰ふ。」（K4 6丁オ；B10 3丁ウ）

この理論の背景にあるのは、陰陽五行の思想であり、五行の木・火・土・金・水のうち、真ん中にある土を根底に置く土王説である。「万物の^{もと}本は^{つち}土なり」とは、そのことを指している。そして五臓の肝・心・脾・肺・腎では脾が土に対応するので、身体においては脾がもっとも重要となる。『黄帝内経素問』の太陰陽明論には、その古典的表現が見られる。「脾なる者は土なり。中央を治め、常に四時を以て四蔵に長たり。[……]脾蔵なる者は、常に胃土の精を著むるなり。土なる者は、万物を生じて天地に法る。」²³⁾ これを理論の基礎に据えて脾胃論を展開したのが、金代の李東垣（1180－1251）である。彼の理論によれば、脾胃の虚損によってあらゆる病が生じる。したがって、治療の基本原理は、これを元に戻すことにある²⁴⁾。

このような李東垣の医学は、室町末期に日本に入ってきて大きな影響を

与えた。『金礎』もその流れの内にある。上の引用の「土一度虚なれば、
 万物みな損ず。脾虚すれば、五臓六腑みな衰ふ」という一文が、それを如
 実に表している。そして薬王圓の効用はまさに、「根本の脾胃を補益、五
 臓六腑の虚実陰陽を養育する」(K4 6丁ウ；B10 4丁ウ)となる。この
 点で、脾胃論は胎毒論を凌駕する。

胎毒とは、生まれたときに子どもの口の中にある黒くて粘るもの（実際
 には口の中にたまった羊水）で、子どもの病気の大半が胎毒によるとされ
 た。香月牛山は江戸時代を代表する育児書『小児必用養育草』の中で、
 「小児の病は、かならず胎毒を第一とすべきなり」と述べているほどであ
 る²⁵⁾。これを誕生直後、乳を飲ませる前にきちんと拭い去り、体内に入っ
 ているものは徹底して排出させなければならない。それがなされず、体内
 に胎毒が残ると、後々万病の元になるとされる²⁶⁾。

鼎貫もこの胎毒説を認めてはいる。だが重要なのは、あくまで脾胃の虚
 損を補うことである。彼は「諸病胎毒論」の章で、子どもの病気の主たる
 原因を胎毒とする考え方と、脾胃論との調停を問答形式で論述している。
 彼によれば、病気の有無や軽重は、体内に残った胎毒よりもむしろ、脾胃
 の生来の虚実、生後の養生による充実具合によって決まってくる。最終的
 には、脾胃を充実させておくことが肝要なのである——「問、しからば、
 小児諸病は胎毒より發すといへども、其本は脾胃の虚実にあるといはる
 る哉。○答、しかり。」(K4 22丁ウ) そして「胎毒多き小児たりとも、
 脾を補益する時は疾なく、たとひ胎毒もなく無病なる小児たりとも、脾虚
 すれば疾發す」(B10 14丁オ)と言われる²⁷⁾。

このように病気の根本原因に効くということこそが、他の対症療法的な
 薬に対する薬王圓の際立った長所である。これは子どもだけでなく、人一
 般に言えることである。だから薬王圓は大人にも子どもにも効果がある。
 鼎貫は次のように言う——「他薬を考るに、胎毒を下痢するばかりか、或
 は驚風、かたかひの類を治するばかりか、何れも病の原を後にし、唯節に
 顕る處にもとづきて用ゆる薬ゆゑ、當分効能あるごとくにて、生涯根
 を治ることあたふべからず。所謂飯のうへの蠅を追ふに異ならず。[…]

予が薬王圓は、其根本の脾胃を補益、氣血をよく順らして、瘀血を消解する大妙劑なれば、大人小兒ともにちひて病を治するに、何ぞ違ひあらん。」

(K4 23丁オ-24丁ウ；B10 14丁オ-15丁オ)²⁸⁾

もっとも鼎貫は、薬王圓を万能薬だなどと豪語する気はないだろう。そもそもそんな薬があることさえ疑わしく思っている。だから、第1章の2)で述べたように、鼎貫は薬王圓がどの症状にどれくらい効くかを何年もかけて確かめ、冊子の能書にしたのである。息子の勝信は、鼎貫についてこう述べている——「必一方の能々諸病を治すべきにあらざれば、其應すべきと應ずべからざるを様し、當に應すべきを撰み、應ずべからざるには用ひざらしめんが爲に、功能の有無を明著して冊をなし、周く施行す。」(Ke1 1丁オ以下)。とはいえ脾肝薬王圓は、言わば「根本薬」である。だから万病に効かないとは言っても、非常に多くの病気に効く。そのことは、主治の広さに直結している。

まずは上で述べた脾胃の虚症であるが、もう一つこれと密接に結びついている病に「疳」というのがある。五行説において五味は酸・苦・甘・辛・鹹であるが、五臓の脾に対応するのが甘である。したがって甘の病症である疳は、ことのほか脾胃の虚と関連が深く、その症状は五臓のすべてに生じる。鼎貫は次の説明で述べているのは、おおむねこのようなことである——「甘辛苦酸鹹五味を五臓へわかつうち、脾は甘を主どる。諸疾多しといへども、五臓の不足より發ざるはなし。驚風、辟疾、丹毒、其外小兒虫一切みな疳より發る。則、疳の字はザに甘と書き、肺疳、心疳、脾疳、肝疳、腎疳と云。共にみな脾虚より發ると医書に見えたり。」(K4 6丁オ以下；B10 3丁ウ以下)

では脾胃の虚症にせよ、五疳にせよ、いったいどういう病なのだろうか。これについては、一つの章で子どもの場合の症状が列挙されている。それによると、「生米・壁つち・土器・けし炭など食ふ」、「瘦おとろへ、額に青筋いで、頭大きなる」、「頭にかぶと着たる如瘡」がある、「寝いりて鼻つまるか、或ははぎりし、手足をびくつかす」、「顔色あしく、夜なき、物おどろき、氣のみぢかき」、「疳にて常々ねついで、びくびくしてなきいる」、

「腹に塊ありて胸さきへ差込、眼を見つめる」(K4 15丁；B10 8丁ウ)となっている。

五疳については、さらに詳しく述べている——脾肝は「乳食不慎」^{にうしよくふつつしみ}「就中乳ばなれの節、食物の不慎」^{なかんづくち}により脾胃を損じて起こる。そして多食偏食となり、やせ衰えて腹が太鼓のように膨れる。悪化すると、失明し、確実に命を落とす (cf. K4 13丁ウ以下；B10 6丁ウ)。肝疳は驚風とも言い、「食物の不慎より、脾胃虚して、瘀血心肝の二臓にせめ入り、肝膽不足し、神心さだまらず、少しの事も恐れびくつく」もので、癲癇になることもある (cf. K4 14丁ウ；B10 7丁ウ)。心疳とは言葉が遅く、7歳になっても話さないような、精神的な未発達状態を指す (cf. K4 同上；B10 同上)。肺疳とは「鼻のした赤くただれ、或ははなをせせり、洩多く出る」(cf. 4 15丁オ) 症状、腎疳は背虫のことで、「骨髓にむしを生じ、脊ばねの節を食して屈曲なり」とされる (cf. K4 同上；B10 8丁オ)。

これらがもっとも薬王圓の効果が発揮される病症だが (ただし心疳は除く。Cf. K4 14丁ウ；B10 8丁オ)、他にもまだまだたくさんある。癰癤^{むしおこり} (癰虫^{かたかひ})、大人の長期にわたる瘡、大人と子どもの痢病、臍風・撮口 (丹毒)、^{さいふう} 臍瘡、痘瘡などの腫物や瘡、中暑、^{さつこう} 翻胃、眼病、傷寒の後の乱心 (傷寒そのものには適さない)、血の道、^{はやくさ} 崩漏、白血、長血など生理不順、婦人病 (情緒不安定も)、^{せいしやう} 勞咳、^{はうさう} 脹満など…要するに、目次で項目に挙がっているすべての病症である。

鼎貫はそれら各々の箇所、薬王圓を使うタイミングや、その効果の程度を述べている。中には効かないから用いるべきではない、と述べているところもある。その意味では、万能薬ではないが、それに準ずるほど効能が広い。これらの病症は、今日目から見ると、まったく種類を異にする病気であって、一つの原因に還元することは不可能であり、一つの薬で対処できるものではない。しかし薬王圓は、生命と健康の要である脾胃を整える「根本薬」なのだから、これだけの主治をカバーできるのは、むしろ当然のことであろう。

しかも、それゆえにこの薬は予防薬としても有効で、子どもにとっては

重要とされる——「此脾肝薬王圓は、脾胃を補益の主る良剤なれば、初生より一二年の間に油断なく用ゆること、尤肝要なり。」(K4 12丁オ)
さらには、年齢に関わらず、常用すれば無病長寿にいたり、瀕死の重症から人を救う——「常々此良剤を服用すれば、無病長寿ならしむ。蓋し其病に相應して用る節は、薬力尤廣大なり。既に死路に赴かんとするの重症たり共、救ふ事を得る。其効能一々挙て数るに違あらず。」(Ke1 1丁オ)²⁹⁾

以上述べてきたことから分かるように、薬王圓のこうした幅広い効能は、けっして正当な根拠もなく闇雲に主張されているわけではない。この薬は、江戸時代の医学の中で理論的に確固たる位置づけをされており、その作用も効能もこの位置づけに基づいているのである。

では薬王圓をめぐるこうした連関の全体は、明治になって、医学理論が大転換を遂げたとき、どう変化するのだろうか。

②明治時代 ～ 西洋近代への適応

近代西洋医学の受容により、日本における病気や健康についての考え方がどのように変化したかという一般的な問題は、本稿では扱わない。ここでは脾肝薬王圓に関連するかぎり、江戸時代の場合と同様、転換後の病因論、薬の作用、主治とその相互連関を見ていこう。

おそらくもっとも決定的だったのは、中国医学の脾胃論に支えられていた脾胃の実質的な地位が失われたことであろう。西洋医学の中で脾の占める位置は、人間の生命全体にとって何ら中心的なものではない。この影響は、明治11年に勝信が出した『小児養育心得』の語彙にもはっきり現れる。「脾胃」(あるいは脾)という言葉は、章のタイトルや、昔の言い方としてわずかにもち出される以外、本文の記述では使われなくなる。その代わりに、「胃」が「脾臓」から切り離され、単独で「胃」や「胃囊」という表現で登場する。

この変化は、たんなる言葉の入れ替え以上の意味をもっている。そもそ

も「脾胃」というのは、脾臓と胃という個別の臓器を指しているわけではない。それは、消化の働きと気血の巡りを統御するという、生命の根幹に関わる機能そのものか、そうした機能を支える場のようなものと考えたほうがいい。他方「胃」「胃囊」というのは、解剖学的に明確な輪郭をもった臓器である。『心得』期の生命論・病因論の中心に来るのは、いまこの特定の臓器の機能、すなわち、消化という生理学的プロセスなのである。

勝信は「脾胃養生の心得」の初めで、消化と栄養摂取の仕組みと、生命にとっての意義を次のように簡潔に述べている——「人々の食餌を要るは、^{くひもの もとむ}動作につき^{その からだ}其身體の消耗を^{おぎな}補ふと、身體の資活原因たる^{からだ いきてある もと}温を起す^{あたたまり おこ}とにあり。總て體の温は食物飲料の中に包含たる^{すべ からだ おん くひもののみもの}酸炭水三元素といふ^{うち ふくみ さんたんすい げんそ}三つのもの結合する時に生ずるものなり。而て食を消化し血液となし、全身に循環して其身體を^{むすびあい}養ふは、一つの^{とき せう}妙々なる^{そし しよく こ な ちしる}機關の食物を^{からだ めぐり}消化す器械の作用に因るなり。」(M11 10丁ウ) 続けて、食べ物を消化するというもっとも重要な役割をもつ器官＝「消食器」としての胃の解剖学的構造と消化のメカニズムを詳しく説明し、正常な機能にとっての要点は胃の収縮力にあるとする (cf. M11 11丁オ以下)。かつて「脾の弱り」(脾胃の虚損)と言われていたのも、胃の「^{ちぢむちから}収縮力の弱り」(M11 13丁オ)として力学的に解釈される。そしてそれに伴って、脾肝薬王圓の効能は、^{しよくもつ こ な}「食物消化す加勢を^{いた ちぢむちから おぎな}致して、此収縮力をよく補ふ」(M11 13丁オ) こととなる。

こうしたさきわめて首尾一貫した記述によって、薬王圓は西洋から来た新たな医学理論の中にしっかりと位置づけなおされている。けれどもそのことは、当然の帰結として、薬の作用や主治にまで影響せざるをえない。まず薬の作用について言えば、胃の働きを回復させることじたいは、病気からの治癒や体の回復を意味するわけではなく、そのために必要な一条件にすぎない。だから薬王圓は、脾胃の虚損を補うような直接的なものにはならない。「加勢」という言葉から察せられるように、それは補助的なものにとどまる。勝信はこのことを明確に述べている——「^{のみくい へら}飲食を減して其^{やしな}収縮力を^{こなれ}養ひ、^{くひもの}消化やすき食物を^{しよく ぜんぜんなれ}食して漸々慣に其力を^{その}導き、其^{みちび}消化作用を^{こなすはたらき}

誘^{さそ}ふべき心得^{こころえ}にて、養生^{やうぜう}をよくせざれば、其^{やまひ}病^{これ}にして之^{もち}を用^{その}ゆるも、其^{こうのう}微^み功^えを驗^{なん}る事^こを得^{くすり}ざるなり。何^{ただ}となれば、是^{かせい}れ薬^{いた}は唯^い加^い勢^いを致^いすのみなればなり。」(M11 13丁オ)³⁰⁾

かくして薬の作用が控えめなものになると平行して、主治も限定されたものになった。『心得』は、本論に入る前に、主治を列挙して簡単に解説している。そこには以下のような病気が並んでいる——消化器の衰弱(脾胃の弱り *重症の場合かつての「脾疳」にあたる)、萎黄病(気のふさぎ)、小兒下痢(子どもの下り病)、酸敗液(留飲)、経行不調(月のめぐりの定まらぬ)、白血・長血、喜斯的兒(血の道 *ヒステリーのこ)、依剥昆垓兒(気の病 *ヒポコンドリーのこ)、佝僂病(せむし *かつての腎疳)、^{レウマチス}痛風^{つうふう}、以上である(cf. M11 3丁ウー5丁ウ；M34 1丁ウー3丁オ *^{レウマチス}長血^{つうふう}と^{レウマチス}佝僂質斯^{つうふう}、痛風は明治34年版だけに出ている)。

ここで注意すべきは、脾胃の虚損に次いでとくに重視されていた小児の五疳が、表舞台から姿を消しているということである。それは新しい病名の影に、かつての名残として現れるだけである。前節で述べたように、五疳が薬王圓の主治になっていたのは、脾と甘の連関に基づいている。したがって五行説と脾胃論の支えを失えば、五疳は病因論の中に占めるべき位置をもたなくなってしまうのである。

こうして薬王圓の主治は、江戸時代と比べてかなり減った。だが変わったのは、それだけにとどまらない。そもそも『金礎』期と『心得』期では、本の構成がまったく違う。『金礎』では、妊娠、出産、育児の諸段階についての記述を進めつつ、そのつど問題になる病症とそれに対する効能を述べる。そのあと大人の病気についても、さまざまなものを挙げて薬効を述べている。そして全編にわたって「あれにも効く、これにも効く」(時おり「これには効かない」)と書いている。これは、効能について語ることと、子どもや大人の養生について語ることが、かなり広範にわたって重なり合っているということである。そしてこのような記述は、薬王圓が根本薬として、原理的に子どもも大人も含めて、人間の健康全般に効力をもち

うるとされていたからこそ、可能だったのである。

他方、『心得』期になると、主治は最初にまとめ、そのあとはそれに関連する病症のところでのみ薬王圓の効能が説かれ、それ以外の発達段階——一妊婦、生児、赤子、小児、幼童、大人——ごとに区分された章では、一般的な養生の指示や諸注意が記されているだけで、薬王圓については言及されない。したがってこの本は、能書としての側面と育児書としての側面が、『金礎』期よりも乖離し、全体としての統一感がなくなっている。これもまた、薬王圓が病因論のうちに占める大きさと効能の幅が縮小したことの反映と言えるだろう³¹⁾。

3) その他の変化

『金礎』期から『心得』期へ移行するさいに起きた変化のうち、西洋の影響によるものは、他にもある。一見些細に見えて重要なのは、明治11年版になると「氣血」を「ち」と読ませている点である——「養生とはからだのうち ^ち 氣血 ^{めぐり} の循環 ^{くひもの} と食物 ^{こなれ} の消化 ^{きをつける} とに注意 ^{だい} を第一 ^{せい} とす。抑 ^{そもそもこのほう} 弊家 ^{せい} に製 ^{せい} する脾肝薬王圓は専 ^{ひとつ} に氣血 ^ち を能く循環 ^よ し、精神 ^{めぐら} を養 ^{こころ} ふの良劑 ^{やしな} なり。」(K4 3丁オ)³²⁾

これはたんなる読み方の違いに思えるかもしれないが、「氣血」が「血」へと限定されたということであって、体内を循環する流体の質的变化を意味する。それは、上で「脾胃」が「胃」へ限定されたのと同様の思考様式の転換である。すなわち、身体を捉える概念が、より明確に特定しうる実体的存在に定位するようになったのである。

これと似た考え方の変化は、虫の病因論にも見られる。『金礎』期には、虫は病気の原因としてあまり強調されていない。たしかに挿絵では「五かん 并 ^{しよちう} 諸虫 ^づ の図」というのがあり、医学館の名前まで出して権威づけているが (cf. K4 5丁ウ以下；〈図版9〉)³³⁾、五疳に関する本文の説明に、「虫」という言葉は病名以外、ほとんど出てこない。虫については、諸病胎毒論で少し言及されるのみである (cf. K4 22丁ウ以下)。それが明治の『心得』期になると、蛔虫と條虫という二種類の虫が、特定の病気の原因

として具体的に名指され、かなり詳細に論じられている (cf. M11 15丁オ以下; M34 10丁オ以下) ³⁴⁾。

要するに、江戸時代、「虫」を病気の原因とするのは、もともと民間の慣用であって³⁵⁾、医学理論においては、五疳が必ずしも虫と結びつけられていたわけではなかったのであろう。疳の種類によるか、疳が原因で虫を生ずる場合があるとされていた程度で³⁶⁾、病因論の上で、虫が占める位置は漠然としていた。それが明治になって、同じ「虫」であってもより個別的・限定的に捉えられ、理論的に明確に位置づけられるようになったと言える。

これは、言葉が共通していても意味が変わった事例だが、もちろん反対に新しい語彙の導入も少なくない。とくに目立つのは、消化器の衰弱、萎黄病、酸敗液、経行不調、佝僂病、^{きすてる}喜斯的兒 (ヒステリー)、^{いぼこんでる}依剥昆埵兒 (ヒポコンドリ-)、^{れうまちす}癩麻質斯 (リウマチ) といった病名である。これらは『心得』期には、本論の前の「功能書」(M11 3丁ウ以下) や「^{こうのう}主治」(M34 1丁ウ以下) でまとめられている。そしてそれぞれがどういう症状で、従来のどの病気に相当するかが記されており、そうやって従来の見方への架橋がなされている。

また、本文の中に説明・記述のために使われる言葉にも、新しいものがあり、それらはしばしば、振り仮名によって伝統との連続性を保とうとしている。たとえば以下のようなものが挙げられる (明治11年版)。

「消化」：こなれ (*「金礎」では「不消化 (こなれず)」が一度だけ)

「健康」：たっしゃ、すこやか

「滋養」：ちからづく、せいのつく

「胃液」：いえき

「胃囊」：いのう (*M15, 34では「ゐぶくろ」とも)

「血液」：ちしる、ち、けつえき (*M15, 34では「ち」「けつえき」)

「機械・器械」：どうぐ、きかい (*M15, 34ではなくなっている)

「機関」：どうぐ、さいく、きかい (*M15, 34では「しかけ」)

「作用」：はたらき

「分娩」：さん

「運動」：みうごき、うんどう（M11では最後の章まで「みうごき」、
「大人養生の心得」から「うんどう」；M15, 34ではおもに
「うんどう」、たまに「みうごき」）

「関節」：ふしぶし（*M11では1度だけ出てくる。M34では「くわんせ
つ」の読みで頻出）

さらに、運動の意義を強調し、詳しい説明をしているのも、西洋からの
影響であり（cf. M11 18丁ウ以下；M34 14丁オ以下）³⁷⁾、本文の中でも
「西土にては」^{はかくに}と西洋のものとして紹介している（cf. M11 19丁オ）。その
他、本の中で占める比重は軽いが、『心得』期に新たに登場したのは、体
を清潔にするために入浴するという考え方である。本文には子どもの入浴
について、「屢^{しばしば}温^{あたた}かき湯^ゆにて其體^{そのからだ}をあら洗^きひ、清潔^{きれい}にして、」（M11 9丁
オ）と述べられている。以前拙論で述べたように、かつて入浴は、体の気
の流れを循環させるために行われた。清潔さのための入浴は、江戸末期から
現れ、明治になってから一般化する³⁸⁾。

その他、母乳に代わるものとして牛乳について詳しい説明があったり
（cf. M11 8丁オ以下）、コンデンスミルク（「牛^{うし}の乳^ちを煎^につめてブリキに
入れたる物^{もの}」）について言及されている（cf. M11 8丁ウ）。

また規則的な授乳・食事という観念も、明治以降の特徴である。たと
えば、牛乳について「牛^{うし}の乳^ちにても葛粉^{くず}かたくりにても、生れし當座^{むま}は一時^{とうぎ}
毎^{ごと}に少しづつ^{あた}與^{つき}へ、一ヶ月^{すき}を経ての^{のち}後は、二時ごとに與^{あた}ゆべし。」（M11
8丁ウ）とあり、離乳食についても、「之^{これ}を與^{あた}ゆるに、必らず時^{かな}こく^じを正^{ただ}
くすべし。」（M11 10丁オ）。大人も含め、より一般論として、「飲食^{のみくひ}は必
らず時^じ刻^{こく}を定^{さだ}むべし。」（M11 18丁オ）、「食事^{しょくじ}は毎日^{つねに}其時刻^{そのじこく}を違^{ちが}へぬやう
同^{おな}じ時^{とき}にすべし。」（M34 12丁ウ）と、規則的食事への指示が見られる。

こうした細かい変化も、西洋の医学や文化の受容の結果であり、勝信、
勝秀が新しい知を精力的に取り込み、奮闘していたことが分かる。

結び 曖昧さの合理性

『小児養育金礎』と『小児養育心得』、さらに『大人攝生小児養育心得』は、その記述内容を時代に合わせて柔軟に変化させていった。これは、著者が薬屋であったこと、そしてこの本が能書として書かれたということと密接に関連している。著者も本そのものも、けっして専門的ではないがゆえに、臨機応変に対処できるし、しなければならないのである。

とはいえこの本の内容は、けっしていい加減なものではない。石田家の三代は、たしかに医者ではなかったが、勉学熱心で気骨ある家系であったようだ³⁹⁾。『金礎』期から『心得』期に移行するさい、勝信は新しい西洋の知識を貪欲に摂取したと思われる。それは、明治11年版『心得』の「脾胃養生の心得」における胃の構造や機能、消化作用についての彼の記述からうかがえる。

その内容が専門的に見て正確かどうかは、さしあたり重要ではない。むしろ注目すべきは、第2章2) で論じたように、そこにおける転換が、脾肝薬王圓の薬の作用や主治に対しても、首尾一貫した影響を及ぼしているという点である。しかもそれによって脾肝薬王圓は、かつての根本薬としての華々しい地位を捨てることになった。

勝信自身がこのような見方をしていたのかどうかは分からないが、商売人として収益拡大を狙うなら、西洋医学に由来する新しい語彙は、宣伝用にだけ効果的に使い、幅広くいろんな病気に効く根本薬として売り続けることもできただろう。しかし『心得』の記述は、あくまで内容的な整合性を優先している。ただしその整合性は、本全体にわたるものではない。この点が重要である。

本の中には、西洋の医学や文化の影響による新たな言葉や概念がたくさん登場する。他方で、従来の語彙もまだ多く使われており、内容的に矛盾を含んでいる。このことは、むしろ積極的に評価すべきことであろう。というのも、薬の能書を兼ねたこの本の役割は、顧客であるさまざまな人々に接近することであり、したがって第一に重要なのは、正確な知識を提示

することではなく、有益な知識を無理のない形で媒介することなのだ。そこが専門家である医師や学者と、薬屋との違いである。

けれども「無理のない形」がどんなものであるかは、簡単には決まらない。おそらくそのせいであろう。明治15年の改訂以降、内容、表現ともに伝統的なほうへ戻っている。たとえば、胃の解剖学的構造・機能、消化のメカニズムに関する記述は、明治15年以降はなくなっている。それと同時に、明治11年版では消えつつあった「脾胃」の語が、より多く使われている。また、たとえば、次の二つの対応する箇所を比較してみよう。明治11年版では「人^{あるひ}或^きは依^や剥^ま昆^ひ埵^ち兒^の・喜^み斯^ち的^な兒^や等を病^やむが如^{これみな}きは、是^{やまひ}皆^{もと}其^{うんどう}病^{かく}原^{よつ}常^{ちしる}に此^{めぐりよろ}運動^{しん}を欠^{きう}に由^うて、血^ふ液^{さげ}の循^{はつ}環^{どう}宜^せしからづ。神^{しん}氣^き内^{うち}に壓^ふ塞^さて發^{はつ}動^{どう}せざるに因^よる。」(M11 20丁ウ)となっていた。これに該当する15年版以降の箇所では、「人^{ひと}々^び或^{また}は氣^きの病^{やまひ}、或^{また}は留^{りう}飲^{ぬん}、或^{また}は婦^ふ人^{じん}血^ちの道^{みち}等^な疾^{やむ}が如^{ごと}きの類^{るぬ}は、是^{これみな}皆^{その}其^{やまひ}病^{もと}の原^はは、此^{この}運動^{うんどう}を缺^かくによつて、血^ち液^めの循^{めぐり}環^{よろ}宜^せしからず、神^{しん}氣^き内^{うち}に壓^お塞^{ふさ}て發^{はつ}動^{どう}せざるに因^よるものなり。」(M34 14丁ウ)となっている。さらに、明治11年版では消えていた「五疳」の子どもを描いた挿絵(cf. M34 6丁ウ・7丁オ；これはK4 12丁ウ・13丁オとほぼ同じ)が、15年以降復活している。11年版ではまだかろうじて本文でも使われていた「疳」は、その後まったく使われなくなり、挿絵じたいは本から内容的に浮いてしまっているのに、である。

こうした記述の揺れ戻しは、明治11年『心得』の内容が、読者にとって先へ行きすぎていたという判断によるものと思われる。明治15年の再改定の結果、矛盾はかえって大きくなった部分もある。しかしそうした不調和を含みつつ、それを許容し、包み込んでしまう「いい加減さ」こそが、この本の強みでもある。そこには、商売という形で民衆へと接近することを第一義とする薬屋だからこそ可能だった知の形態がある。そしてそれはけっして不合理なわけではなく、「曖昧さの合理性」とでも呼ぶべきものを備えた、きわめて現実的で戦略的な知性なのである⁴⁰⁾。

参考文献

池田東園（編）

「京都売薬盛大鑑」、明治9年（1876）。＊国会図書館・内藤記念くすり博物館蔵

石田秀美（監訳）

『現代語訳 黄帝内経素問 上巻』東洋学術出版社、1991年。

梶谷真司

「医療における現実の多元性と多層性——アーサー・クラインマンの現象学的・解釈学的医療人類学」、「帝京国際文化」（帝京大学文学部国際文化学科編）第19号、2006年、93－122頁。

「江戸時代の育児書から見た医学の近代化——桑田立齋『愛育茶譚』の翻刻と考察」、「帝京国際文化」（帝京大学文学部国際文化学科編）第20号、2007年、65－118頁。

「江戸時代の育児書の黎明——千村真之『小児養生録』の翻刻と考察」、「帝京大学外国語外国文化」（帝京大学外国語学部編）創刊号、2008年、71－131頁。

「江戸時代における身体観の変化とその哲学的意義——蘭医方以前と以後の育児書を手掛かりにして」、「実存思想論集XXIII アジアから問う実存」（実存思想協会編）第2期15号、2008年、103－119頁。

「母乳の自然主義とその歴史の変遷——附 岡了允『小児戒草』の解説と翻刻」、「帝京大学外国語外国文化」（帝京大学外国語学部編）第2号、2009年、87－163頁。

香月牛山

『小児必用養育草』元禄16年（1703）；山住正巳・中江和恵『子育ての書 1』平凡社（東洋文庫285）、1976年。

北澤一利

『「健康」の日本史』平凡社、2000年。

京都商工人名録発行所（編）

『京都商工人名録』大正11年（1922）。

桑田立齋

『愛育茶譚』嘉永6年（1853）；梶谷真司「江戸時代の育児書から見た医学の近代化——桑田立齋『愛育茶譚』の翻刻と考察」、「帝京国際文化」（帝京大学文学部国際文化

学科編）第20号、2007年。

瀧澤利行

『近代日本健康思想の成立』大空社、1993年。

辻本治三郎（編）

『京都案内都百種』尚徳館、明治27年（1894）。

傳維康・呉鴻洲（編）

『中国医学の歴史』（川井正久編訳）、東洋学術出版社、1997年。

内藤記念くすり博物館

『くすり広告』（くすり博物館収蔵資料集② 野尻佳与子編）、1995年。

『くすりの広告文化』（平成15年度企画展図録 稲垣裕美編）、2003年。

長友千代治

『江戸時代の図書流通』思文閣出版（佛教大学鷹陵文化叢書7）、2002年。

根本光人（監修）／根本幸夫・根井養智（著）

『陰陽五行説 その発生と展開』薬業時報社、1991年。

平野重誠

『病家須知』天保3年（1832）；小曾戸洋監修・中村篤彦監訳『病家須知 翻刻訳注篇
上』農山漁村文化協会、2006年。

養拙齋退春（編）

『小兒療治調法記』正徳5年（1715）。

『小児養育金礎』諸版の翻刻

以下、『小児養育金礎』、『小児養育心得』、『大人攝生小児養育心得』を翻刻する。選んだ版は、奥付に年が明記されたものに限定している。ただし、第1部第2章の「書誌学的考察」において述べたように、実際の刊行年が奥付とずれていると思われるケースもあるし、奥付が同じであっても、実際には版が違う場合もある。しかし版の名称としては、以下、奥付の年にしている。

『小児養育金礎』の翻刻に際しては、嘉永4年（1851）版を選んだ。初版の文化10年（1813）版ではなく、こちらを選んだ理由は、本としての完成度が高いこと、また、最後の明治7年版まで、中身全体（内容、文章、挿絵）に関してベースになっているのが、嘉永4年版であることによる。初版の重要性は高いが、その記述については、翻刻した嘉永4年版の本文か注で、重要な異同を指摘するにとどめた。

慶応元年版と明治3年版はほぼ同じなので、一緒に翻刻した。明治7年版は、異なる部分がやや多いので別に分けた。いずれの版も、嘉永4年版の部分的な改訂である。したがって、異なる部分だけを翻刻し、それ以外は本文や注で違いを説明しておいた。

『小児養育心得』は、明治11年版を翻刻した。これは活版印刷であり、「書誌学的考察」で注記したように、これと類似の版がある。両者とも序の年は同じ明治9年だが、この類似版のほうが早い時期に出た可能性もある。しかし奥付に刊行年がないので、明治11年版のほうを選び、この時期はこちらで代表させることにした。

『大人攝生小児養育心得』が最終版となる。このタイトルで出ているのは、明治34年刊だけで、これも活版印刷である。奥付にはこの版の改正が明治15年と記されているが、実際に明治15年に出ているのは木版印刷で、内容・表記ともに明治34年のものとは相違点が少なくない。したがってこれは明治34年版と称することにした。15年版との異同は注の中に記してお

く。なお、図版は末尾（文献表の前）にまとめておいた。

凡 例

- ・各版の定本は以下のとおり。

『小児養育金礎』

文化10年（1813）版：名古屋工業大学版

嘉永4年（1851）版：米国カリフォルニア大学バークレー校三井文庫版

慶応元年（1865）版：自分の所蔵

明治3年（1870）版：『江戸時代女性文庫』第57巻（大空社、1996年）に所収の謙堂文庫版（一部文字が脱落しており、そこはカリフォルニア大学サンフランシスコ校医学部図書館所蔵の版で補った。）

明治7年（1874）版：自分の所蔵

『小児養育心得』

明治11年（1878）版：自分の所蔵

明治15年（1882）版：自分の所蔵

『大人攝生小児養育心得』

明治34年（1882）版：自分の所蔵

- ・原文の変体仮名は現在使われているもの（「ゐ」や「ゑ」を含む）にし、それ以外の仮名遣いは極力原文のままにした。ただし濁点については、読みやすさを考え、現代の用法に従っており、原文にはない箇所でも補った。
- ・句読点は、原文を尊重しつつも、読みやすさを考えて適宜追加・削除した。
- ・左右に振り仮名がついている場合、左側のものは、漢字の後に（ ）で記した。
- ・明治11年版では、振り仮名が本文の左側についており、箇所によっては右側に傍点（^ゝ□□や^ゝ□□）が付してある。その場合、傍点は下線に代えて表記した。
- ・平仮名だけで意味が取りにくいところは、直後に〔 〕で漢字を付した。
- ・漢字は、活字で表記可能な限り、原文のままの字体にした。
- ・段落や文の最初にある○印は、原文どおりの箇所に入れてある。
- ・明らかな誤字脱字は訂正した。

石田鼎貫
小児養育金礎

【嘉永4年（1851）版】

（表紙裏）

此良^{くすり}劑^{とし}は歳^{とし}により少^{すこ}しづつの加^か減^{げん}にて候間、御^ごもとめの節^{せつ}、御^ご使^{つか}候^ひ
御^ご病人^{ごみやうにん}の歳^{とし}、御^ご失念^{ごしつねん}なく、御^ご申し越^こ可^べ成^{なり}候^う。41)

*初版文化10年版には、最初に以下のような序がある（cf. 上1丁オ）。

此本得^{とく}と御^ご披^ひ見^{けん}被^き下^げ、近^{ちか}付^づの内に能^{のう}書^が相^{さう}應^{おう}の病^び症^{じやう}候^うはば御^ご披^ひ露^{ろう}の段^{だん}、
伏^{ふし}て頼^{たの}入^み候^う。扱^{さて}また難^{なん}渋^{じう}にて薬^{やく}料^{れう}出^で来^き兼^{かね}候^う方^{かた}へは、全^{ぜん}快^{くはい}まで施^せ薬^{やく}いた
し度^ど、心^{しん}願^{ぐわん}候^う間、御^ご町^{ちやう}役^{やく}の内^{うち}が御^ご家^け主^{しゅ}より一^{いち}寸^{すん}添^{そへ}状^{じやう}給^く度^ど候^う。右^{みぎ}添^{そへ}
状^{じやう}持^も参^{さん}の人^{ひと}は何^{いか}ほど薬^{やく}数^{すう}かさなり候^うとも、薬^{やく}代^{だい}は勿^な論^{ろん}、品^{しん}もののにいた
るまで、決^{けつ}而^{して}受^う不^ふ申^{しん}候^う間、此^{この}儀^ぎ御^ごうたがひなく御^ご世^せ話^わの程^{ほど}頼^{たの}入^み候^う。

（1丁オ）

脾^ひ肝^{かん}薬^{やく}王^{わう}圓^{えん}は、文^{ぶん}化^{くわ}四^し卯^{みづう}年^{ねん}42)より誓^{ちかひ}をたて、弘^ぐ通^{づう}43)せしめしに、冥^{みやう}加^がに
かなひ、追^{おひ}々^{おひ}繁^{はん}盛^{じやう}し、平^{つね}人^{ひと}はもとより、御^ご堂^{だう}上^{じやう}44)様^{やう}方^{かた}、御^ご大^お名^{だい}様^{やう}方^{かた}まで
も御^ごもちひに相^な成^{じやう}る事^{こと}、実^{じつ}に難^な有^{いう}存^{ぞん}じ奉^{ほう}り、仍^{よく}て弥^{くすり}薬^{くすり}製^{せい}45)を大^{たい}切^{せつ}になさ
ん為^{ため}、予^{しやう}八^{はち}十^{じう}一^{いつ}歳^{さい}より生^{しやう}涯^や塩^{しん}米^{まい}を断^たて、麥^{むぎ}・蕎^{そば}麥^{まい}・青^{あを}物^{もの}類^{るい}を水^{みづ}煮^{だき}し、こ
れを食^{しょく}し、當^{とう}辰^{ちん}年^{ねん}にいたりて、八^{はち}十^{じう}五^ご歳^{さい}まで四^しヶ^け年^{ねん}の間、謹^{こん}で製^{せい}薬^{やく}する事^{こと}、
予^{おの}に於^よて飲^のびても、猶^{なほ}余^{あま}りあり。願^{ねが}は子^し孫^{そん}、予^よが患^ぐ意^いを廢^{すて}せず、謹^{つし}みつづ
しんで守^{まも}らん（1丁ウ）事^{こと}を上^{てん}天^{てん}に祈^{いの}り奉^{ほう}る。其^い趣^そ意^いは、抑^{おさ}此^こ脾^ひ肝^{かん}薬^{やく}王^{わう}圓^{えん}
はわが家^か方^{ほう}にて家^か方^{ほう}ならず。所^い謂^{いは}天^{てん}我^がに此^{この}奇^き方^{ほう}を授^{さづ}け
給^くひ、一^{いつ}心^{しん}正^{せい}念^{ねん}に
精^{せい}製^{せい}し、普^{あま}く四^よ方^{ほう}に及^{およ}びして、天^{てん}下^かの病^び苦^くを患^うるもの^{もの}を救^{すく}ふべしと命^{めい}令^{れい}し
給^くふ事^{こと}を感^{かん}得^{とく}せり。よつて薬^{やく}品^{しん}を能^{よく}々^{よく}調^{しら}べ、善^{よき}を撰^{えら}び、悪^{あし}きを除^{のぞ}き、調^{てう}製^{ごう}
に心^{こころ}を尽^{つく}し、能^{のう}書^が・包^{つつ}紙^み等^{とう}、龐^そ客^{やく}にせず、将^は又^{また}、薬^{くすり}を求^{もと}むる人^{ひと}の生^う質^{まれつき}

病根を診察し、此薬の當に應ずると不應とを考へ、其應ずべきに薬を与へ、應じがたきには断て与へず。適應ずべしとおもひて、(2丁オ)服用せしむれども、一廻り⁴⁶⁾にて功験なきには、又理て再与へず。尤其奇験あると雖ども、財(かね)乏しく、求めかぬる輩は無料にて与へ、品物だに礼謝を請ずして、全快まで施す。是、聊上天に報ゆる意なり。故⁴⁷⁾に貧き人は、身を恥ず、必来り給へ。

水上のほそきながれも末つひに

うらうらまでもおよべとぞおもふ

安政三年⁴⁸⁾ 辰春 京魚店高倉角
石田鼎貫 八十五齡にてしるす

(挿絵 丁数なし) ⁴⁹⁾

看板 右から せんきの妙薬 りん病の妙薬 よばりの妙薬 づつうの
神剤 せきの妙薬 りうめん薬 脾肝薬玉圓

〈図版8〉店構え

(2丁ウ)

小兒養育金礎標

憐れむべきは、夭兒の疾病に治するの方無きに非ざるも、此れ乃ち能く薬を擇用せざるために、遂に死するなり。潜夫論⁵⁰⁾に日く、壽を養ふの士は、疾に先んじて薬を服す云云。(※原文漢文)

夫、大醫の妙剤たりとも、相應不相應⁵¹⁾あり。たとひ賣薬といへども、⁵²⁾的の中すれば、耆婆・扁鵲も及ぶべからず。大医の薬も不應ときは、數重るとも効なし。いはんや賣薬一薬にて諸病を治することは、あまり大凡⁵³⁾ゆゑ、これを様見ること、文化四丁卯年より同巳年迄三ヶ年の間、四方に施薬し試るに、同症の内に効あると無とあり。然ども是を選

こと 詳ならず、反覆すること又四年、前後七ヶ年施薬なし、酉年にいたりて治と不治とを明白に撰めり。故に此後効なき人、予が薬用ひなきやう、効験の有無を委しく記す能書なれば、此薬用ひの方は、篤と（3丁オ）會得のゆくまで讀給ふべし。たとひ此薬もちひなく共、小児ある方の心得となるべきことも記して、小児養育黄金の礎と題す。

右七ヶ年、施薬中、三四年も腰ぬけ、或は自由叶はざる人、又は盲となれる、小児諸病、大人積氣、留飲、ちの道、或は労咳のるい、難病治したる人々、歓喜の余り、長さ壺間、巾壺尺五六寸の立板に難病全快せし由を詳にするし、銘々の門口へ出されしこと、京都の人はよく存知にて、すなはち京羽二重⁵⁴⁾といへる書に委く出たり。

一ト廻りの内に少しにてもしるしあらば、たとひ一家親類など来て、かか大病に賣薬を用ゆるは覺束なしなど、素人了簡に否める人ありとも、一心堅固にもちゆべし。日々に快氣すること、朝日の昇るごとし。若又一まはりの中に少のしるしもあらざれば、用ゆべからず。

(3丁ウ)

○ 冊 中 目 録 ⁵⁵⁾

こどものやまひあよりおること		さんのせつこころえのこと	
一 小兒諸疾脾胃論	六丁オ	一 臨産心得之事	七丁オ
うまれこころえのこと		こどもそだてこころえのこと	
一 生兒心得之事	八丁ウ	一 小兒養育心得之事	十一丁オ
ひかんのむし ちばなれ		かんかんのむし	
一 脾瘕虫 附乳離	十三丁ウ	一 肝瘕虫 驚風トモ云	十四丁ウ
しんかんのむし ものいふことおそきむし		はいかんのむし	
一 心瘕虫 言 遅 トモ云	十四丁ウ	一 肺瘕虫 散気トモ云	十五丁オ
じんかんのむし せむし		ひいのよほみのしよせう	
一 腎瘕虫 背虫トモ云	十五丁オ	一 脾胃虚諸症	十五丁ウ
むしおこり かたかい		こどものりびやう	
一 癰積 癰虫トモ云	十六丁オ	一 疳 痢 附大人之痢病	十七丁ウ
おとなのひさしきおこり			
附大人之久瘕			
は や く さ はやくさ		ほぞくさ	
一 臍風撮口 丹毒トモ云	十八丁オ	一 臍瘡	十八丁ウ

(5丁オ)

一 痘瘡 ^{はうさう}	十八丁ウ	一 中暑 ^{あつげ}	十九丁オ
一 翻胃 ^{かく}	十九丁ウ	一 眼病 ^{がんびやう}	廿丁オ
一 諸病胎毒論 ^{しよびやうたいどくろん}	廿一丁オ	一 傷寒 ^{しやうかん} 附 後乱心 ^{のちのらんしん}	廿五丁オ
附大人効驗有事 ^{こうげんあること}			
一 留飲 ^{りうあん}	廿五丁オ	一 血閉 ^{ちのみち}	廿五丁ウ
一 勞咳 ^{ろうがい}	廿六丁オ	一 崩漏 ^{ぼうれう}	廿六丁ウ
一 赤白滯下 ^{しらかながち}	廿七丁オ	一 脹満 ^{ちやうまん} 鼓脹 ^{こちやう} トモ云 ^{すいしゆ}	廿七丁ウ
		附水腫	
一 附録 ^{ふろく}	廿九丁		

以上

(4丁ウ 広告)⁵⁶⁾

五才以下 壺廻り 四匁貳分 十才以下壺廻り六匁六分
 用ひやう、當才^{たうさい}⁵⁷⁾より五才迄は、一日に壺ふく、五才より十才迄は壺ふく半、十才より十五才迄は、二ふくづつ小児^{せうに}の好物^{すくもの}に應じ、何べんにももちゆ。

ひかんやくわうゑん
 脾肝薬王圓

十一才以上壺廻り 八匁四分 大人壺廻り八匁四分
 用ひやう 一日に貳ふくづつ食前^{しよくぜん}に白湯^{さゆ}にて用ゆ。大小児とも壺廻り内に心下^{むね}をすかし、乳食^{にうしよく}をよく治め、小便^{をさ}をよく通ずを薬効^{せうべん}とするべし。もし又少しも効驗^{またすこ}なくば、用ゆべからず。

(5丁オの挿絵)

五かん 并 諸虫^{しよちゆう}の図^づ⁵⁸⁾

ひかんのむし きやう風のむし

はいかんのむし しんかんのむし じんかんのむし
かたかひのむし

かんかんのむし

(5丁ウの挿絵)

関東医学館に於て例年四月十九日拝見被為仰付候虫之圖

積氣むし ろうがい「劳咳」のむし はらのむし せんきのむし

〈図版9〉五疳并諸虫の図

(6丁オ)

○小兒諸病脾胃論

萬事物の本をしること肝要なり。其本を知らずしては、苦勞するとも益なし。譬ば艸木の枝葉に糞するとも益なく、其根本に糞するときは、枝葉ともに栄ゆるがごとし。況や人の療治に於をや。夫、人間の身體は、五臟六腑が本なり。五臟六腑のもとと脾なり。又、万物の本は土なり。土は万物を養育(やしなひ)し、脾は食物を受化(うけとる)して、五臟六腑を育ゆへ、脾は五臟の母とも又土ともいへり。土一度虚なれば、万物みな損ず。脾虚すれば、五臟六腑みな衰ふ。甘辛苦酸鹹五味を五臟へわかつうち、脾は甘を主どる。諸疾多しといへども、五臟の不足より發ざるはなし。驚風、辟疾、丹毒、其外小兒虫一切みな五疳より發る。則、(6丁ウ)疳の字は、^{かん}ず^{じん}に甘と書き、^{はい}肺疳、^{しん}心疳、^ひ脾疳、^{かん}肝疳、^{かん}腎疳と云。共にみな脾虚より發ると医書に見えたり。此理にうとき人は、^{はい}肺疳といへば肺の療治し、^{しん}心疳と見れば心の療治をなすゆゑに、いつまで薬を用ゆるとも、^{やま}疾根を治することなく、^{なほ}終に大病の礎となる。これ根本の脾胃の療治をせざるゆゑなり。能々考へ給ふべし。小兒の病、脾虚より發る證は、諸病のはじめ、みな吐乳か、^う秘結⁵⁹⁾なるか、^{しやう}泄瀉か、いづれこの三つにあり。此三症は脾胃虚の所為なり。此症ひとつにてもあらば、^{やま}疾の氣ざすと心得て、^{いそ}急ぎ薬をもちゆべし。外に小兒は大人とちがひ、^ほほしいのしいといふ貪慾の心なければ、^{やま}病を生ずべきことなし。予が良劑は根本の

脾胃を補益、五臓六腑の虚実陰陽を養育するゆゑ、脾肝薬王圓と号す。常に服薬の輩は、万病發することなく、いか程やせ（7丁オ）衰へ、氣みじかく、或は氣重く、或は腰膝ひきつり、ちんばとなる小児たりとも、人の根本の脾胃を補ひ、胎毒を消解（けす）するゆゑ、諸病の根をたち、生れたる日数年数のわりより大きに丈夫になり、奇妙にほうさう〔痂瘡〕軽く、萬病發ことなきゆゑ、産れながら氣丈なるやうに心得、予が神劑の妙効あるを考へる人まれなり。願くは、年久しく諸薬を用ひ効なく、とても死病と覺悟きはめたる病人にもちひ、白雨⁶⁰⁾の雲の晴て快晴になれるごときの効験を見せし。

* 初版文化10年版には、ここに「小瘡心得の事」があるが、内容的には嘉永4年版の「小兒養育心得の事」、11丁ウの第3節にほぼ同じ文がある。

○臨産の節心得の事 附 乱心

先産婦に安生散を用ゆべし。何程むつかしき逆子・横子等の難産にても、母子とも怪我あやまちなく、早く出生すること疑ひなし。薦⁶¹⁾のうへに居直ることおそき程よし。居直りて後、温酒にて、壺式ふく（7丁ウ）用ゆべし。尤前かたより細末となし置べし。

安生散方 車前子（おぼこのみ） 一匁五分 木香 三分

右、安生散は秘方なれども⁶²⁾、遠国の産婦の急難をすく〔救〕はんがため、爰にあらはす。

安産して一七夜の内に薬王圓の大人丸薬一廻り用ひあらば、瘀血のこらず下すゆゑ、女一通りの病なく、風とても引くことなし。

くはいたい みつき すぎ おけつ とどこふ にんしん
 懐胎して三月あまり過て、瘀血の滞りとも、又妊娠ともしれざる時、
 此薬王圓式廻り用ゆれば、懐妊ならば子宮（こぶくろ）をよくあたためる
 ゆゑ、月満るまでいよいよ月水なく、至て産安し。又瘀血の滞りならば、
 十人が十人ながら速に月水あること、此薬の妙なり。これ京（8丁オ）都
 の人々は毎度ためし、能しらるる処なり。

さんごらんしん ふじん このやくわうあん ぢ こうのうきめう
 産後乱心となれる婦人に此薬王圓もちひて治せざるはなし。その功能奇妙
 なること用ひてしるべし。産後にあらずして乱心となれるは、其症種々あ
 りて、男女とも薬王圓にて治する症あり、又治せざる症あり。此薬王圓に
 て治せざる症には、別に奇々妙々の神剤あり。世間に流布する狂気薬は、
 しんき つか むり のぼせ おさ ゆゑ
 心気を勞らし、無理に逆上を抑へんとする故、とかくにあらあ敷、快気
 する歟、死にいたるかの強き薬多く、良もすれば薬ゆゑに死するものあれ
 ども、狂気乱心にて存命より死したる方も、又可なりなどとあきらめ用ゆ
 るは、是非なきこととはいひながら、憐なることにて、歎かはしき事にあ
 らずや。予が神剤は補薬にて、右やうつよき薬にあらず。一廻り式まは
 りと用（8丁ウ）ゆるうちに、神心を補益ひ、脾胃を調へ、自から逆上を
 しづめ、天然と本心にたちかへらしむ神薬ゆゑ、狂気乱心の人にもちひ、
 ことごとく神効ありて、且て害あることなし。実に奇妙の神剤なり。此
 くすり よ いつか ひほう ばいやく このゆゑ おもてかんばん いだ ご
 神薬は、予が一家の秘方にて賣薬にせず。此故に表看板にも出さず。産後
 らんしん ちな ここ しる よ き ち が ひ すてら こま
 の乱心の因みに茲に誌すのみ。世に乱心狂気にて捨れる人、また困る人す
 くなからず。普（ひろ）く施方して、人々にしらせ度おもふ心切なれど、
 そのせう かげん だいじ こころ もしちあん⁶³ らんしん
 其症により加減ありて大事なれば、心にまかせず。若知音⁶³に乱心の人あ
 らば、実に人助けなれば、早くしらせたまへ。用ひ度方は製薬いたし進ず
 べくる。其容鉢申越るべし。

うまれこころえ 〇生児心得の事⁶⁴

しゆつさん せつ さんいしや とりあげばば ははおや たいせつ おも まづ は は うち
 出産の節、産科・産婆ともに産婦を大切と主に先産婦に打（9丁オ）か

かり居て、産児のことは後になるものなり。尤母を大切にすることは、左もあるべく、悪きといふにはあらず。其ときは、傍の人兼てより心得居て、産児の初聲あぐるまでに、布か紗の裂を指先に巻いて、早く産児の口中をよく拭取べし。小児母の胎内を出るとき、口のうちに含みたる穢毒、初聲に應じ咽に入り、右腎・包絡にしづみ、疹痘、小瘡、白くば、其外腫物の害をなすと、大成論に見たり。出生して間なく、大便黒き飴のやうなるを通ず。俗に「かにばば」とも「かにここ」ともいふ。これは産れざる先に、母の胎内にて受たる胎毒なれば、随分沢山に通ずるがよし。乳をつ[付]くる⁶⁶⁾までに甘艸目方式ぬ五分⁶⁷⁾、皮をさりきざみ炙り、水壺合入、三分めに煎じ、綿にひたし、壺式ふく用ゆれば、胎毒のこらず(9丁ウ・10丁オ 挿絵)(10丁ウ)かにここに通り、又泣聲に應じてのみたる穢毒は、痰涎となりて、残らず口へ吐出すゆゑ、成長して智慧・才覚たくましく、無病長寿なることうたがひなし。又陀羅すけ⁶⁸⁾を用ゆる人あり。是も法にあり。可なりといへども、予はとらず。此法による人は、だらすけ其余、惣じて外の薬は、何によらず用ゆべからず。

(9丁ウ・10丁オの挿絵)

りんさん ちのみこやういく
臨産 乳飲子養育

〈図版10〉臨産乳飲子養育

生れ兒に乳をつけること、二十四時⁶⁹⁾すぎでのますが定法なり。これ産婦の乳、二十四とき過ぎれば、張らぬもの也。其間は乳をあたへずとも小児に害なし。又、乳をつけるとき、新乳は小児下痢であし[悪]しといひて、しばらく捨てる人あり。大なる誤なり。母の胎内にて受たる胎毒を瀉さんが為に自然と出る薬乳なれば、決して捨べからず。其儘あたへて害あることなく、泄瀉てよし。程なくくだりて止むものなり。これ天自然の(11丁オ)理なり。とかく母の乳もいまだ張ざるに、二十四時をまちかね、他にもとめ求て早く吞し、或は結構なる薬乳をあら乳といふて、しばらくすてて用ひず。人智をもつて天理に違背ゆゑ、胎毒脾腑に沈み、成長のち迫

も大病の礎となる^{いしづえ}70)。心得べきの第一なり。但産子格別よはくして見ゆるときは、用捨有べし。

○小兒養育心得の事^{せうにやういくこころえ}71)

乳母に留飲あるか、又熱或は梅毒^{ねつあるひ しつけ}72) 等ある人の乳、決して用ゆべからず。小兒色々の変症を發ものなり。又多房^{たいん}73) なる乳母の乳は、小兒肝を損じやすし。心得べし。

乳母の飲食に、小兒を強くせんとて油厚きもの、あるひは鮮魚の類を味噌汁などにして食することあり。胎毒また痘瘡等に宜しからず。ただ常に塩からき物を食すべし。大によし。

(11丁ウ)

常々大便に心を付て見るべし。大に黄なる色は平便にてよし。若青く或は黒く白くなるときは、必 病あり。其節、氣丈に見ゆる共、程なく病ひ發るなり。胎毒の所為もあり。用心して早く薬を用ゆべし。但薬王圓を用ひて、大便の色変るは大によし。

余り大切に^{あま}して厚衣^{たいせつ}さすべからず。暖め過て却て皮膚^{あつぎ}よはくなり、成長^{あた}のちまでも、とかく風邪^{すぎ}をうけやすく成ものなり。

脾^ひつつき小兒は氣血よくめぐり、胎毒^{せうに}といふおもき血も浮んでめぐる故、表^{きけつ}へ發し、小瘡^{ひやう}其外種々の腫物となり、自然に胎毒消解するなり。しか然るに不心得^{はつ}の人は、上より附薬^{くさ}して、瘡毒^{しゆじゆ}内攻し、大ねつを發し、種々の病^{しゆじゆ}を引出す。是心得の第一なれば、必 附薬・ぬり薬はすべからず。

凡て小兒養育の心得は、仕なれによるものなり。市中さわがしき^{まちなか} (12丁オ)

所に^{そだちこ}育児は^{なりもの}鳴物・^{おほごゑ}大声を^{きき}聴ても、^{おどろく}驚動の^{うれひ}うれひなし。清閑^{しづか}の處に^{そだちこ}育児は
^{たまたま}適^{おほごゑ}大声・^{なりもの}鳴物を^{きき}ききて、^{きやうふう}驚風^{おそれ}の恐あり。家内^{かなひ}ばかりに居て、^{にちちうてん}たまたま
^{いづ}日中雨天に出れば、^{ぐはいかん}外感^(しきあたり)の^{おそれ}恐あり。^{あそびかた}遊方は^{およそずいゐ}凡随意にし
て^{うれひ}うれひなきものなり。^{はだしあそび}跣遊・^{つち}土な^{べつ}ぶりに^{よろ}別して^{この}宜し。^{そだち}好んで^{こころう}さすべし。
^{たぶんまづ}多分^{そだつ}貧しく^{けんご}育^{よいしゆ}小児は^{そだち}堅固^こにて、^{たびやう}深窓⁷⁵⁾の^こ小児の^{そだつ}多病^{せいちやう}なるを見て^{こころう}も心得
べし。^{うまれて}初生より^{あひだ}一^{かくべつ}式年の^{そだつ}間は、^{せいちやう}格別に^{せうに}心を^{やうじやう}付けて^{せうに}養育^{せうに}べし。^{やうじやう}成長^{せうに}の^{やうじやう}ちまで
も、^{つねづね}多病^{あんしよく}なると^{すこ}堅固^{それ}なるとは、^ひ初生^あて^{そん}一^{ごかん}二年^{くはいちう}の^{しよせう}間の^{へん}養生^{へん}にあり。^{へん}小児は
^{つねづね}平常^{あんしよく}とかく^{すこ}飲食^{それ}を^ひ過^あし^{そん}やすく、^{ごかん}夫より^{くはいちう}脾胃^{しよせう}を^{へん}損^{へん}じ、^{へん}五^{へん}疳^{へん}、^{へん}蛔虫^{へん}、^{へん}諸症^{へん}に^{へん}変
じ、^{つひ}遂^{なんぢ}には^{せう}難治^{おそ}の^{おそ}症^{おそ}に^{おそ}いたる。^{おそ}恐^{おそ}る^{おそ}べき^{おそ}事^{おそ}に^{おそ}あらず^{おそ}や。^{おそ}此^{おそ}脾^{おそ}肝^{おそ}葉^{おそ}玉^{おそ}圓^{おそ}は、^{おそ}
^ひ脾胃^{おそ}を^{おそ}補益^{おそ}の主^{おそ}る^{おそ}良^{おそ}劑^{おそ}なれば、^{おそ}初生^{おそ}より^{おそ}一^{おそ}二年^{おそ}の^{おそ}間に^{おそ}油^{おそ}断^{おそ}なく^{おそ}用^{おそ}ゆる^{おそ}こと、^{おそ}
^{もつともかんよう}尤^{もつともかんよう}肝^{もつともかんよう}要^{もつともかんよう}なり。

(12丁ウ・13丁オの挿絵)

小児養育の心得

かくのごとく^{ひまん}肥満^{くさけ}し、^こ瘡毒^{かへつ}の^{きやうふう}うれへも^こなき^{きやうふう}子^こに^{かへつ}却^{きやうふう}て^{かへつ}驚風^{かたかひ}、⁷⁶⁾かたかひ⁷⁶⁾、
はやくさなどの^{きうへん}急変^{きうへん}あり。
飛くさの^{おほ}るい^で多^きく^き出来^きる^き小児^きには^き虫^きの^き気^き少^きなし。

せむし

ひかん〔脾疳〕の虫は乳ばなれ^ちのときより多^ちくは^ちや^ちせ^ちお^ちと^ちろ^ちふ^ち也。

心疳^ちよりの^ちあ^ちは^ちう

はいかん〔肺疳〕病

〈図版11〉小児養育の心得

(13丁ウ)

此^{のうがき}能^{じゆくらん}書^(くだされ)御^{ごぜんくはい}熟^{ごぜんくはい}覧^{ごぜんくはい}被^{ごぜんくはい}下^{ごぜんくはい}、^{ごちいん}御^{ごちいん}全^{ごちいん}快^{ごちいん}な^{ごちいん}され^{ごちいん}候^{ごちいん}御^{ごちいん}方^{ごちいん}より、^{ごちいん}御^{ごちいん}知^{ごちいん}音^{ごちいん}の^{ごちいん}御^{ごちいん}方^{ごちいん}へ、^{ごちいん}此^{ごちいん}
^{ごちいん}本^{ごちいん}、^{ごちいん}御^{ごちいん}融^{ごちいん}通^{ごちいん}・^{ごちいん}御^{ごちいん}披^{ごちいん}露^{ごちいん}被^{ごちいん}下^{ごちいん}候^{ごちいん}様^{ごちいん}、^{ごちいん}偏^{ごちいん}御^{ごちいん}頼^{ごちいん}申^{ごちいん}候^{ごちいん}
^(ひとへにおたのみもうしどうろう)

ひ かん むし
○脾疳の虫

夫、小児は脾胃ととのいまだ調いたつひがたきゆゑ、六七八歳まで至て大切也。とかく母子の乳食不は慎にうしよくふつつしみより脾ひを損そんじ、萬病發まんびやうはつす。甚はなはだしきを脾疳ひ かんといふ。就中乳ばなれの節、食物の不慎せつ しよくもつ ふつつしみより脾腑ひ ふを損そんじ、瘦やせおとろふにしたがひ、益ますます食しよくを貪むさほり、昼夜ちうやとなく湯茶ゆ ちやをこのみ、或は餅あるひ、いり豆もち、また塩まめからき物しほを多く好む。これみないよいよ脾胃のために毒どくとなり、水氣すいきを小便せうべんへみちびくこと能あたはず。食物しよくもつ化れず、そのままに大便だいべんへくだること、しばしばかぞへがたし。水氣すいきはどここふりて、腹太鼓はらたいこのごとくに張満はり、あるひは雀目とりめ、または白膜はく入いり、(14丁オ)つひに盲人めくらとなり、悉皆しつがい、餓鬼がきのごとく骨ほねと皮かわに瘦衰やせおとろへて、十人が十人ながら死しにいたる。是至て難症これいたつ なんせうなれども、予が神劑くすりを用ひあらば、根本こんぽんの脾胃ひ むを補益おぎなふゆゑ、いか程六かしき大病おほいにて、忒三服ふくにて下くだりを止め、惡毒あくどく・水毒すいどくを小便せうべんへ残のこらず通つうじ、腹はらの張はりを消けし、眼めをあきらかにす。追々おひおひ用わうゆるに應ひじ、肥肉ひにくをまし、十人が十人ながらきはめて治ちやするゆゑ、脾肝藥王圓なづと号なづく。

乳ばなれの小児食養生せうにしよくやうじやう ○ 乳味湯にうみだう、かゆ、或は和あるひら粥やはのやうなる飯かきすこしづつ与あたゆるがよし ○ 餅もち、いり豆かた、だんごるい、堅く忌はんべし。

右の症せう、皆々みなみな治ちすといへども、藥くすりの用もちひおそきときは、大便だいべんの色いろしろく、魚うをの腸はらわたの腐くさりたるごとき香にほひするなり。是腹中これふくちうの水毒すいどくにて臟腑ざうふ腐くさり通つうじ、十日余の内に必うちらず死かなする人なれば、用しても効こうなし。用もちゆべからず。

(14丁ウ)

かん かん むし きやうふう
○肝疳の虫 驚風ともいふ

此疳このかんは食物しよくもつの不慎ふつつしみより、脾胃ひ む虚きよして、瘀血心肝お けつしんかんの二臟ざうにせめ入いり、肝膽かんたん不足ふそくし、神心しんじんさだまらず、少しの事すこも恐おそれびくつく也。目めをひきつけ、

手足をびくつかせ、^{そつし}卒死するを、^{きうきやうふう}急驚風といふ。ゆるがせなるを^{まんきやうふう}漫驚風といひ、^{いたつ}至て^{くはきう}火急なる病なり。此症に^{やくわうあん}葉王圓を用ひあらば、一ふくにて^{ひき}引つけを治すること請合なり。続て用ひあらば、^{いつしやう}一生根を切る^ね77)。ゆだんするに於ては、五日め十日めにおこるを^{てんかん}癲癇といふ。これにいたらば、^ち治することあたはず。用ゆべからず。

○^{しんかん}心疳の虫 ^{げんち}言遅ともいふ ものいふことおそきむしなり

此疳は^{かん}驚風^{きやうふう}ののち^{おこ}發る^{しん}心の^{ぞう}臓のわづらひにて^{ざい}78)、七八歳になりても、^{した}舌まはらず、^{おほ}多くは^ち智恵^あまへめ⁷⁹⁾なるものなり。此むしに^よ予が(15丁オ)くすりを^す数十人にもちひためし見れども、^{すこ}少しも^{しるし}効なし。よつて用ゆべからず。

○^{はいかん}肺疳の虫 ^{むし}散氣ともいふ はなのした赤き虫なり

此疳は^{はな}鼻のした^{あか}赤くただれ、或は^{あるひ}はなをせせり、^{はな}湧多く^{いづ}出るをいふ。この^{むし}症は^ひ脾胃^{あきよ}虚より^{はいふ}肺不足して^{おこ}發る^{やまひ}疾なるゆゑ、此薬王圓二廻り用ひて^{やくわうあん}奇妙に^{もち}治す。

○^{じんかん}腎疳の虫 ^{せむし}背虫ともいふ

これ^{たいどくじん}胎毒腎にしづむこと^{おほ}多きゆゑ、^{こつずゐ}骨髓に^{しやう}むしを^せ生じ、^{ふし}脊ほねの^{しよく}節を食して^{いがむ}屈曲なり。此虫は^{むし}すこし^{いが}曲むうちに、此薬を^ちもちゆれば治す。しかれども、^せ脊肩^{かた}小兒^やを負^こたるごとく^{おひ}まがりたる^{ほね}骨はのびざるなり。

(15丁ウ)

○脾胃虚諸症・疳あらまし

生米・壁つち・土器・けし炭など食ふ児は、式三服にて治す。

瘦おとろへ、額に青筋いで、頭大なる児にとり分よし。

頭にかぶと着たる如瘡に常々もちゆれば、ことごとく治す。

寝いりて鼻つまるか、或ははぎりし⁸⁰⁾、手足をびくつかす児によし。

顔色あしく、夜なき、物おどろき、気のみぢかき児は立処によし。

疳にて常々ねついで、びくびくしてなきいる児には別てよし。

腹に塊ありて胸さきへ差込、眼を見つめる児には至てよし。

(16丁オ)

右、五臓のわかちありといへども、多くは脾虚して瘀血をまし、疳のむしを生ずるに至極せり。能々考ふべし。

○癖癩 癩虫とも云。 附 大人の久瘡

この疳は、腹に塊りありて、寒熱往来し、大人の瘡に似たり。俗にむしおこりといふ。薬王圓丸薬を小紫胡湯の煎じ汁にて用ゆべし。あきらかに治す。

せうさいこたうのはう 小紫胡湯方	さいこ 紫胡八分	わうごん 黄芩五分	にんじん 人参二分
	かんごう 甘艸一分	はんげ 半夏三分	たいさう 大棗三分

右六味に生姜一片入て、常のごとく煎じ、一日に壺ふくに薬王圓丸薬式ふくづつを兼用ゆべし。

大人の瘡、半年も一年も久しくおちざるに、右の通り用ひて(16丁ウ・17丁オ 挿絵)(17丁ウ)速におちること奇妙なり。しかし三四ヶ月余の久

おこり 瘡ならでは効すくなし。
しるし

(16丁ウ・17丁オの挿絵)

せうにのくすり おとな もち かう ろん
小児薬を大人に用ひて効ある事を論ず 但二十二丁目にくはし。

〈図版12〉 大人に用ひて効ある事

○^{かんり}疳痢 附 ^{たいじん りびやう}大人の痢病

せうに りびやう りびやう ひ み しわざ おけつ ひ あ いり
小児の痢病は、大人の痢病とちがひ、脾胃の虚の所為にて、瘀血脾胃に入、
くだり おもふ はら かんねつわうらい ひ あ き
下痢てのち重して、腹しきりにいたみ、寒熱往来し、脾胃の気よはり、
ふくりき やせ はなはだ せう およそ し
腹力ぬけて瘦おとろふ。甚むつかしき症にて、凡十人が十人ながら死に
いたるなり。しかれども、予が薬王圓 ^{くほうめうたうせん} 煎じ汁にて用ひあらば、
どすうにちにち げん ぢ しん
度数日々に減じ、治すること神のごとし。

	唐 ^{せんきう} 川芎 五分	わうれん 黄蓮 一分	唐 ^{わうごん} 黄芩 五分
光明湯方	せうま 升麻 二分	しやくやく 芍薬 三分	とうき 當歸 五分
	唐 木香 三分	とうにん 桃仁 二分	

(18丁オ)

つね
右八味常のごとくせんじ、一日に壺ふくに薬王圓壺ふくづつを兼用ゆ
べし。きめう ぢ
奇妙に治す。

りびやう よ もち ぐほうめうたう
大人の痢病は、予が薬王圓用ゆるに及ばず。光明湯ばかり一日に三ぶくづ
もち ぢ ふな つく み しよく
つ用ひて治す。鮎の作り身、食してよし。

さいふう さつこう はやくさ
○臍風・撮口 丹毒といふ

此症は、小児^{せうに}うまれて一七夜^{なぬか}のうちに忽^{たちまち}し死^{いたつ}す。至^{きうせう}て急症^こなり。児^{くち}の口^この中^{うち}を見るべし。咽^{のんど}のひこ⁸¹⁾の處^{ところ}が腮^{あご}のうへに粟^{あわ}つぶほどのもの出来^あるなり。これをゆびのさき^{ぬの}に布^{ぬの}をまき、すりつぶし^{やぶ}破^ちれば、血^ち出^{いで}て泣^{なき}声^{こゑ}を發^{はつ}し、
蘊^{よみがへ}生^{なほ}る。尚^よ、予^よが藥王圓^{やくわうえん}を用^{もち}ひてよし。

何事^{なにごと}なくとも、一七夜^{いっしや}のう^うち湯^ゆごと^{ごと}にゆびに布^{ぬの}か紗^{しや}の裂^{きれ}を巻^{まい}て、生児^{うぶこ}の咽^{のんど}喉^{ところ}ひこの處^{ところ}、あごのあたりを能^{よく}々^{よく}あらふべし。はやくさ又^{また} (18丁ウ) 舌^{した}しとのうれひなし。

さいさう
○臍瘡

此症^{やまひ}は臍^{へそ}はれ出^{いで}て、其色^{そのいろ}白^{しろ}くなるか、或^{ある}は瘡^{くさ}のごとくなり、膿^う汁^み出^{いで}て、腹^{はら}しきりにいたむ。至^{いたつ}て大切^{たいせつ}の病^{びょう}なり。予^よが藥王圓^{やくわうえん}を用^{もち}ひて奇効^{きこう}あること神^{かみ}のごとし。

はうさう
○痘瘡

痘瘡^{じこう}は天行^{てんぎ}の邪氣^{じやき}にさそはれ、内^{うち}にある胎^{たい}どくの發^{はつ}するなり。熱^{ねつ}はなはだしく、傷寒^{しやうかん}に似^にてまぎらはしく、若^{もし}傷寒^{しやうかん}とも痘瘡^{とうさう}ともわからざるあひだは、葛根湯^{かつこんたう}のせんじ汁^{しる}にて藥王圓^{やくわうえん}を用^{もち}ひべし。痘瘡^{はうさう}ときはまりなば、藥王圓^{やくわうえん}ばかり用^{もち}ひてよし。あやまちなく全快^{ぜんくわい}するなり。

(19丁オ)

かつこんたうのはう
葛根湯方

かつこん
葛根 七分
しやくやく
芍薬 三分

まわう
麻黄 三分
かんざう
甘艸 一分

けいし
桂枝 三分
たいさう
大棗 二分

右生姜^{しやうが}一斤入て、常^{つね}のごとくせんじ、一日に一ふくに薬王圓一ふくづつを用ゆべし。

又、發熱^{はつねつ}より痘瘡^{でもの}見ゆるまでに、烏犀角^{うさいかく}⁸²⁾を鯨^{さめ}にておろし、壺^ど度に目方式^{めのかた}分づつ水にて用ひてよし。痘瘡^{はうさう}見ゆるやうにならば止む。うせて後^{のち}、再^{また}もちゆべし。

*初版文化10年版には、ここに「痰咳^{たんせき}」の章があり、以下のように記されている（cf. 10丁ウ）。

痰咳^{たんせき}

此^{この}疳^{かん}も脾胃^{ひ い}虚^{きよ}より、乳食^{にうしよく}不化^{こなれず}して痰^{たん}となり、咳^{せき}出^{いづ}るなり。予^よが薬^{くすり}は脾胃^{ひ い}を調^{ととの}るゆへ、痰^{たん}の根本^{こんぽん}を治^{ちす}る也。猶^{なを}用^をひて効^{こう}験^{げん}あることを知^しるべし。但^{ただ}し喘^{ぜん}息^{そく}は効^{こう}なし。用^をゆべからず。

○中暑^{ちうしよ}

傷寒^{しやうかん}論^{ろん}に嘔吐^{おうど}して痢^{くだ}るもの名^なて霍乱^{なづけ}とあり。夫^そ小兒^{せうに}の中暑^{ちうしよ}は脾胃^{ひ い}よはきゆゑ、夏月^{なつげ}ことさら乳食^{にうしよく}胃脘^{いわん}に停滯^{とどこほり}し安^{やす}く、外暑^{ほかあつげ}にあたり、内乳食^{うちになうしよく}不消化^{こなれず}して大熱^{おほつねつ}を發^{はつ}し、(19丁ウ)或^とは吐^くし又^{また}は泄^{くだ}す。この病熱^{ねつおほく}多^{おほく}して湯水^{ゆみづ}を好^{この}む者は、五苓散^{ごれいさん}の煎湯^{せんじしる}にて薬王圓丸^{くわんやく}薬^{くすり}をもちゆ。若^{もし}又^{また}惡寒^{さむさ}つよく湯水^{ゆみづ}をこの好^{この}まざる症^{りちうとう}は、理中湯^{せんたう}の煎湯^{せんたう}にて薬王圓^{くすり}をもちひ治^ちすること神^{かみ}のごとし。

ごれいさん
五苓散方

ちよれい
猪苓
桂枝

たくしや
沢瀉
びやくじゆつ
白朮

ぶくれう
茯苓
各等分

りちうたう 理中湯方	にんじん 人參 三分	かんざう 甘艸 三分
	かんきやう 乾姜 七分	びやくじゆつ 白朮 五分

右両方とも呉茱萸三分を加へ、煎湯壺ふくに薬王圓丸薬式ふくづつを用ゆ。煎方つねのごとし。

○^{ほん い}翻胃 ^{かく}といふ

(20丁オ)

此症に二種あり。予が薬王圓にて治する症は、脾胃虚し、食物壺度脾にをさまるといへども、^{はんとき}半時か一時あるいは、一日二日めに^{のこ}残らず吐き、^{やせ}瘦おとろふを^{ほん あ}翻胃といふ。膈にまぎれる症なり。^{はなはだ}甚六かしき症なれども、^{みな}皆ことごとく治す。膈といふは、^{しよくもつむね とどこふり}食物胸に滞てさがらず、^{すぐ}直に吐を^{かく}かくといふ。此症は治せず。用ゆることなかれ。膈は大人ばかりにて、^{せうに}小児はまれなり。翻胃は大小児ともにあり。

*初版文化10年版には、ここに「^{かんろう}疳癆」の章があり、以下のように記されている (cf. 11丁ウ)。

^{かんろう}
疳癆

此疳は大人の^{らうがい}劳咳と違ひ、^き氣を^{らう}劳してやむにあらず。^{むまれつき ひ め よわく}生質脾胃微弱にして^{き けつめぐり}氣血順かね、^{しん か}心下を^{あさ}塞ぎ、^{どう き}氣むつかしく、^せ動悸つよく、^{かた}脊より肩へこりの^{やまひ}ぼす病也。大人の^{らうがい}劳咳とは^{びやうこん}病根にかはりあるばかりにして、^{かわる}薬に^{よつ}異ことなし。依て大人小児とも^{だいべん}大便に^{かた}形ちある^{うち}内に^{ひきうす}此薬御用ひあらば、速に治する事請合也。もし^{だいべんくだ}大便下るにもあらず、^{ひきうす}磨にて味噌をひき

たるごとくゆるくなるは治せず。用ゆべからず。

○^{がんびやう}眼病

眼目は五臓の精華、一身の肝要の所にて、其疾^{やま}ひ⁸³⁾七十二種といへども、
おそらくは脾虚^{ひきよ}し、五臓^{ござう}おとろへて、眼かすみ、いたみ、^{とりめ}雀目、或は
白瞳入、外瞳、内瞳、其外種々と^{はつ}変り^か發するなり。この薬は根本の脾を
補益^{ととのゆる}ゆえ、かすむ眼は勿論、^{もちろん}雀目は四五服（20丁ウ・21丁オ 挿絵）（21
丁ウ）にて治し、ほし入、瞳に肉のかかるも、式三廻り用ひて、速に治す
こと奇々妙々なり。

（20丁ウ・21丁オの挿絵）

^{とりめ}雀目 かすみ眼

もろもろ ^{がんびやう}眼病にて、終に^{つひ}盲目となるを治するの^{しんやく}神薬なり。

〈図版13〉眼病

文化十酉としより、弘化四^{ひつじの}未とし^{いだ}出せし能書本に、痘疹^{のうがきほん}後の^{ほうさうはしか}後
眼病治せず、用ゆべからずとしるし置し所、病家より右痘疹^{おき}後の^{ほうさうはしか}後
眼病にも用ゆるに奇妙に^{きめう}効あるよし、追々申しきたるにつき、猶又驚^{なほまたとく}
と試るに、ほし入すでに盲目となるも、ふしぎの^{こうのう}功能ありて、十人に
八九人まで^{ことごと}悉く治す。故に^{かるがゆへ}此所にこれをあらたむ。功能の速^{すみやか}なる
こと用ひてしり給ふべし。

* 初版文化10年版には、ここに「傷寒」の章がある（cf. 12丁ウ）。この嘉永4年版では、
「大人之部」の後に置かれている（cf. 25丁オ）。

○ 諸病胎毒論 附 大人効驗ある事

あるひと 或人予に問て日⁸⁴⁾、伊達龍仙は小兒諸疾、胎毒より發るといふ。先生は脾胃虚より發ると(22丁オ)いふ。龍仙のいへるは否とせらるる哉。○
 答ていはく、胎毒より疾を發るゆゑ、出生の節、薬を用ひて胎毒を去ること肝要なりといふ。○問⁸⁵⁾、小兒出生して間なく疾を發するあり。又式三歳、六七才までも無病にて、瘡毒の憂もなき小兒、卒に大病發し、卒死するか、或は長病となる兒あり。諸疾は胎毒より發すといはば、遲速は有まじきに、かく前後遲速の有はいかん。○答⁸⁶⁾、夫小兒胎内にて氣を受けるに、厚薄きあり。氣を厚くうくるもの、自ら脾胃実ゆゑ、疾あらず。又氣を薄く受るものは、脾虚なるゆゑ、生れながら疾。しかるに脾胃実なる生質も、乳母の食物不慎より脾虚して氣血めぐりかね⁸⁷⁾、乳食化せずして、疾を發すゆゑ、遲速あるなり。○問⁸⁸⁾、胎毒多き小兒も、脾胃実は一生涯(22丁ウ)病なる哉。○答⁸⁹⁾、脾胃実き小兒は氣血よく順る。因て胎毒多くとも、瘡、しらくほ⁹⁰⁾、其外種々の發物となりて消解するゆへ、無病なること、譬ばにぎり水もよく流るるときは、虫生ぜざるがごとし。○問、胎毒少しもなき小兒、脾胃よはき虚はいかん。○答、脾胃よはくば、氣血不順にして、清血も悪血と變じ、病を發す。譬ば清水も流れあしければ、濁水となりて、虫を生ずるがごとし。○問⁹¹⁾、しからば、小兒諸病は胎毒より發すといへども、其本は脾胃の虚実にあるといはるる哉。○答、しかり。故に此くすりは、其根本の脾胃を補益ひ、氣血をよく順らすことを主とし、大・小兒とも常に服用の輩は、無病ならしむ。○問、いかにも一々聞へたり。しかし他の薬は何れも十五才までとあり。此神劑は、小兒當才より百歳の翁まで、(23丁オ)奇効あるといはるるは如何。○答、『傷寒論』『金匱』⁹²⁾『本草綱目』其余の医書に一葉にても十五歳までは効あり、十六歳以上には効しなしとある事いまだ見ず。故に予詳ならずといへども、他薬を考るに、胎毒を下痢するばかりか、或は驚風、かたかひ⁹³⁾の類を治するばかりか、何れも病の原を後にし、唯節に顯る處にもとづきて用ゆる薬

ゆゑ、當分効能あるごとくにてても、生涯根を治ることあたふべからず。
 所謂飯のうへの蠅を追ふに異ならず。此故に他の小児の薬は大人にもちひ
 て効あるべからざる歟⁹⁴⁾。夫、大人は小児とちがひ、六氣七情病を犯す。
 六氣七情とは、喜、怒、哀、楽、思、恐、驚より心気を勞し
 て、諸病を發す。其はじめ、心下をふさぎ、氣をつむ。これを積氣とい
 ふ。積は氣のとどこふりにて、凝たる義なり。氣積、血積みな是より發
 る。その原は(23丁ウ・24丁オ 挿絵)(24丁ウ)脾胃虚するゆゑに氣鬱
 し、氣鬱するゆゑに血凝る。血凝滞るゆゑに、蒸熱す。其惡毒と六氣
 七情と相交て積鬱するゆゑ、脾肝の虫ますます廣大となり、變化して
 勞咳となる。ここに至て弥その虫、體をむすび、臍腑中に在て津液を
 吸ひ、精肉を喰ひ尽し、遂に死をいたす。恐るべきの第一ならずや。是皆
 其原は、脾胃の虚損より發るなり。其余、風寒暑濕、疾をおかせども、
 全氣の滞り感ずる處にして、外に疾を發すべき謂なし。予が藥王圓
 は、其根本の脾胃を補益、氣血をよく順らして、瘀血を消解する大妙劑な
 れば、大人小児ともにもちひて病を治するに、何ぞ違ひあらん。

(23丁ウ・24丁オの挿絵)

動氣高ぶり、心下を痛めしむるを治す。
 留飲甚しくて、或はいたみ、又吐逆するを治す。

〈図版14〉動悸・留飲・吐逆

おとなのぶ 大人之部

(25丁オ)

○傷寒

傷寒は風寒暑濕の天邪におかれ發する病にて、一時半時をあらそひ、
 薬に加減あるゆゑ、予が薬にては及ばず。随分よろしき医に随心するが
 よし。傷寒ののち、乱心となることあり。これには予が良薬壹貳ふく用

ひ、奇妙に治す。又傷寒後、邪去て気血不調和に用ひて、効驗あること用ひてしるべし。

りうるん
○留飲

此病は、平生美食して身軀を働かせず、為ことなく、根気不相應の思慮を過し、脾虚して胸膈より下へ水を制することあたはず、水氣上に滞り、大便常に結し、心下せぐるしく⁹⁵⁾いたみ、顔色青く、瘦おとろふをいふ。此薬王圓は脾胃を補益ひ、水氣を(25丁ウ)小便へよく通ずるゆゑ、たちまち心下をひらき、いたみを治ることいたつて妙なり。しかれども此薬一服もちゆると、少々いたみ強くなる症、百人のうちに壹貳人もあり。此症は治せず。用ゆべからず。

ちのみち
○血閉

血の道といふ病は、男女ともにあり。其始、心下ふさがり、唯何となく氣六かしく、大便常に結し、或は下痢、あるいは腹はり、或不食し、或は食すすみ、又は動氣つよく、脊よりかた首筋へこりのぼせ、耳鳴、眼かすみ、頭痛し、或は手足だるく、腰ひざつり、少しにても、前高なる道はいきだはしくて、歩行かね、種々こごとひながら、病床に伏にもあらず。唯家内にぶらぶらとして、萬事によく気がつき、少しの事も心にかかり、左程までもなき事を深くあじ過し、人目にはさのみ病(26丁オ)人のやうにも見えずして、終には勞症となる。これ至て難症の大病なり。諸医種々病名を称るといへども、全く其原脾胃虚損より發る症なり。就中婦人はことさら慎み深く心の儘に身をもつこと能はず。氣鬱して月水滞り、遂に大病を引出すこと多し。予が薬王圓は脾胃を補益、氣血をよく順らし、氣を開き、心下をすかし、鬱を散じ、又婦人は月水とどこほ

りなくあらしむの妙^{くすり}劑ゆゑ、男女とも右^{みぎ}等^らの病症^{びやうせい}に用ひ、神効^{しんこう}あること
ゆめゆめ疑^{うたが}ふことなかれ。其効^{こう}用てしるべし。

○^{ろうがい}勞咳⁹⁶⁾

夫、勞咳^{ろうがい}は氣體^{きたい}虚^{きょ}弱^{じやく}より氣^きを勞^{ろう}鬱^{うつ}して發^{はつ}すといへども、原^{もと}脾^ひ胃^いの虚損^{きよそん}より
發^{おこ}る。脾胃^{きよそん}虚損^{きよそん}するときは氣血^{きけつ}めぐらず、(26丁ウ)心火^{しんか}さかんと
なりて骨焦^{こつじやう}し、肥肉^{ひにく}痰沫^{たんあわ}となり、咳^{せき}を生^{しやう}ず。これ脾胃^{ひい}の陽氣^{やうき}うすく、順^{めぐ}
る處^{ところ}の氣血^{きけつ}胸^{けつ}膈^{つむねのあひだ}にせまり、發動^{はつどう}せざるゆへ、勞咳^{ろうがい}となる。其はじめ大便^{だいべん}
結^{けつ}し、又は水瀉^{みづくだ}り、腹^{はら}にかたまり出来^で、動氣^{どうき}つよく脊^せなかへこり、のぼせ、
やせつかれ、痰沫^{たんあわ}を吐^はく。号^{なづけ}て勞咳^{らうがい}といふ。つかれ咳^{せき}いづるといふ義^ぎな
り。いづれも六^{むつ}かしき病症^{びやうせい}といへども、大便^{だいべん}かたち有^{ある}か、又下痢^{くだる}うちに
此藥^り王圓^{とど}用^{けつ}ひあらば、痢^やを止^やめ、結^{けつ}するを和^{やは}らげ、ことごとく治^ちすること
請^{うけあひ}合^{しか}なり。然れども此藥^{しか}服^{ふく}せざる前^{まへ}に、大便^{だいべん}下痢^{くだる}にもあらず。譬^{たとへ}ば、ひ
き臼^{うす}にて挽^{ひき}たる味噌^{みそ}のごとくゆるみて形^{かたち}なきは、用^{もち}ひても効^{こう}なし。用^{もち}ゆ
べからず。

○^{ばうろ}崩漏

婦人^{ばうろ}の崩漏^{ばうろ}といふは、俄^{にはか}に月水^{けいすい}大^おに下^{たへ}り、堪^{たへ}かぬることあり⁹⁷⁾。此藥^お王
圓^{たへ}(27丁オ)散葉^{さんやく}をきつね色^{いろ}に煎^いりて壺服^{いつぷく}用^いひあらば、即座^{そくざ}に奇効^{きこう}あり。
三四服用^{もち}ひて、快氣^{くはいき}すること神^{しん}のごとし。常々^{つねづね}月水^{けいすい}に清血^{せいけつ}多く下^{くだ}り、瘦^{やせ}お
とろふ人^{みぎ}、右^{みぎ}の通^{とふり}にしてもちひ、効能^{こうのう}すみやかなり。

○^{しらちながち}赤白滯下

婦人にしら^ち血なが血といふて、月水平^{けいすいつねづねうみ}生膿血のごとくになりて多く^{おほ}下り、次第に^{しだい}瘦衰^{やせおとろ}へ、甚^{せう}六^{けつきたう}しき症あり。此症には血帰湯^{かねもち}を兼用ゆべし。

けつきたう 血帰湯	いりすこしかう ^{ぶし} 黒焼香附子 一匁	なまかう ^{ぶし} 生香附子 一匁
	たうき 當帰 一匁	けいしん 桂心 五分
		かんきやう 干姜 五分

右五味を常のごとくにせんじ、壺^{ぐわんやく}ふくに薬王圓大丸薬一服づつ（27丁ウ）兼用^{かねもち}ゆべし。十四五^ぢふくもちひて、ことごとく治すること神のごとし。

*初版文化10年版には、ここに「吐血・咳血」の章があり、以下のように記されている（cf. 16丁ウ）。

とけつ がいけつ
吐血・咳血

人身^{じんしん}の血は、水^{みづ}の地中^{ちちゆう}を順^{めぐ}るがごとし。脾虚^{ひきよ}せざる時は患^{とき}ひなし。若^{もし}七情^{しちやう}脾^ひをおかし、氣血^き乱逆^{けつらんげき}せば、吐血^{とけつ}あるひは咳血^{がいけつ}となり、おそろしき病となる。此病は

伏龍肝 一匁 硫黄 一匁 右二味を細末^{さいまつ}して白湯^{さうゆ}にて薬王圓大丸薬一服を服すれば、立処^{ふく}に愈ゆ。

○^{ちやうまん}脹満 附 ^{すいしゅ}水腫

此症、古方^{こちやう}に鼓脹^{こちやう}とあり。其病根三種^{もとみいろ}といへども、恐らくは脾胃虚^{おそ}より發^{きよ}する事、医書に詳^{いしよ}なり。此故に予が薬王圓にてことごとく治す。

水腫^{すいしゆ}とて脾胃^{きよそん}の虚損^{つう}より小便^{さうみ}通ぜず、惣身^{はらたいこ}はれ、腹太鼓^{てあし}のごとく手足^{てあし}までも浮腫^{はれ}くるしみ、終^{つひ}には死^しする人あり。予が薬王圓^{ひゐ}は脾胃^{ととのへ}を補益^{きけつ}、氣血^{きけつ}を順^{めぐ}らし、小便^{せうべん}をよく通ずる神劑^{つう}ゆゑ、別^{くすり}して此症^{このせう}に奇効^{きこう}あること神^{しん}の如^{ごと}し⁹⁸⁾。

此症^{ぞく}に俗^{つねばら}、常腹^{きぶん}といひて、氣分^{きぶん}もよく、身内^{みうち}も常^{とふ}の通りにて、只腹^{はら}ばかり年々^{としとしはりいづ}脹出^{やまひ}る症あり。これは治^ちせず。用^{もち}ゆべからず。此症^{きぶん}に（28丁オ）かぎらず、氣分^{きぶん}のよろしき疾^{やまひ}はもちひて効^{こう}すくなし。

○右^{とふ}の通り治^ちする病^{やまひ}は治^ちすと記^{しる}し、治^ちせざるは治^ちせずとするす能書^{のふがき}なれば、唯^{ただ}薬^{くすり}を弘^{ひろ}めんとのみ種々^{さまざま}文華^{ぶんか}をかざる能書^{のうがき}と日^ひを同^{おなじ}ふして論^{ろん}ずべからず。病^{やまひ}にもとづき、彼^{かの}医師^{いし}、此^{この}薬^{くすり}と迷^{まよ}ふうちに、手^ておくれとなりて、天^{てん}数^{すう}尽^{つき}ざるに命^{めい}を亡^{ほろ}ぼす者^{もの}世^{おほ}に多^{おほ}し。是^{これ}を見るに忍^{しの}びず。病^{びやう}論^{ろん}病^{びやう}症^{せう}を拏^あげ、世^よの人の天^{てん}壽^{じゆ}を保^{たも}しめんと欲^{ほつ}す。能^{よく}考^{よく}へ服^{ふく}薬^{やく}あるべきこと專^{せん}要^{よう}也。

○此^{この}能書^{のうがき}をよみて、此^{この}やうにきくならば、医^い者^{しや}はいらぬといふ人もあるべし。いかに此^{この}能書^{のうがき}にしるす疾病^{いしや}は、医^い師^しのいらぬことを用^{もち}ひてしるべし。

○右^{この}能書^{のうがき}加味^{かみ}の良法^{れうはふ}は、予^よが一家^{さうでん}の相傳^{さうでん}にして、是^すまで数^す百^{ひゃく}（28丁ウ）人^{にん}にあたへしに、一^{いち}人も治^ちせざることなし。遠^{えん}国^{こく}邊^{へん}鄙^びの人^{にん}々^々、病^{やまひ}に愁^{うれ}へんことを歎^{たん}じあらはすものなり。近^{きん}郷^{がう}の人^{にん}には、予^よが宅^{たく}にて夫^{びやう}々^{せう}病^{びやう}症^{せう}を見^みわけ、加^か減^{げん}薬^{やく}調^{てう}合^{ごう}いたし進^{しん}ずべし⁹⁹⁾。

*初版文化10年版には、最後に以下の文章がある（cf. 18丁ウ）。

近^{きん}年^{ねん}まぎらはしき類^{るい}薬^{やく}を出^いし、能^{のう}書^{がき}・包^{つづみ}紙^{がみ}等^{とう}まで同^{どう}やうにし、賣^う弘^{ひろ}るよし承^{うけたまは}り候^{しんはう}。予^よが神^{しん}方^{はう}は何^{いか}ほどむつかしき大^{たい}病^{びやう}にても、小^{せう}児^には三^{さん}服^{ふく}、大^{ふく}人^{まこと}は七^{やみ}服^{のよ}にて実^{とも}に闇^し夜^やに燈^え火^{くわ}を得^えたるがごとく速^{すみ}に効^{こう}験^{げん}ある事^{こと}、

奇^きにして妙^{めう}にいたる。假令^{たとひる}類^{いやく}薬^{やく}たりとも斯^{かか}る効^{こう}能^{のふ}あらば、随^{ずい}分^{ぶん}用^{よう}ひらるべき也。しかしながら予^{しんざい}が神^{しん}劑^{ざい}は一^{さう}子^{でん}相^{さう}伝^{でん}にして、あまねく他^た家^けの知^ちる所^{しよ}にあらず。能^{よく}々^{よく}考^{かん}へ御^ご用^{よう}あつく然^{しか}るべき事^じ也。

胄文化十年癸酉仲秋

潜龍陳人愚謙誌



嘉永四年辛亥孟春再彫之期改補

(29丁オの広告)¹⁰⁰⁾

咳治散

止痛散

せきの妙薬

づつうの薬

たちまちとまること請合

壺^ひふく用^{よう}ひていたみとまることうけ合

是妙散

即妙散

せんきの妙薬

りんびやう

痲病^{りんびやう}せうかつの薬

一ふくにてこしのいたみ

壺^ひふく用^{よう}ひていたみ^{とめ}を止

とまる事妙なり

小^{せう}べんこころよく通^とず

元養散

右よばりの薬の外は、いづれも

よばり¹⁰¹⁾の妙薬

壺^ひふくにて大効あり。

四ふくめより効験相見へ候

こころみ給ふべし。

【慶応元年（1865）・明治3年（1870）版】

(1丁オ)

抑父鼎貫は丹波國桑田^{くわたごうり}郡^{むまれて} 穴川村に産^{わかき}而^{みやこ}、壮年より皇都^{のぼ}に登^{いへにつたはる}り、家^け 秘

之^{ひかんやくわうゑん}脾肝薬王圓を製^{せい}し、日夜^{にちやくころ}心力^{つく}を尽^{あまね}し、遍^{しよにん}く諸^{やまひ}人の病苦^{すく}を救^{すく}わんと
 志^{こころざ}す事^{こと}、年^{とし}久^{ひさ}し。此^{この}脾肝薬王圓^{ひかんやくわうゑん}の功^{こう}能^{のう}は、脾^ひ胃^いを補^{おぎな}ひ、肝^{かん}をしづめ、
 氣^き血^{けつ}を順^{めぐる}し、能^{よく}膈^{むね}の滯^{とど}を制^ち伏^{めう}するの妙^{めう}劑^{ざい}也^あ。凡^{ひと}万^の病^{やまひ}諸^{いろ}症^の有^{せう}りと
 いへ共^{ども}、内^{うち}より発^{おこ}る症^{せう}は、五^ご臟^{ざう}のふ足^{もと}より生^ひじて、五^ご臟^{ざう}の本^{もと}は脾^ひに有^あ
 り。故^{ゆへ}に常^{つね}々^{づね}此^{この}良^{くすり}劑^のを服^{のむ}用^{ひと}すれば、無^む病^{びやう}長^{ちやう}寿^{しやう}ならしむ。蓋^{けだ}し其^{その}病^{やまひ}に相^{そう}
 應^{おう}じて用^{もち}る節^{ふし}は、薬^{くすり}力^{ちから}尤^{さかん}廣^{ひろ}大^{たい}なり。既^{すで}に死^し路^ろに赴^{おもむ}かんとするの
 重^{おも}症^{しやう}たり共^{ども}、救^{きう}ふ事^{こと}を得^える。其^{その}効^{かう}能^{のう}一^い々^い挙^あて数^{かず}るに違^{ちが}あらず。然^{しか}と
 いへども、必^{いづれ}一方^のの能^{ちから}々^ず諸^{しよ}病^{びやう}を治^ちすべきにあらざれば、其^{その}應^{おう}ず
 べきと應^{おう}ずべからざるを様^{よう}し、當^たに應^{おう}ずべ(1丁^{ちやう}ウ)きを撰^{えら}み、應^{おう}ずべ
 からざるには用^{もち}ひざらしめんが為^{ため}に、功^{こう}能^{のう}の有^{ある}無^{なし}を明^{あきら}著^{かに}して冊^{ほん}をな
 し、周^{ひろ}く施^ほ行^{こう}す。是^こに於^おて此^{この}方^{くすり}劑^のを乞^{もと}ふ人^{ひと}日^ひ々^じ益^{えき}盛^{さか}なり。既^{すで}に御^く堂^げ上^{じやう}
 様^{よう}方^{ほう}、諸^{しよ}侯^{こう}様^{よう}方^{ほう}の御^お貴^き人^{にん}に逮^{およ}ぶ。爰^{こゝ}に鼎^{てい}貴^き、今^{こん}年^{ねん}九^く十^じ三^{さん}歳^{さい}の齡^{れい}に至^{いた}り、
 故^{ゆへ}有^{あり}て恐^{おそ}多くも、
 叡^{おん}聞^きく⁽¹⁰²⁾に達^{たつ}し、忝^{かたじけなく}も鼎^{てい}貴^きの高^{たしより}齡^{めい}を有^ぜさせられ、家^せ方^いの製^{せい}薬^{やく}調^{てう}献^{けん}奉^{ほう}
 べき
 勅^{おん}許^{ゆる}を蒙^{うけたまは}る事^{こと}、是^{これ}何^{なんの}ぞ幸^{さい}福^{ふく}ぞ乎^や。鼎^ち貴^ち
 聖^{おん}憐^{あわれ}みの身^みに溢^{あふ}るの難^{あた}有^りを愚^{おろ}子^こに讓^{やう}。因^{よつ}て勿^{もつ}躰^{たい}な受^{くもく}領^{わん}拝^を任^{けがし}、
 莫^{やま}太^{ほどの}て
 天^ご恩^{おん}を載^{いた}き、業^かを継^つぎ教^{しやう}を受^うるといへども、不^{おろ}肖^かにして忠^{ちやう}孝^{こう}を盡^{つく}すに
 堪^{たへ}ず。
 漸^{よう}く家^か方^か薬^{やく}品^{ひん}精^{しやう}撰^{せん}して、謹^{つしん}で製^{せい}する而^{のみ}已^し。若^{もし}病^{びやう}む人^{ひと}有^{あり}といへども、
 價^{あた}を厭^えい、薬^{やく}を求^{もと}め得^えざる貧^み人^{にん}、此^{この}脾肝薬王圓^{ひかんやくわうゑん}的^{てき}症^{しやう}の人^{ひと}は、必^{かならず}價^{やくだ}に
 抱^{かか}はらず(2丁^{ちやう}オ)廣^{ひろ}く施^せ薬^{やく}し、其^{その}病^{びやう}患^{わづら}多少^{たうしやう}を救^{すく}ひ得^えば、少^{すこ}々^{しは}父^{ちち}の嚴^お厳^とろ
 を勤^{つと}むる一^は端^{ちか}に庶^かからん乎^か。是^{これ}常^{つね}に父^{ちち}の欲^おする所^{ところ}なればなり。希^{ねが}くば、
 四^{さん}方^{ほう}の君^{きみ}子^こかか^たる人^{ひと}あらば、引^ひ接^{けつ}して吾^{わが}志^し願^{ころ}に充^{あて}給^{たま}へ。豈^{この}唯^{ほう}我^{ばかり}が幸^{さい}
 而已^{ばかり}ならん哉^や。

ひかんやくわうえんもち やう
脾肝薬王圓用ひ法

- 一 小児出生より五才迄は、一日に一貼づつ好む品に随ひ何度にも用ゆべし。
一 小児六才より十才迄は、一日に一貼半づつ三度に白湯にて用ゆべし。
一 小児十一才より十五才迄は、一日に二貼づつ四度に白湯にて用ゆべし。
(2丁ウ)
一 十六才より惣て大人は、一日に二貼づつ四度に白湯にて用ゆべし。

大人小児とも七日の内に心下をすかし、乳食をよく治め、小便をよく通ずる薬功と知るべし。又少しも効験なくば、用ゆる事なかれ。
右は凡用ひ方の大畧にて、又病の輕重に随ふべし。平安の節、養生の爲に用ゆるには、心に任すべし。重病の節用ゆるには、一日に貳貼づつといふを三貼づつも用ゆべし。一日に一貼づつといふを貳貼づつも用ゆべし。大病にても何程多量¹⁰⁵⁾に用ゆる共、過量の害ある事なし。只輕量を緩に用る節は、得べき功も得がたし。心得べし。

〇大人・小児 毒養生大略

- 一 書見素読 一 針業 一 房事 一 大酒 一 大食 一 いり豆
一 かき餅 一 味噌汁 一 豆腐 一 麵い 一 餅 一 だんご
一 生昆布 一 生つけ類 (3丁オ) 一 さつま芋 一 かしら芋
一 小いも 一 かぼちや 一 甘酒 一 こんにやく 一 油氣
此外惣て 一 油厚き魚、一 むねにもたるる物、一 勢強物、一 こなれ悪
き物、一 厚味の物、右は此薬王圓の惡む¹⁰⁶⁾ ゆへに禁ずるにあらず。此
良劑を用ゆる程の病症には右等の品多食すれば、忽ち病を募らしむゆへ

に、この薬王圓用ゆる用ひざるに抱はらず休薬する共、必慎むべし。
間々薬王圓の功を知り、用ひ度思ひながら、食禁¹⁰⁷⁾を願い用ひ兼ねる人あり。笑止の事也。病ひ軽きは一二度は少し食しても當るといふ程の事はなかるべし。只病症に對し惡むゆへの養生にて、薬の禁にあらざる事、よくよく心得べし。

但し乳母は右等を禁ずるに及ばず。只油厚き魚るい禁ずべし。

(3丁ウ・4丁オ)

小兒養育金礎標 *嘉永4年版(2丁ウ)と同じ。

(4丁ウ・5丁オ)

○冊中目録

*嘉永4年版と同じ。ただし、丁数が間違っており、正しい丁数より1丁ずつ少ない。

明治3年版では修正され、正しい丁数になっている。

(5丁ウ 挿絵と漢文)

友生鈴木氏、來訪して云ふ。翁、今も矍鑠として、猶ほ容貌童顔のごとく光澤ありて、聲音壮大にして、實に地仙長く其の仙容を遺すと謂ふべし。以て此書を容頁すべきかな。賞誦の餘、直に筆を執る。(※原文漢文)

石田鼎貫翁 九十三歳肖像

百年寿謹寫

〈図版15〉鼎貫肖像

(6丁オ・ウ)

五かん 并 諸虫の図 *嘉永4年版(5丁オ)と同じ。

(7丁オ)

せうにしよびやうひみのろん

○小兒諸病脾胃論 *以下、本文は嘉永4年版（6丁オ）と同じ。

(29丁ウ)

末尾の奥書

峇文化十年癸酉仲秋

潜龍陳人鼎貫誌¹⁰⁸⁾



嘉永四年辛亥孟春再彫之期改補

慶応元年乙丑仲秋再彫之期改補

* 明治3年版では、以下の追記事項がある。

明治三年庚午初春再彫之期改補

皇都五條建仁寺町西江入

石田勝信

石田勝秀

本國丹波亀山在穴川村

(30丁オ)

広告

* 嘉永4年版とほとんど同じ（明治3年版では元弘所の後に記載）。

【明治7年（1874）版】

(1丁オ)

脾肝藥王圓効能書 小兒養育金礎

* 内容や表現は、嘉永4年版の「小兒養育金礎標」（2丁ウ～）と慶応元年版の冒頭部

（1丁オ～）と重なることが多い。

憐れむべきは、夭兒疾病に治するの方無きに非ざるも、此乃ち能く薬を擇用せざるために、遂に死するなり。潜夫論に日く、壽を養ふの士は、疾に先んじて薬を服す云云。（※原文漢文）

抑 此脾肝薬王圓は、其効能脾胃を補ひ、肝をしづめ、氣血を順し、膈の滯をよく制伏するを主とするの化薬なる故、以て方名とす。凡人々時として患る疾病諸症ありといへ共、其内よりして病む症は、五臓の内、或は一二の臓、運動力過不及して相共に和する能はざるより發す。夫、五臓は脾胃を本とす。此脾肝薬王圓は、其本とする脾胃を補ふの功を主とするゆへ、常に是を服用すれば、無病長壽ならしむ。蓋し僕が父鼎貫なる者、（1丁ウ）兼て此方薬に不思議の効ある觀るを以て周く、諸人の病患を救ふべきを志し、又以為、人身の諸病・万病・諸症あり。妙劑といへども、必一方のよく是を治すべきにあるべからずと、爰にかねて文化四丁卯年より同巳年迄、三カ年の間、四方に施薬し、ためし試るに、果して同症の内にも効あると無とあり。最其症に應ずる時は、薬力廣大にして、既に不治を究め、死路に赴かんとするの重症も、不思議の効を得て救ふを得たり。又、其症に應ぜざるは、軽症といへども、薬数屢るといへども、功なきありて是を撰む。詳ならず、反覆する。又四年前後七カ年施薬し、昼夜心力を尽し、様し試み、酉年に至て應ずべきと應ぜざるを明らかに撰めり。依てその効能の有無を著し、且小兒養育（2丁オ）心得の事件を記し、小兒養育 金 礎と題す。若此薬の的すべき見込の病人の内、價を厭ひ、薬を求め得ざる人あらば、必代價に抱はらず施薬し、其病患の多少を救はん事を欲す。諸人あらば、四方の君子 希 は、引接して志願に充しめ給へ。豈唯僕而已幸ひならん哉。

于時明治五年

鼎貫男

勝信謹誌



明治七年甲戌初春再彫期改補

(2丁ウ)

鼎貫肖像画・漢文

*慶応元年版と本文は同じだが、鼎貫の年齢は「九十三歳」が享年の「九十五歳」になっている。

(3丁オ・ウ)

五かん 井 諸虫の図

*3丁オは旧版と同じ。3丁ウは「^{あがくくはん}関東医学館に於て^{れいねん}例年四月十九日拝見被為仰付候虫之圖」の説明がなく、「^{しやくき}積気のむし」のレイアウトが変わっている。

(4丁オ)

凡例

- 一 此書は、^{しよ}病症に従ひ、^{びやうしやう}脾肝薬王圓の^{しうたが}効能の有無を記し、^{ひかんやくわうえん}且は小兒養育^{こうのう}の心得を記すなれば、^{あるなし}唯婦女子の^{しる}讀やすく、^{かつ}分り安きに注意す。冊中^{せうによういく}に繪を加ふるは、^{こころえ}繪に要あるにあらず。^{しる}婦女子、^{よめ}或は病人の心を^{そんたいくつ}転じ、^{なぐさ}詠其勞倦を慰めんため也。
- 一 此書は、たとへこの^{しよ}薬用ひなく共、^{くすりもち}小兒ある方は^{せうに}心得と^{かた}成べき事も^{こころあ}記しある故、^{なる}篤と^{こと}讀給ひて後は、^{しる}知音の方へも^{とく}見せ給へかし。
- 一 此書は、唯^{しよ}薬を^{ただくすり}勧めんと種々^{すす}文華をかざる能書と^{いろいろぶんくわ}違ひ、^{のうがき}其症により^{ちが}治すべきと^{そのしやう}治せざるとの^{よみ}委敷を記す能書なれば、^{くわしく}心して^{しる}讀給へ。
- 一 此^{くすり}薬用ひて^{ひと}壺廻りの内に^{うち}少しにても^{すこ}効あらば、たとへ^{こう}一族の方来り^{いちぞく}てかかる大病に^{かたきだ}此薬にては^{かたきだ}覺束なしなど、^{かたきだ}素人了簡に^{かたきだ}否める人（4丁ウ）あるとも、^{かたきだ}押て用ひ給へ。^{かたきだ}日々快氣する。^{かたきだ}朝日の昇るごとくなるべし。^{かたきだ}病にもとづき^{かたきだ}是彼と^{かたきだ}迷ふ間に^{かたきだ}手おくれとなり、^{かたきだ}天數^{かたきだ}尽きざるに^{かたきだ}命を失ふ人多し。^{かたきだ}心得べし。^{かたきだ}若又壺廻り用ゆる間に^{かたきだ}少しの効能もあらざれば、^{かたきだ}否める人なく共、^{かたきだ}用ひても^{かたきだ}詮なかるべし。
- 一 此^{くすり}薬はすべてのうち^{きぶん}気分¹⁰⁹に^{かか}抱はらざる^{かか}病症には^{かか}用て^{かか}効稀し。
- 一 此^{くすり}薬は用ゆべき方^{かた}の歳に従ひ^{とし}少しづつ^{したが}加減有なれば、^{すこ}使ひの人へ^{かげん}

- 何歳^{なんさい}の方に用^{もち}ゆると必ず^{かならず}云^{いふ}てきたらし給^{たま}へ。
- 一 此能書^{のうがき}は別^{べつ}に代料^{だいりょう}に及^{およ}ばず進^{しん}ずるなれば、飛脚^{ひきやく}など薬料^{くすりりょう}の外^{ほか}に能書本^{のうがきほん}
の代料^{だいりょう}何^{なん}ほどなど若^{もし}云^{いふ}人有^{ひと}共^{とも}、必^{かならず}取^{とり}あへ給^{たま}ふな。

以上

(5丁オ・ウ)

○冊中目録

- *旧版(嘉永4年版と慶応元年・明治3年版)の目録は「小兒諸病脾胃論^{せうにしよびやうひのろん}」から始まっているが、この明治7年版は、その前に「脾肝薬王圓用法^{ひかんやくわうあんもちひやう}」「大人・小兒毒養生^{どくようじやう}大略^{あらまし}」が入っている。この二つの節は慶応元年版からあるが、目録より前のところに入っており(したがって目録に不記載)、明治7年版で順序が入れ替わり、その結果目録の構成が変わっている。
- *旧版は「小兒諸病脾胃論^{せうにしよびやうひのろん}」の次が「生兒心得之事^{うまれこころえのこと}」だが、明治7年版ではその間に「産心得事^{さんこころえ}」が入っている。
- *旧版では「臍瘡^{はぞくさ}」の後にあった「痘瘡^{はうさう}」がこの版ではなくなっている。

(6丁オ・ウ)

せうによういくこがねのいしづへ
小兒養育金礎

○脾肝薬王圓用ひ法^{ひかんやくわうあんもちやう}

- *「脾肝薬王圓用ひ法^{ひかんやくわうあんもちやう}」の中身は、旧版と比較すると、漢字ひらがな表記、振り仮名が一部違うだけで、文面はまったく同じ。

(6丁ウ・7丁オ)

○大人・小兒毒養生大略^{どくようじやうあらまし}

(7丁オー8丁ウ)

せうにしよびやうひあのろん
○小兒諸病脾胃論

*「大人・小兒 毒養生大略」^{どくようじやうあらまし}「小兒諸病脾胃論」^{せうにしよびやうひあのろん}ともに、旧版と言葉違いや、表記、文の順序は多少違うが、内容的にはほぼ同じ。

(8丁ウ)

さんこころえ こと
○産心得の事

*内容的には旧版の「臨産の節心得の事 附乱心」^{りんさん としきこころえ らんしん}の一部(7丁ウ～)にあたる。
くはいたい みつき すぎ あくけつ とどかふ またにんしん わかり とし このやく
懐胎して三月あまり過、瘀血の滞りとも、又妊娠とも分かぬる時、此薬
わうえん まは ほど くはいにん しきう やしな つき
王圓式廻り程用ゆれば、懷妊ならば子宮(こぶくろ)をよく養ふゆへ、月
みつ みつ けいすみ たい おとす さんいたつ やす おけつ
満るまでいよいよ経水なく胎を墮のうれひなし。産至て安し。又瘀血の
とどかふり すすみやか けいすみ りんさん せつ 110) の上に居なをる事お
滞ならば、必速に経水あるべし。臨産の節こも¹¹⁰⁾の上に居なをる事お
ほど ほど みなを のち とあけみづ いづ ぜんご あんせいさん ふく
そき程よし。居直りて後、漿水¹¹¹⁾出る。前後に安生散を壹貳貼もちゆべ
むつ なんざん おやこ すみやか あんざん めう
し。六かしき難産にても、母子ともあやまちなく速に出生する妙なり。

(9丁オ)

あんせいさんほう じやかう りうのう
○安生散方 麝香 三リン 竜腦 二分¹¹²⁾
しやぜんし 車前子(おばこのみ) 一匁五分 もつかう 木香 三分

まえ こ ととの およそ ほど さけ い
右前かたより粉にして調へおき、水凡二合程に酒すこし入れ用ゆべし。
さてあんざん のち や 113) このやくわうえんぐはんやく ふく きうきとう
扱安産して後、一七夜¹¹³⁾のうち此薬王圓丸薬一日に貳貼づつと、芎歸湯
ふく まいにちかね あくけつ さんご とほ やまひ
壹服づつと、日々兼用ゆべし。瘀血のこらず下す故、産後一通りの病なく
ぶじ
無事ならしむ。

きうきとうほう 114) とうき せんきう
○芎歸湯方¹¹⁴⁾ 當歸 三匁 川芎 貳匁
ふく 外に じんじん 紅花 五分 加へ
にんじん 八分

みづ がう がう やくわうえん かね
右水壹合半入、壹合にせんじ、薬王圓と兼用ゆべし。

(10丁ウ・11丁オ 挿絵)

りんさん ちの み ごやういく
臨産 乳飲子養育 *嘉永4年版よりいくぶん雑だが、ほぼ同じ。

○乳をつくる迄に甘艸目方式匆五分、皮を去り火に炙り、きざみて水壺合
入、三分めに煎じ、壺式ふく用ゆべし。胎毒のこらずカニココに通じ、又
泣聲に應じ、のみたる穢毒は黄なる痰淡となりて、残らず口へ吐出すゆへ、
成長の後まで無病壮健ならしむ。五香・甘連湯・だらすけの類用ゆるも
あれど、炙甘草にしくはなし。小児はとかく脾を損じ安し。甘艸のあま
きにて其始に(12丁オ)よく脾をたすけ養ふゆへ、肥立の後も養ひ安く、
又肝を養ふは脾を補ふにしかずといふ事ありて、此法によりて養へば、
智恵つきの早き事、実に奇妙也。数人ためし、確證を見たり。心して試
み給へ。

*この後の「小兒養育心得の事」はわずかな表記、振り仮名の違いを除けば同じ。

*「脾瘡の虫」～「腎瘡の虫」「脾胃虚諸症・瘡あらまし」～「臍瘡」も、ほぼ同じ。

旧版より表現が少し簡略になっているところもある。

*「痘瘡」の項目は削除され、次に「中暑」が来ている。「中暑」以下も、ほぼ同じ
だが、旧版より表現が少し簡略になっているところがある。

*末尾の奥付には「崑文化十年癸酉仲秋 潜龍陳人鼎貫誌」とのみ記され、その後の
改補の年や、この版じたいの出版年は記されていない(出版年は序の終わり2丁オ
から取った)。

*広告はなし。

石田勝信
小児養育心得

【明治11年（1878）版】

（1丁オ）

小児養育心得改正之序

このほう ひ かんやく 悪ん¹¹⁸ は、文化四卯年、予の父鼎貫之を製し、今の業を創
む。而て小児養育金礎といふ書を著し、其 薬 功と養生を人に告、人々
閱て是を可とし、之を用ひ其薬に功驗有を以て甲は乙に告て、又其後人を
誘導し、漸に弘擴して、方今予の男勝秀、其業を繼ぎ、人々の競望を受、
大に之を製するも、尚 速に之に應ずる能はざるが如き盛大に至るは、實
に弊家の幸福にして、是薬の微功有に據るべしと雖も、全くは諸賢の奨導
力に依て成る恩果と言わざるべからず。故に諸賢に向て厚く之を謝す。
然して方今或 哲 好意を以て予に示して言。此書其意は善。蓋し其體裁
はなほだむかし¹¹⁹ 甚 舊弊なり。此良配合薬有て人に告るに今之を以てするは、遺憾なら
ず哉。宜く時世に従ひ、速に之を改正なすべしと此教勸を（1丁ウ）受、
予は頑且愚にして文を知らず、これを補整致すの識力なく、一時躊躇な
す¹²⁰と雖、熟々方今開明の景勢を觀るに、實に又之を固守すべきの時にわら
ざれば、敢て其拙劣を省る得ず。遂に之を彌縫¹²¹ し、更に改正、小児
養育心得とす。蓋し予は舊弊の固陋極て其説迂遠ならざる得ず。唯從來
常に實檢する處有を誌す而已。請ふ、諸賢恕して其拙劣にして之を改正爲
すを怪むなかれ。
時に明治九年の春、鼎貫の男石田勝信、謹 而誌。

斷

○冊中^{このほん}に繪^えを加^{くわ}ふるは、繪^えに要^{よう}あるにあらず。婦童^{こども}或^{びやうにんなど}は病人^み等の閱^みる心を轉^{てん}じ、其^そ勞倦^{たいくつ}を慰^{なぐさ}めん爲^{ため}なり。

○弊家^{このほう}に製^{せい}する脾肝藥玉圓^{ひかんやくあん}は、是^{これ}を用^{もち}ゆべき方^{かた}の歲^{とし}に應^{したがひ}、(2丁オ)少^{すこ}しづつ加^かげん有^{ある}なれば、お使^{つかひ}の方^{かた}へ何歲^{いくつ}の方^{かた}に用^{もち}ゆると必^{かな}らず言^{つげ}越^こし給^{たま}へ。

(2丁オ 挿絵と漢文) *絵は図版15とほぼ同じ。字は活字。

友生鈴木氏、來訪して云ふ。翁、今も矍鑠として、猶ほ容貌童顔のごとく光澤ありて、聲音壯大にして、實に地仙長く其の仙容を遺すと謂ふべし。以て此書を額¹²¹⁾すべきかな。賞誦の餘、直に筆を執る。(※原文漢文)

石田鼎貫翁

九十五歳肖像

百年寿謹寫

(2丁ウ)

告

○此書^{このほん}は人々^{やうぜう}の養生^{こころえ}の心得^{このほう}を述^{せい}て弊家^{くすりもとめ}に製^{かたがた}する藥恩求^{あたひなし}の方々^{しん}へ無代^{もの}にて呈^{くすり}する物^かなれば、藥購^い求^{ことづけ}依託^{など}の人等^も、若^{やく}し藥價^{だい}の外^{ほか}に此書^{このほん}の代價^{だい}何程^{いかなにほど}といふ人ありとも、必^{かな}ず取^{とり}あゑ給^{たま}ふなかれ。

目

○緒言

○生兒攝育^{さんごおいたち}の心得

○小兒養育^{せうにやうあく}の心得

○幼童養育^{あうどう}の心得

○大人養生^{おとな}の心得

○懷妊^{にんしん}中の養生^{やうぜう}の心得

○赤子養育^{あかご}の心得

○脾胃養育^{ひあ}の心得

○虫^{むし}の病^{やまひ}養生^あの心得

以上

(3丁オ)

官許 ひ かん やく 薬 丸 脾肝薬王圓

廣告功能の附言

人身の幸福は健康にして長壽なるより大なるは無し。是を望むは人の常なり。而して得ざるは不養生に因る。蓋養生とは身體氣血¹²²⁾の循行と食物の消化とに注意を第一とす。抑弊家に製する脾肝薬王圓は專に氣血を能く循行し、精神を養ふの良劑なり。故に脾胃を健かにし、食物の消化を加勢し、腹中¹²³⁾に滯ふる汚物を去て、人身を壯健にするの功あり。或は常に氣をふさげ、魂氣うすき人、或は病後・産後などの肥立かぬる人、又は差たる病氣はなけれども、氣ぶしやう〔不精〕にして飲食味なく、物事に倦やすくして、勉強の勞に堪がたき人などは、暫らく是を持藥として連服すれば、氣力を養ひ、元氣を爽快にす。而して或は又、是等の症に(3丁ウ)原因して發する病ひ多くして、又此藥の功能も廣しと雖ども、其概略を左に掲ぐ。

明治十一年二月改正

功能書

○消食器の衰弱 ひる〔脾胃〕のよわりをいふ

此病ひはたまたま大人にもあれども、わけて小兒乳ばなれの時に多し。食物常にす〔過〕ぎ、氣ぶしやう〔不精〕にして、いり豆・かきもち〔餅〕などを好みあ〔飽〕くことなく、おも〔重〕きは太べんしきりに下り、はら〔腹〕は太こ〔鼓〕の如くは〔張〕つて、からだ〔体〕はがき〔餓鬼〕の如くにやせおとろふ。人々これをひかん〔脾疳〕といふ。或は又おも〔重〕からざるも、なま米、かべ土、かわらけ〔土器〕、せんこ〔線香〕などを好みてく〔食〕ひや〔止〕まざるあり。或はたつしや〔達者〕にて外に病ひなく、只はな〔鼻〕の下、口のまわり、赤くただれるあり。いづれもみな、せけん〔世間〕に虫病ひ、或はひる〔脾胃〕の病ひといふ。此症に此藥を用ひて治す。す(4丁オ)べてる〔胃〕の

よわき人は常にこれを用ゆれば、ゐ〔胃〕をつよくして、これらの病ひ、あることなからしむ。

○萎黄病 きのふさぐやまひをいふ

娘の子十四五才にいたり、月のめぐり初めてある。あとさきに氣ぶしようにして、只何となく氣むつかしく、外に出るを好まず、人々見てろう〔癆〕になるべきをあん〔案〕じる病ひあり。これに此藥用ひて大によし。又ふく〔浮苦〕病¹²⁴⁾とて男女にかかわらず、大人にして人々のいふ小兒のひかん〔脾瘡〕に類し、氣ぶしようにして、とかく食をむさぼり、はら〔腹〕は〔張〕つて、立てば足は〔腫〕れなどする病ひあり。此病にも此藥用ひてよし。

○小兒下利 こどものくだりやまひをいふ

小兒大べんの色青く、或はねばりて白く、或はねばりて黒きうら〔裏〕¹²⁵⁾のつうずるによし。

(4丁ウ)

○酸敗液 りうゐん〔留飲〕をいふ

むね〔胸〕をいため、おりおりす〔酸〕き水をは〔吐〕くによし。

○經行不調 めぐりのさだまらぬをいふ

婦人月のめぐりあつたりなかつたり、常にそろわぬによし。但し、此くすりはとどこふ〔滯〕りはめぐらせども、みもち〔身持ち〕にはなが〔流〕るるくせあるも、月みちるまでよくたも〔保〕たしむるなり。

○白帶下 しらち〔白血〕をいふ

婦人月のめぐりに、白きものまざ〔混〕りておりるによし。

○喜斯的兒¹²⁶⁾ ちのみち〔血の道〕をいふ

婦人のわづらいにて、人目にはさのみ病ひあるやうにも見へず、常に氣ぶしようにして、心するどく、すべて物事わづらわしく、思ひながら何ごとにもよく氣がつき、とかく人のなすこと氣にいらず、人の心ばいもじぶんに引うけたく思ひ、つま高なるみち〔道〕は（5丁オ）いき〔息〕だわしくてある〔歩〕きかね、かた〔肩〕首すじゑこり、こごと〔小言〕い〔言〕ひい〔言〕ひ、ふ〔臥〕すにもあらず、なす事なくして、とかく家内にばかりぶらぶらとして居る、ぶらぶら病ひによし。

○依剥昆蛭兒¹²⁷⁾ きやまひ〔氣病ひ〕をいふ

男子じぶんのこん〔根〕¹²⁸⁾に叶わぬ氣をつかひ、心つかれてわづかの事も氣にかかるやうになり、物事ねん〔念〕にねんをいれても氣がすまず、さほどにもなき事を只一づに思ひつめ、やく〔役〕にもたたぬ事を常にくよくよ思ひすごし、夜るねてもいろいろの事を思ひ出してねられず、人にあふ事をきらい、へや〔部屋〕にこもりてうつうつ〔鬱々〕として居る病ひによし。

○佝僂病 せむし〔背虫〕とはとむね〔鳩胸〕をいふ

せほね、むね〔胸〕のほね、ぜんぜん〔漸々〕にかがむ病ひあり。此藥を用ゆれば、すでにかがみたるほねはのびざれども、かがみたるだけにてとま（5丁ウ）るなり。ゆへにはやく用ゆるよし。

脾肝藥玉圓之外ニ此藥有之¹²⁹⁾

官許	是妙丸 せんきの妙藥	官許	胸和散 せきの妙藥	官許	止つう散 頭痛の妙藥
官許	消虫丸 むしの妙藥	官許	健胃丸 むねのつかゑをすかす妙藥		
官許	即妙散 痲病せうかつ〔消渴〕の藥				

京都五條橋東貳丁目

本家 営業者 石田勝秀

[印刷 烏丸通三條上ル活版所點林堂]

(6丁オ)

改正 小兒養育心得

緒言

○人の思ひは病ひより甚だしきはなし。病ひあれば、一生を全ふすること
能はず。健康にあらざれば、物事の業に堪へ、其功をとぐること能わず。
人々生れつきの強弱ありと雖ども、健康の原は其身の養生に在なり。薬も
時に由ては生力を助け、病ひを治するに必要な物なれども、是は唯加勢
を致すのみなり。故に病ひに臨み薬を用ゆるも、其病人の養生宣しから
ざれば、治すべき病ひも治せず。養生宣しければ、其治すること速し。殊
に小兒の間は、成長の勢力盛んにして身體いまだ柔軟なる期ゆへ、養育至
つて大切なり。或哲是を草木に喩へて、何程素性よき米粟松杉にても、
瘠地に植て世話せず、春夏の際耘ぎらず¹³⁰⁾、雑草を生し茂(6丁ウ)らし
ては、秋に至りて稔ることなく、年を経ても棟梁の材に成ことなし。人も
幼少の時、種々の病ひを避て養育をよくせざれば、よしや¹³¹⁾成長すると
も、健全にして立身する人とは成がたしといへり。最ものことなり。

くわいにんちうやうぜうえのこころへ 懷妊中養生心得

○婦人懷妊する時は、殊更養生を大切に慎しむべし。常に身體の勢力を
養ふ爲に程々に滋養物を食し、程々に運動をなし、房事を慎しむべし。
婦人の兒を生むを或哲喩へて、本家から分家を出すと同じ事にて、幾許の
祿か財を分け與ふるに依て、必らず本家はそれだけ耗りがたちなり。故

まへまへ つね もち かたく ふや かね たくわ おか せいだい ぶんけ いだ
に前々より常に心を用ひて祿を殖し、財を蓄へ置ざれば、盛大の分家を出
しがたく、本家もまた衰へざる事を得ず。婦人の兒を生むも、是と同じ
道理にて、懷妊中滋養の食を用ひ、充分に身體を養へば、本家たる母も
健かにして、分家（7丁オ）たる小兒もまた健かなり。然るに懷妊中養生
を誤り、身體を養ふべき食を用ひず、或は房事多ければ、母の身體衰へ、
小兒もまた健かならず。例は蓄財のなき家にてなまじひに⁽³²⁾ 分家すれば、
本家はおとろへ、分家も又榮へざるが如しといへり。此道理を心得て、
懷妊中は随分身體をやしなひ、其身をすこやかにして、常に慎しむで養生
をなすべし。

むまれこやうぜうこころこころへ 生兒養生の心得

○出産のとき心得べきは、生まれ兒生母の體を離るる時、口の中にふくみ
たる穢毒⁽¹³³⁾ 初こゑを擧るに應、咽に入る事あれば、其穢毒は稀しと雖ど
も、種々に變じて成年の後までも諸病の原因となるものなり。故に分娩の
とき生兒の初こへを擧るまでに指さきに紗のきれをまき、口の中を成だけ
よく拭ひとるべし。偕、生れ兒出生て乳をつ〔付〕くるまでに、大便黒く
飴の如きをつう通ず。人は是をカニココとも又は（7丁ウ）カニババともい
ふ。是出生まへに母の胎内にて既に受たる胎毒なり。ずいぶん充分に通ず
るがよし。乳をつくれれば、カニココは通じ止むものなり。故に乳をつくる
こと急ぐべからず。乳は生兒生れてより二晝夜をすぎて後、初めて與ゆ
るを適宜とす。是生母の乳、四十八時間をすぎざれば、は〔張〕らぬもの
なればなり。其間は乳を與へずとも、生兒に害ある事なし。而て生兒に
初乳をつくるに、生母の乳を新乳と唱へ、生兒に與ゆれば下痢るとて忌み
嫌ひ、與へざるひと多し。是大なる誤りなり。抑生母のあら乳は、生兒
母の胎内にて受たる胎毒を泄して掃除せん爲に神明の助けにて、鹽分とい
ふ物を餘計にし、生兒是を飲めば、自づから適宜泄らしむる天賦貴重
の藥乳なり。故にゆめゆめ之を捨てからず。其まま直に與へて害あること
なく、程よく泄りて後止むものなり。心得て天然にまかせ、憚るべから

ず。

(8丁オ)

あかごやういく こころえ
赤子養育の心得

○赤子とは生兒一歳より二歳に至るまでをいふ。此時にあたり養育をよくせざれば、遂に一生の害を生ずることあり。其食物は母、或は乳母の乳汁に如く物なく、赤子を養育するが如きは、又他物の之に易べきものなし。然れども其母、或は乳母に留飲有か、或は熱、若しくは黴毒などある人の乳は、決して與ゆべからず。是生兒種々の變症を發する事あればなり。又多房なる乳母の乳は宣しからず。蓋し牛の乳は、鹽類といふ物に富むと雖ども、乳糖といふ物をふくむ事、人の乳より少し。然りと雖ども、若し人の乳汁乏しくして得がたき時は、代るに牛の乳を以てすべし。

○赤子に牛の乳を與ゆるには、生れて十日の内は、牛の乳一合に水を二合加ふべし。凡三十日を経て後は、乳二合に水二合を加ふべし。二ヶ月をすぎのちには、乳三合に水を（8丁ウ）一合加ふべし。四五月の後に至ては、何もまぜざる牛の乳、或は牛の乳に粥の稀き汁を加へて與ゆべし。但し牛の乳は、夏は甚だ腐敗り易き物なれば、成べきだけ新らしき物を求むべし。又生の乳のなき所にては、牛の乳を煎つめてブリキに入れたる物あり。之を求て湯に溶かして與ゆべし。功能生の乳には及ばざれども、小兒を養ふには随ぶんよき品なり。又それも得がたき所にては、葛粉かたくりの粉、或は粥の上汁などに白砂糖少し計加へて與ゆべし。牛の乳にても葛粉かたくりにても、生れし當座は一時毎に少しづつ與へ、一ヶ月をすぎのち後は、二時ごとに與ゆべし。而て八九ヶ月の後に齒を生じ、物を食事を知るに至らば、粥のやわらかき處を與へ、漸々に食物を喰ならわしむべし。但し乳、又は其外の食を與へし時には、頭を高くし、仰けに臥さしめ、俯むけにならしむべからず。又動搖玩弄す（9丁オ）るは宣しからず。

○而て赤子は常に清淨して、暖かき空氣を呼吸をしめ、屢温かき湯にて其體を洗ひ、清潔にして、温かなる衣を着せ、和らかにして濕氣のな

きよくあたか ところ ね おく きるい あるひ わた あたま つつ
 き清浄温暖なる所に寝させ置べし。○衣類、或は綿などにて頭部を包み
 まわすは宜からず。○少しづつは運動し、或は乳を飲まし、或は寝さし、
 いづ ほどほど
 何れも程々にすべし。○あらくれたる衣類にて赤子をまき、或は頭部を
 かくべつ あたたか ひか はなは よろ
 非常に温暖ならしめ、○又はするどき光りを見せるなどは、甚だ宜しから
 は はへ ち ほか みだ ほか しょくもつ あた
 ず。○齒の生るまでは、乳の外に漫りに他の食物を與ゆべからず。○強て
 ほうほういた
 匍匐致さずべからず。○塵埃ある空氣の中に居らしむべからず。○湯に入
 れ、或は二便のあいだ感冒を受けぬやう注意べし。○寒暖の度なく、或は
 もさくさ くうきちう お よつ きうしやう はつ こころえ
 不潔の空氣中に居らしむるに依て、急症を發することあり。心得べし。○
 そのほか ほうそう いちじ ほうそう たいやく おも
 其他心得べきは、疱瘡の一事也。(9丁ウ) 疱瘡は人々の一大厄にして、重
 いのち うしな かたわ むまれつきうつく かを
 ければ命を失ひ、重からざるもまま廢人となり、又は天然美麗しき顔を
 みにく ものおほ か うへほうそう ほうそう ふせ このうへ よきほう
 醜くする者多し。彼の種痘は疱瘡を防ぐに此上なき良法にして、種痘し
 のち も たまたまはやりほうそう うつ こと ひとたびうへほうそう そのどくうす
 て後若し偶々天然疱瘡を傳染の事あるも、一回種痘せしものは其毒稀く、
 し
 死すべきものは死を免れ、廢人となるべきものは廢人とならず。故に方今
 もつば かみ お せ わ ややこむま
 専ら お上より御世話もある事なれば、赤子生れて七八ヶ月までにかな
 うへほうそう うつ かほ たも なが いの まつた
 らず種痘して、美しくしき顔を保ち、長き壽ちを全ふすべし。

せうにやういく こころえ 小兒養育の心得

○小兒とは二歳より四五歳に至るまでをいふ。小兒の時は殊に食物のすぎ
 ぎるやう分量に心をつけ、空氣の清潔して程よき温暖なる所にあそばせ、
 つね そのからだ きれいに すこ ことも
 常に其身體をあらひ清潔にすべし。○小兒の時はいまだ乳をのむと雖ども、
 しい くだい
 次第にやはらかき食物を少しづつよく嚙化して與ゑ、喰な(10丁オ)らわ
 しむべし。而て之を與ゆるに、必らず時こくを正しくすべし。○小兒の時
 ことば ただ としうへ
 は言語を正し、長老にしたがわしめて、かりそめにも約諾を違ゑぬやうに
 あわれみ り またしやうじき こと なれ たちあなき かな ひと
 し、仁愛の理、又正直の事に慣しむべし。○立行は必らず獨りせしむべ
 し。三歳に至つては衣服をうすくして、其身を強壯にすべし。○煎り豆・
 もちいもるい たぶん あた また そのほかちからづき もの いへ かawaiiさ まか
 餅芋類などを多分に與へ、或は其他滋養になる物と雖ども、懇愛に任せ
 みだ あた とき たつしや がいい ことも なぐさ ただ
 漫りに與ゆる時は、健康を害す。○小兒は其心を慰むるに、とかく唯
 しょくもつ むさば せし そのは また かawaiiさ ことも なぐ
 食物を嗜るものなり。而て其母は又、懇愛の心より其小兒を慰さめんと、

嗜にまかせて漫りに食物を與へて其適量をすごし、其食を消化すべき器械を傷損じ、是が爲に病む人多し。故に小兒飲食養生心得の爲に、次から人體の資生原由たる消化器作用の大方を告。是最とも大人養生の心得にも又大に關ることなり。

脾胃養生の心得

(10丁ウ)

○人々の食餌を要るは、動作につき其身體の消耗を補ふと、身體の資活原因たる温を起すとにあり。總て體の温は、食物・飲料の中に包含たる酸炭水三元素といふ三つのもの結合する時に生ずるものなり。而て食を消化し血液となし、全身に循環して其身體を養ふは、一つの妙々なる機關の食物を消化す器械の作用に因るなり。夫れ人一塊りの食を喫時は、必らず先是を齒にて嚙化し、其際だに口の中にて唾を混化し、糊の如くになし、是を咽より胃囊にのみ下す。此胃(囊)¹³⁴とは、脾の臟に屬たる胃の腑といふ物にして、人の餌ぶくろなり。常に飲食を受取て、是を消化す器械なり。是を消食器といひ、又其化す力を消化力と言なり。是に於て胃液を混和す。胃液とは強く酸き唾の如き汁にして、食物を消化すものなり。而て胃囊に裏面に多く皺襞ありて、常に小大二つの伸縮する有ものなり。其小の伸(11丁オ)縮とは、口と鼻とにて呼吸する毎にスウスウーと伸縮するをいふなり。是を化機伸縮¹³⁵とす。而て又其大の伸縮とは、食を受けるに應、スウスウーと化機伸縮をなしながら、漸々に伸て之を収受、而て又食物の消化て耗るに隨ひ、又スウスウーと化機伸縮をなしながら、漸々に縮むをいふなり。是を食度の伸縮とす。偕、其食物を消化すは、酸炭水三元素の起せる熱と、窒素といふ物との爲す有と、此化機伸縮をする毎に、彼の裏面にある皺ひだにてすり化すとにて、其中有食物をやわらかき粥の如くに熱爛して、是を食度伸縮の縮む力らにて、漸々に腸にをく[送]りて、而て又膽の汁と腸のあぶらとの二つの液を混和す。此二つの液にて是を製して乳糜に造り、此よりはらわためぐあいだうらてまくむすうこくだちすう諸腸を経る間、其裏面の膜といふ物の中にある無數の小管より乳を吸て、

是^{にう}を乳糜囊^{のう}といふ物^{もの}の處^{ところ}へをくり、夫^ちより乳糜^ちの管^{くだ}を経て（11丁ウ）大静脈^{めぐり}の血^{おもの}に混和^{のみやく}し、血液^{けつえき}の原^{もと}をなすなり。而^{そし}て其糟粕^{かす}は諸腸^{はらわた}を経て終^{めぐり}に是^{ついで}を肛門^{こうもん}より外^{そと}へ泄^{くだ}すなり。

○偕^{さて}、常^{つね}に飲食^{のめく}するに心得^{こころえ}べき養生^{やうぜう}の要件^{いりよう}は、前^{まへ}にいふ胃囊^{いのう}の食度^{しょくど}伸縮^{しんしゆく}の一事^じなり。此^この食度^{しょくど}の伸縮^{しんしゆく}は、常慣^{じようくわん}の度^どといふ事^{こと}有^{あり}て、伸^{のび}るにも縮^{ちぢ}むにも、其多少^{たせう}は人々^{おのおの}各々^な常^{とこ}に慣^{かざり}る處^{もと}を以^{もつ}て度^どとして忖^もるべからざるものなり。或^{また}は食^{しょく}を収受^{うけ}て漸々^{ぜんぜん}に伸脹^{のび}て、其常^なに慣^{かざり}る所^{ところ}の度^どに及^{およ}ぶ時は、満足^{まんじつ}するものなり。而^{そし}て又^{また}其中^{うち}にある食物^{しょくもつ}、漸々^{ぜんぜん}に消化^{こな}て減耗^{へる}に應^{したが}ひ、漸々^{ぜんぜん}に収縮^{しゆく}て常^{つね}に慣^{かざり}る處^{ところ}の度^どに及^{およ}びて、其収縮力^{しゆくしゆく}に對^{たい}べき支障物^{さわもの}乏^{とほ}しくなる時は、又^{また}資食^{しよく}を催促^{さいそく}する。是^{そし}常^{とこ}なり。而^{そし}て右^{みぎ}にいふ如^{ごと}く、食^{しょく}を収受^{うけ}て伸^{のび}るに常^なに慣^{かざり}る度^どに及^{およ}ぶ時は、満足^{まんじつ}すると雖^{いへ}ども、此時^し又敢^いて食^{しょく}すれば敢^いて伸^{のび}び、益^{ます}食^{しょく}すれば益^{ふく}膨^{ふく}れ、此^この如^{ごと}くして屢次^{だんだん}常^{つね}に慣^{かざり}る度^どを超過^{こゆう}する時は、其収縮力^{しゆくしゆく}弛^なみ、或^{また}は化機^{くわき}伸縮^{しんしゆく}の作用^{はたらき}（12丁オ 挿絵）（12丁ウ）を妨^{さまた}ぐ。

而^{そし}て因^{もと}より縮^{ちぢ}むべき僻慣^{くせなれ}の有^{ある}ものゆへ、少頃^{しばらく}して自然^{しぜん}に又^{また}漸々^{ぜんぜん}緩^{ゆる}やかに収縮^{しゆく}ものなり。然^{しか}れども一回^{ひとたび}伸^{のび}るに過^{すぎ}る時は、其収縮^{しゆく}に常^{つね}に慣^{かざり}る處^{ところ}の度^どに及^{およ}ばず。中途^{ちゆうと}にして其収縮力^{しゆくしゆく}おとろゑ中に、食^{しょく}の乏^{とほ}しきにあらざして、其餘^{のこり}食^{のしよく}に對^{たい}べき力^{ちから}の弱^{よわ}きに因^よて腹^{はら}の中^{うち}、唯何^{ただなに}となくたよりなく、或^{また}は飢^{うへ}たる如^{ごと}くおぼゑ、又^{また}は資食^{しよく}を欲^{もとむ}る心^{こころ}を生^{せい}ずるものなり。此時^し食^{しょく}せずして耐^たゆる時は、少頃^{しばらく}にして其収縮力^{しゆくしゆく}又^{また}其元^{もと}に復^{かへ}る。或^{また}は少^{すこ}しづつ食^{しょく}して凌^{しの}げば、一日^{いちにち}或^{また}は二日^{ふたにち}にして漸々^{ぜんぜん}に前々^{まへより}常^なに慣^{かざり}る度^どに復^{かへ}ると雖^{いへ}ども、此時^し誤^{あやまつ}て其欲^{おほ}に任^{まか}せ、漫^{みだ}りに食^{しょく}して止^{やま}ざれば、終^{つい}に其収縮力^{しゆくしゆく}ぬけて、食物^{しょくもつ}は消化^{ためし}ず腐敗^{ふはい}滯^{とど}り、之^{これ}に因^{よつ}て重症^{おもき}を病^やむものなり。○經驗^{けんげん}に因^{よつ}て之^{これ}を證^{しるし}ば、人々^{ひと}日毎^{ひごと}食^{しょく}するに常^{つね}に慣^{かざり}る度^どあり、量^{りやう}あり。而^{そし}て偶々^{たま}夜^よる寢^ねるに及^{およ}び、常食^{さだまり}の外^{ほか}に又^{また}一食^{ひとしよく}を喫^くする事^{こと}あり。而^{そし}て其翌朝^{そのあした}に及^{およ}び、腹^{はら}の中^{うち}に其一食^{ひとしよく}（13丁オ）の餘計^{よけい}に満有^{みちある}を覺^{おぼ}へず、反^{かへつ}て常^{つね}より腹^{はら}の耗^へりたる如^{ごと}くにおぼへ、食^{しょく}を欲^{もとむ}る心^{こころ}の常^{つね}よりは急^{いそ}ぐものなり。是^{こゝ}他^たにあらざ、全^{ぜん}く胃囊^{いのう}の伸^{のび}るに常^なに慣^{かざり}る度^どを超^{こへ}て、須臾^{しゆく}収縮力^{しゆくしゆく}おとろへ、中^{うち}にある食物^{しょくもつ}に對^{たい}ゆる力^{ちから}の弱^{よわ}きゆへなり。

○人々^{やま}病^ひひに脾^{いふ}の弱^{いふ}りと言^{こと}あり。是^{これ}此収縮力^{このちぢむちから}の弱^{いふ}りを謂^{ただ}なり。但^{ただ}し大人^{おとな}に

して是を病む人稀にあり。小兒は胃囊いまだ薄く且軟かにして、其力又
 弱き故、此病ひに罹る殊に多し。其重症を脾疳といふ。○弊家に製する脾
 肝藥玉圓は、食物消化す加勢を致して、此収縮力をよく補ふと雖ども、
 飲食を減して其収縮力を養ひ、消化やすき食物を食して漸々慣に其力を
 導き、其消化作用を誘ふべき心得にて、養生をよくせざれば、其病にし
 て之を用ゆるも、其微功を驗る事を得ざるなり。何となれば、是れ藥は唯
 加勢を致すのみなればなり。○殊に赤子は、此消化器其形容は稍やく備
 (13丁ウ)ると雖ども、小兒とは最も又たうすく柔らかにして、且力らも
 弱く、其用を作すに堪へず。また其他消化すべき種々の具も充分ならず。
 故に天は赤子を育つるに、其消化を其母に借り與ゆるに乳を以てす。而て
 後小兒と成に及び、先づ漸々に齒を作り、而て其他種々の機械の漸々充實
 するに應、漸々に食物を母に借乳を廢、而て身體の結構を大にする材料の
 爲に漸々に食物を要。然れども前にいふ如く其消化力いまだ甚だ弱し。故
 に人是を攝育するに、此天然の漸々慣れに作す道理を心得、消化やすき
 食物をゑら〔選〕みて、或は食を與へ、或は乳を與へ、而て常に其分量
 を斟酌して漸々に其消化力を導びくべき心得にて養なわざれば、若し誤
 て其分量を過は、其消化力堪へ得ずして器械損傷じ、百般の病ひの原たち
 まち發生するものなり。
 ○試に小兒の病ひに多くある症の一二を擧るに、○或は(14丁オ)夜泣、
 ○或は物をとろ〔驚〕き、○或は常に生米・壁土、又は消炭・土器等の類
 を好て食し、○或は乳をはき食をはき、○或は鼻の孔赤くただれ、○或は
 餅・煎豆を多く嗜り、○或は晝夜となく湯茶をこのみ、○或は大便の色白
 く或は青く或は黒く、○或は大便度なく屢々下痢、○或は疲衰へて、然
 も腹は脹て太鼓の如くなる。○右等の病ひに罹るが如きは、是皆其原多く
 は其慈母一時の愛に溺れ、小兒の嗜欲を制するに忍びず、少頃く其意を
 慰めん爲乎、若しくは乳ばなれの時、唯滋味に飽しめん事を欲、其食物
 をゑらまず、漸々の分量を顧みず嗜るにまかせ、好むものを與へ、飲食の
 適量多少を過し、爲に消化機械に多少の損傷を生ずるに因る。早く弊家に
 製する脾肝藥玉圓を用ひたまへ。必らず治す。或は常に之を用ゆれば、常

に食物消化の加勢を致し、其病の發すべきを發せざるに防ぐ。

(14丁ウ)

幼童養育の心得

○幼童とは六七歳より十四五歳までをいふ。此時に當ては、成長の勢力最も盛んなる期なれば、殊に滋養物を食せしめ、勉強其度に過べからず。運動させて常に身體を洗ひ、清潔して輕薄衣を着せ置べし。而て夜分は充分に寝さすべし。○強て勉強致さすべからず。且勉強中屢々放課すべし。○椅子或は机に倚て非常身を屈て讀書・習字等久しく致さすべからず。○父師之を叱るも打擲すべからず。○殊に女子は衣服を優に着すべし。是狹隘の衣服を着て久しく縫箔等を勉強して、運動を欠に因て屢々鬱滯症、或は神經¹³⁶⁾に關る諸症等を發することあればなり。

虫の病養生の心得

○小兒に病ひあれば、其何病たるを問わず、人概て之を虫といふ。故に小兒の虫といふは、小兒の病といふべきの代(15丁オ)語に似たり。然れども虫の病は大人にもなきにあらず。又小兒の病ひ必らず虫に限るにあらず。人或は他の病ひの爲に虫を生ぜるあり。或は又虫の爲に病ひを生ずるあり。原因異なるれば、虫も又異なり、故に又其虫に數類有といへども、他に原因して異類の虫を生ずるは甚だ稀にして、常に原因するの多き部分は胃腸なり。而て多くは其虫、蛔虫と條虫となり。是れ全く彼の消食機の消化力よわり、食物の消化遅々して腐敗停滯蒸るに因る。例ば、芥溜場にある腐敗物むせて虫を生ずる如きものなり。是を心得て、常に飲食するに各自の消化力をはかり、其適量の過ぎざる様、注意て是を防ぐべきなり。

○蛔虫とは蚯蚓の如きをいふ。條虫とは細少蛆の如きをいふ。此二種ともに其色白きあり、又少し赤みありて桃色なるあり。病人其白き虫を生

ぜる時は、食^{しよく}を貪^{むさほ}るものなり。(15丁ウ) 又其^も桃色^{もいろ}の虫を生ずるときは、食^{しよく}を欲^{このま}ぎるあり。然^{しか}れども何^{いづ}れも甘^{あま}き食^{もの}を好^{この}むことあり。而^{そし}て各^{やまひ}症^し少^{こと}し異^{こと}なり。

○白色^{しろいろ}の蛔虫^{くわいちう}は、小兒^{こども}・幼童^{わらんべ}・男女^{なんによ}・大人^{おとな}ともに多くあり。赤子^{あかこ}には凡^{およそ}なきものなり。此虫^{むし}を腹中^{はらのうち}に生^{せう}ぜる時は、或^{あるひ}は常^{つね}に嘔氣^{むかつき}有^{あつ}て胸^{むね}わるく、或^{また}は口^{くち}の中^{うち}にむしづはしり、或^{あるひ}は折^{おり}々^{おり}腹^{はら}いたみ、或^{また}は下^{した}はら〔腹〕にてすじばり、或^{こと}は夜^よる寝^ねて居^いても、急^{きう}に起^おきあがり、或^おはビクビクとうごく事^{こと}あり。

○白色^{しろいろ}の條虫^{じようちう}は、多^{おほく}分^{こども}小兒^おにあり。折^{おり}々^{おり}幼童^{ようとう}又^{おとな}大人^{おとな}の婦人^{おんな}にあり。又稀^{まれ}に赤子^{あかこ}にあり。男^{おとこ}子^この大人^{おとな}には凡^{およそ}なきものなり。此虫^{むし}を腹中^{はらのうち}に生^{せう}ぜるときは、思^{おも}ひよらざる變症^{かわつたやまひ}をあらわし、或^{あるひ}は又^{とき}時^{さだ}を定^{さだ}めずしてさしひき¹³⁷⁾のある熱^{ねつ}を發^{はつ}することあり。小兒^{こども}は頓^{にわか}にひきつけることあり。

○桃色^{もいろ}の條虫^{じようちう}は、凡^{およ}そ總^{すべ}て白色^{しろいろ}の條虫^にに似^にて、其^し症^{しょう}白色^{はげ}の虫^{むし}より劇^{はげ}しく、或^{あるひ}は時^{とき}として驚^{おどろ}かすことあり。此虫^{こども}は多^{おほく}分^{こども}小兒^{こども}にあり。又幼童^{ようとう}・婦人^{おんな}にあり、赤子^{あかこ}又^{おとこ}男子^{おとこ}の大人^{おとな}には甚^{まれ}稀^{おほ}にして、凡^{およ}そはなきものなり。此蟲^{むし}を腹中^{はらのうち}に生^{せう}ぜるときは、種^{いろ}々^{いろ}驚^{おどろ}くべき異^{つね}常^に不^{かわ}測^{かり}の變症^{ふしぎ}をあらはし、或^{かわつたし}は又^{また}頓^{にわか}に甚^{はなは}だ驚^{おどろ}くべき大熱^{だいねつ}を發^{はつ}することあり。時^{とき}に人^{ひと}々^々誤^{あやまつ}て是^{これ}を疫熱^{えきねつ}とし、或^{あるひ}は是^いを虫疫^{むし}と言^{いふ}。或^おは其^{その}熱^{ねつ}の頓^{にわか}にさむる事^{こと}あるを見て、蟲^{むし}おこりといふ。然^{しか}れども其^{その}時^{とき}を限^{かぎ}らず、頓^{にわか}に熱^{ねつ}のさむるあるは、是^これ疫^{えき}にあらず、おこりにあらず。早^{はや}く其^{その}蟲^{むし}をされば、速^{すみ}やかに治^ちするものなり。

○桃色^{もいろ}の蛔虫^{くわいちう}は、甚^{はなは}だ懼^{おそ}るべき惡蟲^{わるきむし}にして、至^{いた}て其^{その}勢力^{ひき}つよく人^{ひと}に大^{おほい}に害^{がい}す。心得^{こころえ}ざれば、人^{ひと}命^{いのち}を奪^{うば}ふ事^{こと}あり。此虫^{こども}は多^{おほく}分^{なんによ}男女^{おとな}大人^{おとな}にあり。折^{おり}々^{おり}幼童^{ようとう}にあり。偶^{たま}々^々小兒^{こども}にあるも甚^{はなは}だ稀^{まれ}なり。赤子^{あかこ}には曾^{あか}て有^あを見^みず。此虫^{むし}を腹中^{はらのうち}へ生^{せう}ぜる時は、或^{あるひ}は胸^{むね}へ攣^{ひきつ}り、と心^{むね}下^{もと}へひきつり、或^{また}は頓^{にわか}に胸^{むね}へさしこみ、痛^{いた}める事^{こと}あり。或^うは腕^{うで}を攣^{ひきつ}り足^{あし}をひきつり、或^{また}は攣^{ひきつ}り(16丁ウ)て伸^{のび}ざるあり。或^{あるひ}は一^じ時^{しよく}大^{おほ}に食^{しよく}をむさぼり、而^{そし}て後^{のち}二^{ふた}日^{にち}或^{あるひ}は三^{さん}五^ご日^{にち}も食^{しよく}を斷^たつことあり。或^{また}は其^{その}甚^{はなは}だしきは、心^{こころ}神^{しん}常^{じょう}ならずして獨^{ひとり}り言^{こと}をいひ、或^{また}は謔語^{たわごと}いふて、異^{かわ}常^{りたる}事^{こと}をなすあり。故^{ゆへ}に親^{かな}族^い驚^{おど}ろき誤^{あやまつ}て是^{これ}を癡^{きちがい}狂^{きやう}なりとし、或^{また}は是^{きつ}を狐^{きつ}狸^{ねき}の魅^{ばか}せるものとし、其^{その}治^ちを醫^いに請^{いた}ず。

東奔西走、神に禱るありと雖ども、是少頃く或は一日、若しくは三五日にして其治まる期至れば、自然に一時治まるものなり。而て日を過ぎて後、或は又頓に發り、或は又頓に治まり、屢々其病ひにさしひきの有は、是必ず癲狂にあらず。狐狸の魅せるにあらず。此虫の病ひを致す徴なり。人々常に狐狸の魅せるといふは、臆測するに多分此蟲に病む人なるべし。而て此蟲は、其他又種々意外の異常不測の變症を現す事あり。注意ざれば、其治を誤る有稀からず。

○右にいふ、夫是の容體有て、或は其症の疑がはしきは、其（17丁オ）病人の眼を見るべし。白玉の所其色青く、黒玉するどくして常ならず、或は目じりの方つり上り、或は時々キヨロキヨロと空目をつかひ、或は人と接話中頓に何か懼るる如く左右を視て眼づかひ定まらず、而て又鼻の上兩眼の間、或は豎に或は横に青筋顯われ有ものなり。前にいふ、夫これの容體に是等を照會して参考べし。

○右にいふ、夫是の症あらば、弊家に製する消虫丸を用ひたまへ。其むしを去るに、速やかに徴功あり。然れども是は唯一時其既に生ぜる虫を去るまでにして、他に又何の功有にあらず。何となれば、是セメン劑なればなり。故に再び又其虫を生ずる事なしとせず。其虫を生ずる原因の根を斷つべきには、弊家に製する脾肝藥玉圓を用ひたまへ。食物を消化す加勢を致して、停滯の腐敗物をさばき、虫の生ぜる原因を斷つ。然れども是は又其既に生ぜる虫を去る（17丁ウ）べきには、其功稀し。故に其虫を去て其原因を斷つべきには、弊家の消虫丸と脾肝藥玉圓との二藥を兼用ひたまへ。

大人養生の心得

○強壯の年齢とは、十六七歳より四十歳までにして、人々最も健康なるの期なり。此時に守るべきは、左にいふ養生法なり。而て殊に飲食の節度を誤らざる様注意べし。又勉強・運動必らず適度になすべし。

○四十歳以後を老年といふ。此時より身體漸やくに老衰に趣くがゆへに、

總ての事に過減を斟酌し、食物は殊に消化やすき物をゑらみて食すべし。
 小量の酒は甚だよとす。温度は小兒の如くにして、強壯時よりは暖
 かきやうになすべし。○壯年人に擬んと欲て、不當なる作業力役等を爲
 すべからず。○老衰るにしたがい、些少の動作を爲すにも呼吸短促する
 ものなり。然れども是が爲に漫りに過劇（18丁オ）薬等を用ゆべからず。
 ○飲食は必ず時刻を定むべし。

○凡人其身の健康なるを保つには、食物の消化を以て第一とす。人に適
 とする食物の量は其年齢・職業¹³⁸⁾・性質・體熱・習俗・衣服・
 健康・疾病等に關ありて、大に差違の有ものなり。○食物の量は消化
 機械の時々形状に因て加減せざるべからず。若病氣等にて消化力弱き
 時は、唯其力らの堪へ得る處を以て適量とす。之を超ゆれば、機械損傷
 ず。○又前食いまだ消化ざるに後食を喫するは、其害甚し。何となれ
 ば、半消化のものと未消化のものと混合て胃中に凝滞ればなり。是を以
 て食と食とのあひだ、又消化機關の作用の間は、充分ならざるべから
 ず。身體薄弱ものは益すきびしく是を遵守ざるべからず。

○總て食物はよく嚙て後、咽を下すべし。然らざれば胃中の機關輒すく消化
 業を爲す事を得ざるなり。儘食を嚙ず（18丁ウ）して咽を下す人あり。
 是終に大に害を醸す。○然れども又急速食を嚙は宜しからず。急速嚙と
 きは口の中にて混和すべき唾を生ずるに暇あらず。唾を混和ざる時は
 胃中の消化甚だかたし。故に總て食物は緩々喫すべきなり。○食物と
 飲料とは同時に下すべからず。同時に是を用ゆれば、食物唾の混和を要
 ずして胃中に入る。然る時は、生唾管は其職業を務ざるを以て益衰弱、
 胃腑は唾の助力を得ざるを以て大に損傷すべし。又食物・飲料に關らず、
 總て極冷極熱物は、大に全體の害をなす。必ず用ゆべからず。

○總て心思を腦したる時には、胃中の機關稍衰弱て、消化力を出す事
 得ず。故に烈く身體を役、心思を勞たる後は、三十分より一時間まで
 の時間を経るにあらざれば、喫飯すべからず。而て其時間は笑談等をし
 て過すを最良とす。

○而て又養生に欠べからざるは、運動の一事なり。運動と（19丁オ）は、

西土にては、其身體を少しく反て、左右の手を振り、足數凡三百或は五百
 百程運ぶ間歩行、而て又左右の掌を兩脇腹に當て、又足の數三
 五百運ぶ間適宜歩行をいふ。皇國にては未だ慣ざる事ゆへ、若し他の
 見る處いかんと心に咎むる人あらば、日々近傍の眺望のよき樹木の茂れ
 る所に至り、適宜逍遙をなすか、或は適宜所に神社あらば、毎日に
 朝夕參詣する等妙なり。

○運動は關節を運轉し、筋を屈伸¹³⁹⁾し、血液を進運し、且精神を爽快な
 らしむるものにして、人身健康なるべき爲に欠べからざるものなり。然
 りと雖ども、運動及び静息に各其正度を得ざるべからず。運動度に過る
 時は、静座逸居の度に過るが如く齊じく害あり。運動は其人の體質の強
 弱に依て其度ありと雖ども、小兒の時は殊に運動の爲に注意せざる時は、
 遂に一生を害する事あるべし。○虚脱人は、強(19丁ウ 挿絵)(20丁オ)
 壯の人の如く大に運動する時は、大に害あり。○病後俄かに大に運動す
 べからず。其度必らず醫に問ふべし。

○運動中、次の八則を守るべし。

第一 運動中窮屈狹隘なる衣服を着るべからず。

第二 運動中甚だ疲るるを耐忍して猶止ざる時は害あり。故に運動中
 不快を覺ゆる時は直に休息すべし。

第三 運動中時々休息すべし。運動の後、必らず疲れの復るまでは静息す
 べし。

第四 運動するには劇しく力らを用ゆべからず。始は緩かにして漸次に強
 かるべし。

第五 運動によりて血液の循環を進運して、飲食¹⁴⁰⁾の消化を進むるがゆ
 へに、運動中及び其後は殊に新鮮空氣中に静息すべし。

第六 運動中若し動悸抗盛・呼吸短促・頭痛眩暈・顔色青白、或(20丁
 ウ)は身體甚だ熱を發し、或は甚だしく發肝¹⁴¹⁾するときは、速や
 かに休憩すべし。

第七 運動の後、直に飲食すべからず。又食後直に運動すべからず。其
 消化に害あればなり。

第八 運動中及び其後は、身體寒からざる様注意すべし。

○身體の健康を保つべき養生には、此運動は必ず常に欠べからず。人或は依剥昆垓兒¹⁴²⁾・喜斯的兒¹⁴³⁾等を病むが如きは、是皆其病原常に此運動を欠に由て、血液の循環宜しからず、神氣内に壓塞て發動せざるに因る。試に其病人を見るべし。常に耕耘¹⁴⁴⁾・力作等を業とする人にあるは甚稀にして、多分は皆大家の深室に在て、常に滋味食に飽、身體を容易く動かす事のなき人か、或は又朝夕帳簿に對ひ、算盤を操て終日座業をなす人か、或は又婦人に多し。蓋し婦人は其性質慎み深く、常に深室に在て逍遙すべきを欲も、其自由(21丁オ)心にまかせず、或は又内事を掌て、今日の事務におわれ、逍遙等其暇を得ず。故に心思發動するなく、常に鬱滯して、血の道等といふて、とかく總て神經に關る症を病む。是皆此運動を欠が爲に病むの外ならず。故に同じ婦人にて、農工商を問はず、其業を男子と俱に致し、或は常に耕耘・力作を扶け、或は常に其逍遙の自由も心の儘に得るが如き婦人に至ては、是等の病に罹る人有を見ず。之を以て是を觀るべし。運動は常に必ず欠べからざるものなり。

○婦人のぶらぶら病に其始め心下塞がり、唯何となく氣むつかしく、種々故言ひひながら、病床に臥すにもあらず、唯家内にぶらぶらとして、萬事に克氣がつき、少しの事も心に係り、左程迄もなき事を深く案じ過し、他見には左のみ病人の様にも見へずして、日々漸々に衰弱する症あり。是等は常に此運動を欠が爲に、神氣發動するなくして、血液(21丁ウ)の循環宜しからず。其病むに及では、人々の勸奨を聞ても、運動致すを好まず。益々心神鬱滯して泄るなく、漸に其症を重ぬるものなり。弊家の脾肝藥玉圓は、是等の病ひに用ひ、血液を循環す加勢を致し、勸めざるに運動いたす心を生じて鬱を散じ、神の如き微功あるを從來常に驗る處なり。依て是を用ひ給ふ人々の便宜に供る爲め、次に弊家製藥の取次所を掲て廣告す。

近代以前と以後における民衆向け育児書の変貌

明治十一年三月改正


石田勝信識

改正 小兒養育心得 終

石田勝信・勝秀
大人攝生小兒養育心得

【明治34年（1901）版】

弊家製劑購求注意

へいか せいざいきんらいめいほうか ばいやくてん ならび じ ぜん か うけうり なしくだされそるかたたすう つ
弊家の製劑近來名望家の賣藥店、并に慈善家の受賣に被成下候方多數に就
き、^{ちくいち}逐一其姓名を^{ほんのふがき}本能書に記載致し難く候間、御購求の諸君は、貴地賣
やくてん あるひ (じ) ぜん か うけうりてん へい か しょうへう しるし しか おんもとめ うへおんもとめなし
藥店、或は慈善家の受賣店にて弊家商標  印を確と御認の上御購求被
くだされそうら いささ さうぬこれなくそろ も きち ばいやくてん おんもとめ せいざいしな ぎ せつ
成下候はば、聊も相違無之候。若し貴地賣藥店に御求の製劑品切れの節
は、^{かなら}必ず弊家へ直接に藥價代、并に小包料共郵便切手にて御注文被成下
そうら さうさうゆうそうつかまつるぶくそろ かつまたゆうびんかわせ ごちうもん なしくだされそうら
候はば、早々郵送可仕候、且又郵便爲換にて御注文被成下候はば、
きやうとごでうしきよくあて ごそうきん なしくだされなくそろ
京都五條支局宛にて御送金被成下度候。

勅 語¹⁴⁵⁾

ちんおも わ くわうそくわうそうくに はじ こうあん とく た しんこう
朕惟ふに我が皇祖皇宗國を肇むること宏遠に徳を樹つること深厚なり。
わがしんみん よ ちう よ こう おくてうここら いつ せいせいこの び な これわがこく
我臣民克く忠に克く孝に億兆心を一にして世世厥美を濟せるは、是我國
たい せいかわ 福 體の精華にして教育の淵源亦實に此に存す。爾臣民父母に孝に兄弟にい
う 友に夫婦相和し、朋友相信じ、恭儉己を持し、博愛衆に及ぼし、學を
おさ げふ なら もつ ちの う けいはつ じやうじゆ すす こうえき
脩め、業を習ひ、以て智能を啓發し、とくき徳器を成就し、進んで公益を
ひろ せいむ ひら つね こくけん おもん こくはふ したが いつたんくわんきふ
廣め、世務を開き、常に國憲を重じ、國法に遵ひ、一旦緩急あれば、
ぎゆうこう ほう もつ てんじようちきう くわううん ふよく かく こと ひと ちん
義勇公に奉じ、以て天壤無窮の皇運を扶翼すべし。是の如きは獨り朕が
ちうりやう しんみん けんしん なたもつ なんぢそせん いふう けんしやう た
忠良の臣民たるのみならず、又以て爾祖先の遺風を顯彰するに足らん。
こ みち じつ わ くわうそくわうそう いくん しそんしんみん とも じゆんしゆ ところ
斯の道は實に我が皇祖皇宗の遺訓にして、子孫臣民の俱に遵守すべき所、
これ こん せん つう あやま これ ちうぐわい ほどこ もと ちんなんぢしんみん とも けん
之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らず、朕爾臣民と俱に拳
けんふくよう みなそのと いつ こひねが
拳服膺して、成其徳を一にせんことを庶幾ふ。

明治二十三年十月三十日

貴顕御製勸學唱歌

みづ うつは したが
水は器に従ひて
ひと まじは とも
人は交る友により
おのれ とも
己にまさるよき友を
こころ こま わち
心の駒に鞭うちて

その なり
其さまさまに成ぬなり
よきにあしきに移るなり
えらびもと もろとも
求めて諸共に
まな みち すす
學びの道に進めかし

誓詞の唱歌

てんわう へいか
天皇陛下のかしこくも
きやういくちよくご ほうたい
教育勅語を奉體し
ちう こう
忠と孝とのふたみちを
したしき ちち ちち
したしき父とたよるべく
し みをし まも
師の御教へを守りつつ
ち とく がくかう
智徳をすすめ学校の
からだよわくば何事を
いつも うんどう
運動いさましく
ほどをすごすな いうんしよく
飲食を
い とき
言ふべき時にのぞみなば
おこな
行ふべきにであひなば
うらおもてなき人 ひと
をこそ
たちふるまひをしとやかに
そのみさををばおごそかに
おのおの 心こころ
心にちかひつつ

みこころこめてのりましし
あさ
朝なふゆなにおこたらず
ひとつごころにおこなはむ。
こひしき はは
母とたのむべき
まなびのわざをいそしみて
かんば な
芳しき名もあげてまし。
おもひたつともかなふまじ
つね しせい ただ
常に姿勢を正しくし
さわやかにせよ せいしん
精神を。
つつむことなくいふはよく
はばかりもなく行 ひと
ひて
まことのひとといふべけれ。
すがたかたちをみやびかに
そのたのしみをきよくして
み ひんかく
身の品格をたかくせよ。

こころ まこと みち
心だに誠の道にかなひなば

いのらずとても神^{かみ}や守^{まも}らむ
ひとおほ ひと なか ひと
人多き人の中にも人ぞなき
ひと ひと ひと
人となれ人ひととなせ人

(1丁オ)

こどもそだてかた ころこえ ひかんやくわうえんかうのうがき¹⁴⁶⁾
小兒養育の心得 脾肝薬王圖効能書

○凡そ人の思ひは、疾より甚しきはなし。疾あれば、一生を全うすること
能はず。健康ならざれば、事物の業に堪へ、其効を遂ぐることあたはず。
ひとびとうまれつき つよきよわき いへど たつしや もと そのみ やうじやう けだ
人々稟賦の強弱ありと雖も、健康の原は、其身の養生にあり。蓋し
からだ やうじやう きけつ めぐり くひもの こなれ りやうべん つう ようじん もつ だい
身體の養生は氣血の循環と食物の消化と両便の通じに注意するを以て第
いち そもそもわたくしかた せい ひかんやくわうえん ひ ん じやうぶ くひもの こなれ
一とす。抑 弊 家に製せる脾肝薬王圖は、脾胃を健にして食物の消化に
かせし はらのうち とどこほ あしきもの さり きけつ めぐら きのふさげ さん
加勢し、腹中に滞れる汚物を去てよく氣血を循環せ、鬱氣を散ぜしめ、
き ぶん やしな かう 御 つか ぎ こんき また びやうご
精神を養ふの効あり。故に常に氣をふさげ、耐氣のうすき人、或は病後・
さんごなど ひだちかぬ ひと また やまひ なに
産後等の肥立難る人、或はさしたる病氣の有にあらざれども、何となく
き ぬみくひあち ものごと たいくつしやす せいだす
氣ふしやう「不精」にして飲食味なく、事物に倦み易くして、勉強の
はねをり ころ にく ひとなど しばら このくすり ぢやく つづけのみ そのきぶん やしな
勞に堪へ難き人等は、暫く此薬を持薬として連服すれば、其氣力を養
ひ、其鬱を散し、其精神をして爽快ならしむ。或は右等に原因して發する
やまひすくな そのやまひ なにやまひ と これら もとづき はつ やまひ
病症尠からず。其病の何症たるを問はず、是等に原因して發せる疾に
このひかんやくわうえん もち いづ そのききめ あらはす かみ ごと ゆゑ
は、此脾肝薬王圖を用ゐれば、何れも其治効を奏すること神の如し。故
にこのくすり おも ころのうおう いへど これ もち てきめんそのこう う びやうしやう
に此薬の主とする効能多しと雖も、之を用ゐて觀面其効を得べき病症
の概略を挙げ、諸君に告ぐ。

○此脾肝薬王圖は之を用ゐる者の年齢に應じ、少しづつ加減の有ことな
れば、何歳の者(1丁ウ)に用ゐると使の人へ必ず告越給はれ。

○編中に畫を加ふるは、畫に要あるにあらず。兒童或は病人の関る心を
轉し、其勞倦を慰めんが爲のみ¹⁴⁷⁾。

○此書は人々養生の心得を記し、弊家製薬愛顧の諸君へ而已無代價にて
しん もの ゆゑ くすりかふひと た の み このくすりだい ほか このほん あたひなんば と
進ずる物なる故、購得者へ依託し、薬價の外に若し此書の代價何程と問
ふ人ありとも、必ず取合給ふべからず。

ひかんやくおうそん こうのう
○脾肝薬王圓 主治¹⁴⁸⁾

大人分目方貳拾八匁入七日服用分 金四拾五錢
大人小兒両用小粒目方貳匁入 金參拾五錢
小兒分小粒目方五匁六分入
五才以下七日服用分 金貳拾錢

セウシヨクキ スキジヤク ひ めい よは
○消食器の衰弱 脾胃の弱りをいふ

此病^{このやまひ}症^{たま}は稀^{おとな}に大人^{あれども}にも雖^{わけて}有^{こども}、殊^{とき}に小兒^{おほ}乳^{たべもの}ばなれ^{つね}の時^すに多^すし。食物^{きふしやう}常^{いりまめ}に過^{かきもちなど}ぎ、氣鬱^{この}にして、炒豆^あ、缺餅^{おもきしやう}等を好^{だいべん}み、飽^{しきり}くこと^{なり}なく、重症^{はら}は大^{たい}便^こ頻^はに下^{からだ}利^が、腹^きは太^{やう}鼓^にの如^{やせ}く脹^{おと}りて、身^{ひと}体^とは餓^{これ}鬼^をの如^せく瘦^な衰^{した}ふ。世^{くち}人^し之^くを
脾肝^{ひかん}病^{やまひ}と謂^いふ。或^{ある}は重^{おも}からざるも、生米^{なまこめ}・壁土^{かべつち}・土器^{かはらけ}・線香^{せんかう}等を好^{この}み
て食^くひ、止^やまざるものあり。或^{ある}は健康^{たつしや}にて他^{ほか}に症^{やまひ}なく、唯^{ただ}鼻^{はな}の下^{した}、口^{くち}の
まは赤^{あか}く爛^{ただ}れることあり。何^{いづ}れも皆^{みな}世^せ間^{けん}に蟲^{むし}病^{やまひ}、或^{ある}は脾胃^{ひゐ}の病^{やまひ}といふ。
此^{この}症^{しやう}に此^{この}薬^{くすり}を用^{もち}て全^{ぜん}治^ぢす。凡^{すべ}て胃^ゐの弱^{よは}き人^{ひと}は、常^{つね}に之^{これ}を用^{もち}れば、
胃^ゐ（2丁オ）を強^{じやうぶ}壯^ふにして、如^{かやう}此^{やまひ}の病^{やまひ}あること無^ならしむ。

イ ワウビヤウ き やまひ
○萎黄病 氣のふさぐ病をいふ

女子^{むすめ}十^{さい}四^し五^ご才^{さい}にいた至^{つきのめ}り、月^{つき}經^{けい}初^{はじ}めてあらん前^あ後^とに氣鬱^{きふし}して、唯^{ただ}何^{なに}と
なく氣^きむつかしく、他^{そと}に出^いづることを好^{この}まず、衆^{ひと}人^{びと}見^みて勞^{ろう}症^{しやう}にならん
とするを案^{あん}じる病^{やまひ}あり。之^{これ}に此^{この}薬^{くすり}を用^{もち}て大^{おほい}によし。又^{また}黄^ふ胖^く病^{びやう}¹⁴⁹⁾とて
男^{なん}女^{にょ}に拘^{かか}はらず、大^{おとな}人^{ひと}にして人^{ひと}々^{びと}のいふ小兒^{こども}の脾肝^{ひかん}病^{やまひ}に類^るし、氣鬱^{きふし}して
兎^と角^{かく}食^{しよく}を貪^{むさぼ}り腹^{はら}脹^はりて、立^たてば脚^{あし}腫^はれなどする病^{やまひ}あり。此^{この}病^{やまひ}にも此^{この}薬^{くすり}
用^{もち}てよし。

セウ ニゲリ くだ やまひ
○小兒下利 子どもの下り病をいふ

小兒^{こども}大^{だい}便^{べん}の色^{いろ}青^{あお}く、或^{ある}は粘^{ねば}りて白^{しろ}く、或^{また}は粘^{ねば}りて黒^{くろ}き大^う便^ら¹⁵⁰⁾の通^{つう}ずる
に、此^{この}薬^{くすり}用^{もち}てよし。

サンバイエキ

○酸敗液 りうゐん〔留飲〕をいふ

むなさき いた をりをり す みづ は
心下を痛め、時々酸き水を吐くによし。

ケイカウ フテウ

○経行不調 月水¹⁵¹⁾の定まらぬをいふ

ふじん つきのめぐり あ なか つね そろはぬ ただ とどこほ
婦人 月経 有りたり 無つたり、常に不調によし。但し滞りはめぐらせど
も、假令妊娠に流るる癖ある者と雖も、臨月まで能く保たしめ、必ず
安産するなり。

(2丁ウ)

シヤクビヤクタイゲ

○赤白帶下 しら〔白〕血、ながち〔長血〕をいふ

ふじん つきのめぐり しろ まじ お しら ち このしやう また
婦人 月経に白きもの混りて下りるを白帶下といふ。此症によし。又
月経の期限を過ぎていつまでも止まらざるを赤帶下といふ。此症に之
を用ゐれば、日ならずして治す。

キ ス テ ル¹⁵²⁾

○喜斯的兒 血のみち〔道〕病をいふ

ふじん やまひ ひ と さ やまひ み えざれども、つねに
婦人の疾病にて他人には左のみ病あるやうには見えざれども、不斷
氣鬱にして心するどく、凡て事物煩はしく思ひながら、何事にも能氣
が付き、兎角人の爲す事意に適せず、事物念に念をいれても氣がすまず、
左程にも無き事を只一途におもひつめ、益にたたぬ事を常にくよくよ思
ひ過ごし、夜寝ても種々の事を思ひ出だして寝られず、或はものを虞
て人に逢ふことを嫌ひ、房に籠り居て鬱々としてふさぐ病によし。

イ ボ コンデル¹⁵³⁾

○依剥眊的兒 氣のやまひをいふ

なんし じぶん こんき かな き こころつか わづか こと き かか やう
男子自分の耐氣に適はぬ氣をつかひ、精神勞れて僅の事も心に關る如
になり。事物念に念をいれても意不安、左程にも無き事を只一途におも
ひつめ、益にもたたぬ事を常にくよくよ思ひすごし、夜寝られず、或は
ものを虞て人に逢ふことを嫌 (3丁オ) ひ、子舎に籠り居て鬱々として
ふさぐ病によし。

ク ル ビヤウ
○佝僂病

せむし [背虫]、はとむね [鳩胸] をいふ

せほね むねのほねぜんせんかが やまひ このくすり もち もはやかが ほね の
脊髄・胸骨漸々佝僂む病症あり。此薬を用ゐれば、既に佝僂みたる骨は伸
びざれども、屈みたる而已にて止まるなり。故に痛む病には早く此薬
を用ゐるときは、痛は忘れたやうに治し、追々用ゐるときは、漸々に肥
太るなり。又痛まぬ症にも早く此薬を用ゐるときは、追々肥太りて目
立ぬやうになること實に妙なり。

れう ま ち す
○佝麻質斯

このしやう きふくわんせつ まんくわんせつ およ きんれう まち す みいろ ぐわんせつ かたほねの
此症は急關節、慢關節、及び筋佝麻質斯の三種あり。關節は肩
あたり ひぢ ひざ あしなど だいくわんせつあか は はげ いた さむけ ねついで みうごきふじゆうなど
肘、肘、膝、足等の大關節赤く腫れ劇しく痛み、悪寒、發熱、運動障碍等
を來す。筋佝麻質斯は一筋或は數筋共に冒され遊走性(遊走性場所の定
まらぬを言ふ)の痛を發す。此三種の佝麻質斯は冷濕なる氣候には増進
(ましすすむ)するなり。此病症には連服し給へば、日増に神驗あり。

つうふう
○痛風

このしやう さいないし さい なんし おほ はつ やまひ たべものすまず しんけい
此症は三十才乃至四十才の男子に多く發する病なり。食思缺乏、神經
衰弱し、眩暈、耳鳴り、知覺常とは異り、發作性に手の指、足の指等
の小關節劇しく痛み、硬く肥り、謂ゆる痛風結節を生ず。此病症には
此薬を連服したまへば、日増に神驗あり。

(3丁ウ 挿絵と漢文)

翁姓は平、勝元と諱し、鼎貫と號し、木工と稱す。父は勝幸と諱し、源
治と稱す。母は埜原氏なり。安永元年壬辰四月八日、丹波國桑田郡穴川
邨に於いて生る。人と爲りは、豪邁にして身體長大、音を吐くこと雷の
如く四鄰に達す。偶、天明八年戊申正月三十日、京師に大火ありて、人
家過半、烏有に属す¹⁵⁴⁾。翁、其火を觀んと欲し、大江坂(俗に老之坂
と悞稱す)に至り、遂に京師に出で、魚店巷高倉街に住めり。時に年十
又七¹⁵⁵⁾、安政五年戊午六月四日、下京大火となり、家屋は其災に是にて

罹るか。五條橋東第二町に遷居す。時を維ぎて翁年八十有七なり。慶應二年丙寅三月廿四日に歿す。享年九十又五。鳥邊山寶報寺に葬る¹⁵⁶⁾。

(＊原文漢文)

明治三十年一月上浣¹⁵⁷⁾

國香逸人識

〈図版16〉 鼎貫肖像

(4丁オ)

やうじやうこころえのぶ
○養生心得之部

さんぶ こころえ¹⁵⁸⁾
産婦の心得

○夫れ小兒の教育は、生後家庭の教育よりも、胎内教育を重しとす。故に人の母たる者は、平生品行を慎み、從順温和にして、苟且にも腹をたてず、人を憎み嫉まぬやうにして、衛生に注意すべし。妊娠して俄に品行を改むるは、甚だ爲し難き所作なれば、不斷に婦女子の龜鑑ともなるべきやう精々品行方正にすべし。如斯にして出産すれば、必ず無病壯健にして怜悧¹⁵⁹⁾なる兒を得るに至る。例へば五穀野菜の如き何程長き種子を撰むと雖ども、地面と時候と悪しきときは、豊作は得がたし。況して萬物の靈長たる人類に於ては、殊更其心得なくては叶はざるなり。蓋¹⁶⁰⁾し其靈長たる人類の良兒を得んと欲すれば、其親たるものの品行を慎み、衛生を重んじ、夫婦の交合を猥に爲すべからず。其要は精神活潑にして少しにても心に邪惡なる念慮なき時、大酒飽食せざる時、天候の風雨・雷鳴・地震等の無き快晴の日を撰みて交合を爲すべし。既に妊娠と定まる時は、斷然房事を絶ち、品行方正にして衛生を重んじ、精神は常に愉快なるやう注意すべし。又妊娠中は常に腹部臀部¹⁶¹⁾を冷やさぬやうにし、蕎麥・蕪菁は食ふべからず。蕪菁は漬ものもわろし。熱の無き時は、毎日腰湯して、腹部・臀部を温むべし。妊娠五ヶ月の後には、瀉車及び道路あしき處を腕車に乗るべか(4丁ウ)らず。而して産婆に腹部を按擦せしむべし。其際忠臣・義士・貞女・烈婦の話を爲さしむべし。是れ胎内の兒に

おのづ そのころ かんかく ゆゑん くれぐれ たいないきやういく よるひる
自然と其意を感覺せしむる所以なり。呉々も胎内教育といふことを晝夜
とも忘るべからず。

ふじんにんしん とき ことさらやうじやう だいじ つつし つね からだ ちから やしな
○婦人妊娠する時は、殊更養生を大切に慎むべし。常に身体の勢力を養
ふ爲に適宜に滋養物を食し、程よく運動をなして、房事を禁ずべし。
ふじん こ あるひとと ほんけ ぶんけ いだ おな こと なにほど
婦人の兒を生むを或人喩へて、本家から分家を出すと同じ事にて、幾許の
ろく ざい わ あた よつ ほんけ かなら それ へ ちやう ちやう ちやう ちやう
祿か財を分け與ふるに依て、本家は必ず夫だけ耗りがたちなり。故に前々
より常に心を用ゐて祿を殖し、財を蓄へ置ざれば、盛大の分家を出し難く、
ほんけ またおとろ え ぶんじん こ う これ おな みもちのうちからづく
本家も亦衰へざることを得ず。婦人兒を生むも是と同じ。妊娠中滋養の
しよくもち じうぶん からだ やしな ほんけ はは すこやか ぶんけ ことも
食を用ゐ、充分身体を養へば、本家たる母も健にして、分家たる小兒も
またすこやか このどうり ころえ みもちのうちやうじやう ゆるがせ
亦健なり。此道理を心得て、妊娠中養生を忽にすべからず¹⁶²⁾。

しゆつさん さいこころう うまれこ は は からだ はな とき くち うち ふく
○出産の際心得べきは、嬰兒生母の体を離るる時、口の中を含みたる
けがれものうぶこゑ あぐ したが のど い そのけがれもの すこ いへど
穢毒初聲を發るに隨ひ、咽に入ることあれば、其穢毒は少しと雖も、
いろいろ へん おとな のち しょうやう も と さん ときうまれこ
種々に變じて成長の後は諸病の原因となるものなれば、分娩の時嬰兒の
うぶこゑ あぐ まて ゆびさき しや きれ ま くち うち なる めぐ さる
初聲を發る迄に指頭に紗の裂を巻き、口の中を成だけよく拭ひ去べし。而
て嬰兒出生て乳をつくるまでに、大便黒く鉛の如きものを通ず。人之を
うまれこ うまれ ちち だいべんくろ あめ ごと つう ひとこれ
「カニココ」とも「カニババ」ともいふ。是出生前に母の胎内にて受たる
胎毒なり。故に隨分（5丁オ）多量に通ずるがよし。乳をつくれば、カニ
ココは通じ止むものなり。乳をつくる事、急ぐべからず。乳は嬰兒生て
ちうや すぎ のち はじめ あた は ふ これ は は ちち じかん すぎ
より二晝夜を過て後、初て與ふるを適度とす。是生母の乳四十八時間を過
ざればは〔張〕らぬものなればなり。其間は乳を與へずとも、嬰兒に害
ある事なし。而て嬰兒に乳をつくるに、生母の乳をあら乳と唱へ、嬰兒に
あた くだ い きら あた ひとおほ こ だい まちがひ
與ふれば下利るとて忌み嫌ひ、與へざる人多し。是れ大なる誤りなり。
そもそも は あらち うまれこそのはは たいない うけ くだ そうぢ ため か
抑 生母の新乳は嬰兒其母の胎内にて受たる胎毒を泄して掃除する爲に神
み たすけ 鹽ぶん よけい うまれこれ のめ おのづか よきほど くだ
明の冥助にて、鹽分といふを餘計にし、嬰兒之を嚥ば、自ら適宜に泄らし
むる天賦貴重藥乳なり。故に努々之を捨べからず。其儘直に興へて害
ある事なく、程よく泄りて後止むものなり。心得て天然に任せて悖る（さ
からふ）べからず¹⁶³⁾。

あか ごうまれてのち にな あひだ とかく はなのあなつま いきづかひ せはし した したしと
○赤子出生後七八十日の間、兎角鼻孔塞り、呼吸煩悶くなり、舌に鵝口瘡
生じ、夫が爲め乳を嚥むことを障礙し、肥立悪しくなること往々あり。故

あ か こうまれてのち にちにちあさゆふごと こうちう けがれもの あらひぬぐ とりのぞ そのほふ
に赤子出生後、日々朝夕毎に口中の穢物を洗拭ひ取除くべし。其法は
ちうたんさんそうだめかた にん ぐみたてのみづ と きまぜ か ね ふで もつ こうちううへした はぐき
重炭酸曹達目方貳匁を新汲水に溶解し、羽植筆¹⁶⁴を以て口中上下の齦と
した うへした と よくよくあら こうちうきよらか くさけ な
舌の上下とを三四度づつ能々洗ふときは、口中清潔になり、臭氣も無くなり、
はなのあなつま した しと で きず たん げん せいちやう のち はいた うれ
り、鼻孔塞らず、舌に鰓口瘡生ぜず、痰氣も減じ、成長の後に齒痛の憂
ひ等も少し。自然と衛生上に適ひ、肥立早く健康になること眞に妙なり。
ゆめゆめ怠るべからず¹⁶⁵。

ちう い みぎ しかたうたが ふたおや うち み かなら こうちうさつぱり
注意 右の方法疑はしくは、両親の内ためし試るべし。必ず口中爽快
なるを知るなり。(5丁ウ) 又重炭酸曹達は多量に服用するは宜し
すこし もち けんあざい ゆゑ こうちう あら とき
からず。少量に用ゐるときは、健胃劑となる故に、口中を洗ふ時、
せうせう の すこ がい あんしん
少々飲むことあるも、少しも害にはならず。安心すべし。

せうにやういく こころえ¹⁶⁶ 小兒養育の心得

ひと こども あひだそだてかた つひ いつしやう がい しやう
○人は小兒の際養育をよくせざれば、遂に一生の害を生ずるものなり。
こども やういく そのくひもの ははまた う ば ちる こと ややこ
小兒を養育するに其食物は母或は乳母の乳汁に如くものなく、殊に赤子を
やういく ごと またほかもの これ か もの さ そのはまた う ば
養育するが如きは、又他物の之に易ふべき物なし。然れども其母或は乳母
りうあんある また ねつ も しつけなど ひと ちち けつ あたふ され
に留飲有か、或は熱、若しくは癰毒等ある人の乳は決して與べからず。然
は は ちち ほか みだり ほかのくひもの あた うま
ばとて齒の生えるまでは乳の外、漫に他食物を與ふべからず。生れてよ
つきの のち いた は しやう もの く し いた かゆ
り八九ヶ月の後に至り齒を生じ、物を喰ふことを知るに至らば、粥のやは
ところ あた ぜんぜん くひもの く なら
らかき者を與へ漸々に食物を喰ひ習はしむべし¹⁶⁷。

そ ちも のまた わた あたま つね つつ よろ しめ
○而して衣類或は綿などにて頭部を常に包みまはすは、宜しからず。○濕
りけ きよきあたか ところ ね おき また ちち の また いだ すこ
氣のなき清淨温暖なる處に寝させ置、或は乳を飲ませ、或は抱きて少しづ
うんどう よきほど しい はらばひ あつきさむき さだまり
つは運動させ、適宜にすべし。○強て匍匐さすべからず。暖寒の度なく、
あるひ むさむさ ところ を よつ きふびやう はつ ようじん
或は不潔の空氣に居らしむるに依て、急病を發することあり。注意すべ
し¹⁶⁸。

こども さい さい いた こと くひもの す そのぶんりやう
○小兒二歳より五六歳に至るまでは、殊に食物の過ぎざるやう、其分量
こころ つ そこらきよく ほど あたたか ところ あそ そのからだ あら
に意を注け、空氣清潔して、程よく温暖なる處に遊ばせ、其身体を洗ひ
きれい こども とき ちち の いへど しだい
清潔にすべし。○小兒の時は、いまだ(6丁オ)乳を嚙むと雖も、次第に
くひもの すこ きを つ けて あた ぜんぜんくひ
やはらかき食物に少しづつよく注意して與へ、漸々喰ならはしむべし。○

こども あいだ ものいひ ただ としうへ したが かりそめ やくそく ちがへ
 小児の際より言語を正しくして、長上に従はしめて、仮初にも約束を違へ
 ぬやうにして、おもひやり わけ またせうじき こと な あるくこと かなら ひより
 仁恕の理、又正直の事に慣れしむべし。○歩行は必ず獨
 せしむべし。○三歳に至ては、さい いたつ ぜんぜんきもの うす そのからだ つよく
 漸々衣服を薄くして、其身を強壯すべし。
 つね いりめ もち いもるいなど たくさん あた また そのほかちから もの いへど かあいさ
 常に炒豆・餅・芋類等を多分に與へ、或は其他滋養になる物と雖も、懇愛
 に任せ猥に與ふときは やまひ おこ こども そのこころ なぐさ
 健康を害す。○小児は其心を慰むるに、とか
 たくひもの せが またそのはは かあいさ こころ そのこころ なぐさ せが
 く唯食物を貪むものなり。又其母は、懇愛の念より其心を慰めんと貪む
 にか まか むやみ あた やまひ おこ こども そのこころ なぐさ
 に任せて漫に與へ、識らず知らず其分量を過し、其爲め病を發すること
 おほ ようじん
 多し。注意すべし¹⁶⁹⁾。

ひ あ やうじやう こころえ 脾胃養生の心得¹⁷⁰⁾

ひと やまひ ひ あ よは こと これくひものさばけ よは その
 ○人の病に脾胃の弱りといふ事あり。是其胃中消食器の弱りをいふ。其
 さばくしかけ はら あつ ひとびとにちしよく もの うけ そし これをこ な
 消食器といふは腹部に在て、人々日々食する物を受て、而て之消化して
 そのからだぢやう やしな あ みやうみやう はたらき たいせつ しかけ ひとびと あぶくろ
 其全身を養ひ居る妙々なる作用のある大切の機關にして、人々胃囊とい
 ふ是なり。此胃は、譬ば彼ゴムにて作りしゴム笛の囊の如き物にて、常に
 この あ たとへ かの つく あぶ ふくろ ごとも もの つね
 のびちち もの そのくひもの うく くひもの この あぶくろのうち い とき い
 伸縮みする物なり。其食物を受るに食物の此胃囊中に入る時は、入るに
 これ ぜんぜん の ふく そし そのくひもの こなれ へ したが またまたぜんぜん ちぢ
 隨ひ漸々に伸びて膨れ、而て其食物の消化て耗るに隨ひ、亦復漸々に縮
 むものなり。而して其縮むに力有て、其縮む力も即ち前にいふ食物を
 こ な みやうみやう はたらき うち なにほど いりよう おふん
 消化す妙々なる作用の中、幾分か必要の部分なり。

(6丁ウ・7丁オ 挿絵) ¹⁷¹⁾

*挿絵は嘉永4年版12丁ウ・13丁オのものとほぼ同じ。字は活字。

かくのごとく肥満し、瘡氣のうれへもなき兒に却て驚風、かたかひ、は
 やくさなど のきふへん [急変] あり。尤くさ [瘡] のるゐ [類] 多く出來
 る小兒には虫の氣少し。

ひかん [脾瘕] の虫は乳ばなれるときより多くはやせおとろふるなり。

じんかん [腎瘕] せぼね、むねのほねいがむをいふ

しんかん
 心瘕よりのあはう

はいかんびやう はなのした くち まはり あか
 肺瘕病は鼻下、口の周圍、赤くただれるをいふ。

注 意

此病人、口の廻り赤くただれる處を至極清らかな晒木綿を一尺四方に切り、よく洗ひ石灰の氣を去りて後、微温湯に浸し、日に幾度もただれたる處をきれいに拭ふ時は、早く全治す。

(7丁ウ)

○而て常に飲食するに心得べきは、此胃囊の伸るにも縮むにも、其多少は各自常に慣る所を以て定限として悖すべからざるものなり。或は食物を収受るときは、収受るに随ひ、漸々に伸膨て、其常に慣る所の定限に及ぶときは、満足は覺ゆるものなり。而て又其機關の作用にて其胃囊の中に食物漸々消化て耗るときは減るに随ひ、漸々に収縮て、常に慣る所の定限に及びて、其収縮力に耐ふべき障礙物の力乏くなるときは、何となく腹に不足を覺えて、又資食を催促する。是れ常なり。而て前にいふ如く胃囊は定りの通り食を受けて伸るに、常に慣る所の定限に及び、満足は覺ゆるも、此とき時又強ひて食すれば、強ひて伸、益す食すれば益す膨れ、斯の如くして止ざれば、其胃囊の伸るに定限を超過す。故其収縮に収縮力弛み、食物消化作用を怠るなり。然れども素より縮むべき常慣の有もの故に、其偶まなるは少頃して復自然に漸々緩やかに収縮むものなり。然りと雖も、一回伸るに過るときは、其収縮に常に慣る定限の處に及ばず、半途にして其収縮力衰へ、内に食の乏きにあらずして、其餘食に耐ふべき力の弱きに因つ、飢たる如く覺え、又資食を欲る念を生ずるなり。此時食せずして耐る時は、須臾にして収縮力は又其元に復るものなり。或は少しづつ食して凌げば、一日或は二日にして漸々に前前常に慣る定限に復ると雖も、若し誤て此時其欲きに任せ、猥に食して止ざれば、竟に其縮む力を失ひ食物消化す滯りて腐敗、(8丁オ)或は虫を生じ、或は疾を發す¹⁷²⁾。

○經驗に由て之を云へば、人々毎日に食するに常に慣る所の量あり定あり。然るに偶ま夜寝るに臨み、常食の外に復一食を喫することあり。而て其翌朝に及び、腹中に其一食の餘計に満あるに關らず、反て常より腹の空たる如く覺え、食を促る念の常よりは急ぐものなり。是他にあらざ、實

は胃囊あぶくろの伸るに慣るのび定限なげを過しかぎり、爲に須臾収縮力すごおとろへ、内にある餘食ために耐へる力の弱しばらくちぢむちからき所以うちなり¹⁷³⁾。

○人常ひとつねに脾胃の弱りひといふは、此収縮力よはの弱りたるをいふ。大人このちぢむちからにして此症よはを病む人稀ひにあり。小兒このやまひは胃囊やいまだ薄く且軟ひとまれかにして、其力ひとも亦弱あぶくろき故うす、此病に懼る者殊そのうへやはらに多し。其重症そのちからまたを脾胃よはといふ¹⁷⁴⁾。

○弊家おきなに製せる脾胃藥王圓いへどは、食物消化の作用そののみくひに加勢へらし、此収縮力そのちぢむちからをよく補ふと雖も、其飲食くひものこなれを減して其収縮力はたらきを養ふ意かせいにて、消化易き物このちぢむちからを食して、漸々慣おきなに其力いへどを導き、其消化作用そののみくひを誘ふべき心得なにて、其養生このちぢむちからをよくせざれば、其病そのききめにして此藥えを用ゐるも、其効ことを得がたし。○殊に赤子あかこは此消化器このあぶくろ其形状このあぶくろは稍く備いへどと雖も、未だ其用そのようを作すに堪いへどへず。故に天は赤子を育つるに、其消化そのこなしを其母そのははに借り、與ふるに乳かを以てす。而て後、小兒あかことなるに及び、先齒そだを作り、而て其他消化作用そのこなしの漸々全備そのははに随ひ、漸々母に借れる乳かを廢やめ、而て身体そしの(8丁ウ 挿絵) (9丁オ) 結構かまへを大にする材料だいの爲に漸々もとのに食物ためを要するに換くひものるものなり。然れども小兒かへの際さは、前にいふ如く、其消化力このいまだ甚だ弱し。故に人之を養育ゆゑするに、此天然このの漸々まへに慣れ進む作用ごとのの道理はなはを心得よは、其食物ゆゑは消化易き軟らかき食物ひとれをゑらみて、或は食やういくを與へ乳やういくを與へ、而て常そのくひものに其分量こなれやすに意を注け、漸々やに其る胃囊くひものの収縮力なを導くべき心得すすにて養ふべし。若し誤はたらきて其分量だうりを過せば、其消化力こころえ堪へ得ずして、食物そのくひもの滯りて腐敗こなれやすし、これに原因やして百般やうなの病症くひものを發す。戒慎そしざるべけんや¹⁷⁵⁾。

脾胃下利症の養生法¹⁷⁶⁾

一晝夜いつちやに十五六度下利どげりし、稍重ややおもきものは、不消化物ふせうくわぶつを下し、尚ほ一段重なき症いちだんおもは、総身浮腫そうしんうだはれして消便¹⁷⁷⁾交りなめに下利まじし、夜盲げりとなる。彌重とりめ症いよいよおもきしやうに至るときは、魚腸うをの腐敗のほらわたしたる如き惡臭くさりを發する汚穢物やうな(きたなきもの)を交まじへて通じ、眼つうに膠やにをこみて腫塞はれふさがり、星翳ほしを生じ、遂に不治せうの症つひに至る。右等みざらの症しやうには、可成なるたけ早く一日に朝夕いちにち兩度微温湯あさゆふに鹽しほすこ少し加へ、半身浴こしゆを爲し、腹部並に臀等はらならびを充分おどなど温じうぶんあため發汗あせかし、下利くだりの止逆やむまで

ひかんびやうしやう 脾肝 病 症 にて さい せうに 三四歳の小兒 ならび ちばな とき 並に乳離れ時		しよくやうじやうころえ 食 養 生 心 得		四 し の ひ と な め か の あ ひ だ 一 周 間 間	はくまいにじふろくもんめ 白米廿六匁 みづしがふいれ 水四合入 やきしほすこしいれ 焼鹽少々入	粥 ^{かゆ} に た き	いちにちぶん 一日分 はつくと 八九度に しよく 食す
初 一 周 間 間	はくまいにじふめ 白米二十匁 みづしがふいれ 水四合入 やきしほすこしいれ 焼鹽少々入	粥 ^{かゆ} に た き	いちにちぶん 一日分 はつくと 八九度に しよく 食す	初 一 周 間 間	はくまい にじふ もんめ 白米廿八匁 みづしがふいれ 水四合入 やきしほすこしいれ 焼鹽少々入	粥 ^{かゆ} に た き	いちにちぶん 一日分 はつくと 八九度に しよく 食す
二 一 周 間 間	はくまいにじふ もんめ 白米廿二匁 みづしがふいれ 水四合入 やきしほすこしいれ 焼鹽少々入	粥 ^{かゆ} に た き	いちにちぶん 一日分 はつくと 八九度に しよく 食す	六 ろく の ひ と な め か の あ ひ だ 一 周 間 間	はくまいさんじふめ 白米三十匁 みづしがふいれ 水四合入 やきしほすこしいれ 焼鹽少々入	粥 ^{かゆ} に た き	いちにちぶん 一日分 はつくと 八九度に しよく 食す
三 一 周 間 間	はくまいにじふ しもんめ 白米廿四匁 みづしがふいれ 水四合入 やきしほすこしいれ 焼鹽少々入	粥 ^{かゆ} に た き	いちにちぶん 一日分 はつくと 八九度に しよく 食す	七 しち の ひ と な め か の あ ひ だ 一 周 間 間	はくまいさんじふにもんめ 白米卅二匁 みづしがふいれ 水四合入 やきしほすこしいれ 焼鹽少々入	粥 ^{かゆ} に た き	いちにちぶん 一日分 はつくと 八九度に しよく 食す

まいにちに ど これ さ
 毎日兩度づつ之を施すべし。而して食糧は此次に示す 食養生の分量通り、
 こめ しらかゆ やきしほすこ くは しょく
 米の白粥に焼鹽少し加へ食せしむべし。其他不消化物の品は用ゐるべから
 ず。輕症は脾肝藥王圓を用ゐてよし。重症なるときは、苦味健胃丸を
 けんよう くすり こうのう
 兼用せざれば、藥の効能すくなし。

(10丁オ)

みぎ いたつ なんしやう ひ かんびやう しょくやうじやうはふ なぬか めごと はくまい めかたに もんめ
 右は至て難症なる脾肝病の食養生法にて、七日目毎に白米の目方二匁
 づつ増加して食せしめ、而て後追々快氣に赴くときは、常の飯のやわらか
 なるものを食せしめてよし。

すべ さいるい
 總て菜類は

○やき麩 ○丁子麩 ○鮎の作り身を赤味噌の汁にして食す。其外快氣な
 るに隨ひ、消化しやすき食物を撰び用ゐる給ふべし。

あいだ しょくもつ
間の食物には

○かるやきの干菓子 かりずみがたくわし やま くわし らくがん
○丸ぼうろの菓子 〇すこおし 〇汁あめ 〇かすていらくわし 〇かた
くりくわし 〇氷砂糖 〇金米糖
みぎ ほか
右の外にもむねになづまぬかるき菓子類を撰び用ゐたまふべし。

むしやまひやうじやう こころえ
虫病養生の心得¹⁷⁹⁾

○小兒に病あれば、其病の何病たるを問はば、人々概して之を虫といふ。
其故小兒の虫といふは、小兒の病といふの代名詞の如し。然れども虫の
病とするは、最も小兒に多しとは云ひながら、大人にもなきにあらず。
又小兒の病必ず虫に限るにあらず。人或は他の病の爲に虫を生ずること
あり。或は虫の爲に生ぜる病あり。其原因異なれば、其虫も亦異なり。
故に其虫に數種有と雖も、其虫を生ずるに常に原因とするの最も多き部分
は胃腸にて、其（10丁ウ）虫は多く蛔虫なり。是全く右にいふ消化器の
消化力弱より食物の消化鈍くして、腐敗停滯て熱を發し、其熱の爲に
腐敗停滯食物の蒸るに因て生ぜし虫の多き所以にして、例えば芥溜場
にある腐敗物むせて虫を生ずる如きものなり。○而して此虫を生ずることの
殊に小兒多きは、小兒は既にいふ如く、いまだ食物消化力の弱きに、と
かく其母姑息の愛に溺れ、小兒の嗜欲に之を制するに忍びず、少頃其意
を慰めん爲歟、若くは乳ばなれの時、唯一途に乳に代る意より滋味に飽し
めんことを欲ひ、其食物をえらみ、漸々の分量を顧るに遑あらずして、
小兒の嗜むに任せ、飲食の適量を誤り、爲に消食器の消化力おとろへた
るに因るの多き所以なり。

○而て其虫は、多分蚯蚓の如き虫歟、或は細小蛆の如き虫多し。此二種と
も其色白きものあり、又少し赤みを帶て桃花色なる者あり。

○病人其色の白き虫を生ぜる時は、食を貪り甘き物を好み、而して或は
悪心嘔氣有て、或は口中にむしづ走り、或は時々腹をいため、或は夜寝
て居ても卒急に起あがり、或はビクビクと動き、或は時を定めず間歇のあ

ねつ はつ また そのほかおも いろいろ へんしやう
る熱を發することあり。或は其他思ひよらざる種々の變症をあらはすことあるものなり。

びやうにん も いろ むし しやう とき あま もの この また から もの この
○病人桃花色の虫を生ぜる時は、甘き物を好み、或は辛き物を好むことあり。或は食を欲(11丁オ) ざることあり。而して時として種々異常の變症をあらはし、或は頓に甚だ驚く可きの大熱を發することあり。時にひとびとまちがへ、これ えきねつ また これ むしえき また そのねつ にはか
人々誤て之を疫熱とし、或は之を虫疫といふ。或は其熱の頓にさむることあるを見て、虫瘡といふあり。然りと雖も、其時を定めずして、頓に熱のさむることあるは、是疫にあらず、瘡にあらず。必ず腹中に此桃花色の虫を生ぜるに因るものなり¹⁸⁰⁾。

この も いろ むし はなは おそ わるきむし しろ むし そのいきほひいたり つよ
○此桃花色の虫は甚だ懼るべき害虫にして、白き虫よりは其勢力至て強く人に害すること甚しく、注意て速く除かざれば、人命を奪ことあり。故に諸君参考の爲、此虫を生ぜる時の容態を告んに、○或は時々頓に胸膈へ攣り、○或は頓に胸へさしこみ、○或は頓に甲處を痛め、乙處を疼めて、其處を定めず。○或は腕を攣り、足をつり、腰をつり、○或は變てしばらくのび あるいは いつときおほい しよく むさほ そし のちふつかあるひ 暫時伸ざるもあり。○或は一時大に食を貪り、而て後二日或は三五日も食を絶つことあり。○或は其甚しきは、精神常ならずして、獨語をいふことあり。譫語いふて身體手足動止の作所に異常事をなすあり。故に親族おどろ あやまつ これ きかがい あるひ これ きつねたぬき つき そのぢ 驚き、誤て之を癲狂なりとし、或は之を狐狸の魅たるものとし、其治をいしや たのま うろなへまはり かみ いの いへど これしばらく こと あるひ もし 醫に請ず東奔西走、神に禱ることありと雖も、是少頃の事、或は一日若くは三五日にして期至れば、自然に治るものなり。而て日を過後、或はまたにはか おこ あるひ またにはか をさま たびたびそのやまひ さしひき これきかひ 又頓に發り、或は復頓に治り、屢其病に間歇のあるは、是癲狂にあらず、きつねたぬき つき そのほらのうち かなら このむし しやう そのむし やまひ 狐狸の魅たるにあらず。其腹中に必ず此虫を生じて、其虫の病をいたすものなり。人々常に狐狸の魅たるといふは、多分は此虫(11丁ウ 挿絵) (12丁オ) に悩むに在り。古人も日へる如く、蝨の言たる怪なりと。故にこのむししやう あや びやうしやういろいと つ け も な き¹⁸¹⁾ 變症を現はすものなれば、頗る注意せざれば、其治を誤ること尠からず。

みぎ それこれ ようだいあつ あるひ そのしやう うたが そのびやうにん こころ
○右にいふ甲乙の容態有て、或は其症の疑はしきは、其病人のめ眼に意を注くべし。白眦の處其色青く、黒睛するどくして常ならず、目じりつりあが あるひ をりをり そらめをつかひ また ひと はなしのうち にはか おそ ごと 上り、或は時々キヨロキヨロと上竄し、或は人と語言中、頓に懼るる如く、

そこら のぞひ め さだ そ またはな うへ めとめと あひだ あるひ たて
左右を窺て眼づかひ定まらず、而して又鼻の上、兩眼の間に、或は縦に
あるひ あるひ あを あら ある これら てら あは かんがへ
或は横に、青すち見はれて有ものなり。是等を照し會せて參考すべし。
みぎ それこれ しやうあつ これはむし な やまひ うたが はや
○右にいふ甲乙の症有て、是虫の爲す病ならずやと疑ふことあらば、早
わたくしかた せい せうちうぐわん もち そのむし のぞきさる そのこみやう そ
く弊家に製する消虫丸を用ゐたまへ。其虫を除去に其効妙なり。而して
も むし あらざ そのやまひ がい さ これ そのすで しやう むし
若し虫に非るも、其病に害あることなし。然れども是は其既に生ぜる虫
を去るまでにして、他に又効あるに非ず。故に又再び其虫を生ずること
なしとせず。其虫の生ずる原因の根を絶すべきには、弊家に製する脾肝
やくわうゑん もち くひものこなすちから おきな とどこほ くさりもの さば き そのむし
薬王圓を用ゐたまへ。食物消化力を補ひ、停れる腐敗物を驅除し、其虫
しやう も と たや う さ このくすり そのすで しやう むし
を生ぜる原因を絶することを得べし。然れども此薬は其既に生じたる虫
のぞ そのこうすくな ゆゑ そのむし さつ そのも と た せうちうぐわん
を除くには、其効少し。故に其虫を去て、其原因を絶やすには、消虫丸
ひかんやくわうゑん やく たがひにもち
と脾肝薬王圓との二薬を互用ゐたまへ。

おとなやうじやう ようじん¹⁸²⁾
大人衛生の注意

(12丁ウ)

すべ ひと さい さい ころ おやうふ とし たつしや
○凡て人は十六七歳より四十歳の頃までは、強壯の年齢にして健康なるの
とき このとき こころえ のみくひ ぶんにやう あやま きをつけ またせいだしむごき
期なり。此時に心得べきは、飲食の節度を誤らざるやう注意、又勉強運動
かなら よきほど さいの の ち いた からだやう おとろへ もの
を必ず適度にすべし。四十歳已上に至れば、身體稍やく老衰に赴くがゆ
べつして くひもの き かつ からだ やしなひ こなれよ もの
ゑに、殊に食物に意を注けて、身體の滋養になる消化易き物を喰ふやう
こころ かりそめ こなれにくいもの く
心がけ、苟且にも消化難き物は喰はぬやうにすべし。

しよくじ つねにそのじこく ちが おな とし
○食事は毎日其時刻を違へぬやう同じ時にすべし。

いそ ひと しよくじ あひだ き お かみこな そろそろ の
○忙がしき人にてても食事の際は、氣を落ちつけて、よく齧碎して徐に呑み
こむべし。

くひもの なに はら く やまひ もと もの つね
○食物は何にてても腹一ぱい喰ひては、病の原となる者なれば、常にモウ一
ぱい欲しいと思ふ所で早く箸をおさめ、喰ひ過ぎぬやうつねづね膳に對ふ毎
このこと わす
に此事を忘れぬやうにすべし。

はげ からだ つか こころ のち ぶん じかん すぐ
○劇しく身體を役ひ、心思を勞ひたる後は、三十分より一時間まで過るに
あらざれば、喫飯すべからず。而して其時間は笑ひ談しなどをして過ぐす
べし。

すこ き ぶん とし ほんよみがくもん ふじん はりしごと
○少しにてても氣分あしき時は、讀書學文はよろしからず。婦人の裁縫も

はなは 甚だよろしからず。且 房事^{そのうへねやごと きん}を禁ずべし。

○氣分^{きぶん あし}悪き時^{とき}は運動^{うんどう}すべし。適度^{よきほど}の運動^{うんどう}は常^{つね}に欠^{かく}べからず。

食物^{しよくもつ}の注意^{ようじん}

(13丁オ)

○食物^{くひもの}は第一^{だいいち}に飯^{めし}は軟^{やほら}かなるがよし。○菜^{さい}は種々^{いろいろとり}取交^くぜて食^くふがよし。○

都^{すべ}て一つ物^{もの}ばかり多^{おほ}く食^くふはよろしからず。

○毎日^{まいにち}同じ物^{おなじもの}而已^{のみ}喰^くふよりは、時々^{ときとき}品^{しな}を替^かへる方^{ほう}よし。○香^{かう}の物^{もの}は消化^{こなれ}よろしからざる物^{もの}なれども、よく煮^{たき}て喰^くへば至^{いたつ}て消化^{こなれやす}易^みきものなり。○味噌^{みそ}汁^{じゆ}は胃中^{いちゆう}に滞^{とどこほ}り心^む下^ねにもたれ、氣^きにもたれ、多^{おほ}くはよろしからず。○食事^{しじ}

の時に總^{とき}て汁^{すべ}の類^{しる}、又は湯茶^{るみ}・水^{また}等を多^{ゆちや}く飲^{みづなど}ば、食物^{おほ}の消化^{のめ}鈍^{くひもの}くしてよろしからず。○酒^{さけ}は其人^{そのひと}の性^{しやう}によりて少^{すこ}しづつ飲^{のめ}ば、藥^{くすり}になるといふ人^{ひと}あれども、實^{じつ}は少^{すこ}しづつにても飲^{のめ}ぬ方^{ほう}が藥^{くすり}なるべし。

○大人^{おとな}小兒^{こども}ともに疾^{やまひ}ある時^{とき}、殊^{べつし}に注意^{ようじん}すべき食物^{くひもの}は、

○油^{あぶら}あげテンプラの類^{るみ} ○だんご ○生^{なま}の昆布^{しるみ} ○白味噌^{しろみそ}

○缺餅^{かきもち}すべて餅類^{もちるみ} ○牡丹餅^{ぼ (たもち)} ○あまざけ ○かしら芋^{いも}

○炒豆^{いりまめ}すべて豆類^{まめるみ} ○温飽^{うどん} ○そ ば ○子 芋^{こ いも}

○油^{あぶら}濃^こき魚^{うを}のるみ ○とうふ ○こんにやく ○素 麵^{そう めん}

○背^せの青^{あを}き魚^{うを}の類^{るみ} ○鮑魚類^{ほしうをるみ} ○かぼちや ○あぶら氣^け

○其他^{そのほか}すべて生漬^{なまづけ}の類^{るみ}、又は初物^{また}といふて時^{はつもの}ならぬ珍^{とき}しきもの

みぎ 右等^{るみ}の類^{るみ}は、假令^{たとひ}常^{つね}には格別^{かくべつ}害^{がい}なきも、病人^{びやうにん}に甚^{はなは}だよろしからず。故^{ゆゑ}に

疾^{やまひ}ある時^{とき}は、喰^くはざ (13丁ウ 挿絵) (14丁オ) るがよろし。

運動^{うんどう}の心得^{こころえ}

○運動^{うんどう}は身体^{からだ}の筋脈^{すぢすぢ}を運轉^{うごか}し、筋脈^{すぢすぢ}を屈伸^{じゆうに}し、血液^{けつえき}を循環^{めぐら}し、且 精神^{そのうへこころもち}を活潑^{いきいき}ならしむるものにして、人々^{ひと}衛生^{びとびとやうじやう}には必^{かなら}ず常^{つね}に缺^{かく}べからざるものなり。

然^されども其^{その}運動^{うんどう}も程^{ほど}よくせざれば、過^すぐるも亦^{また}よろしからず。小兒^{こども}等は^{など}は注意^{きをつけ}ざれば、運動^{うんどう}の爲^{ため}に反^{かへつ}て害^{がい}を生^{しやう}ずることあり。或^{また}虚弱^{はよはき}人は強壯^{たつしや}の人^{ひと}

の如く大に運動する時は害あり。故に病後の運動はかならず醫に問ふべし。○而して運動の法方は、其身体を少しく反て、左右の手を揺り、歩數凡そ三百或は五百許運ぶ間、歩行而して又左右の手を握り、両の脇腹より少し背の方に當て、又歩の數三五百運ぶ間、適宜歩行事なり。而して其運動するに心得べきは、

第一 運動中窮屈なる衣服を衣るべからず。

第二 運動中疲れを耐忍して猶止ざるときは害あり。故に不快と覺ゆるときは、直に休憩べし。

第三 運動の後、疲勞の復るまでは静息べし。

第四 運動するに劇しく力を用ゐるべからず。始は緩やかにして漸次強かるべし。

第五 運動に因て血液の循環を進運して、食餌の消化を進むるが故に、運動中及び其後は(14丁ウ)殊に新鮮なる空氣中に静息べし。

第六 運動の後、直に飲食すべからず。又食後直に運動すべからず。其消化に害あればなり。

第七 運動中及び其後は身體寒からざるやう注意すべし。

○始め慣ざる間、若し他の見る所如何と心に咎むることあらば、日々近傍の眺望のよき樹木の有る處に至り、其心持にて適宜逍遙をなすか、或は可然處に神社あらば、毎日に朝夕參詣するなど妙なり。

○身体の健康を保つべき攝生には、實に此運動は常に必ず缺くべからず。人々或は氣の病、或は留飲、或は婦人血の道等疾が如きの類は、是皆其病の原は、此運動を缺くによつて、血液の循環宜しからず、神氣内に壓塞て發動せざるに因ものなり。試に其病人を見るべし。常に耕耘力作等を業とする人にあるは甚だ稀にして、多分は皆大家の深室に在て常に膏粱滋味に飽ぎ、身體を容易に動かさず、日々讀書に其日を送る人歟、或は朝暮帳簿に對し、算盤を執て終日坐業を營む人歟、或は婦人に多し。蓋し婦人は其性質慎み深く、常に深室に在て、散歩の自由も心に任せず、或は家政を執て今日の事務に縛れ、逍遙等欲ふも、其閑暇を得ず。心思の發動することなく、常に鬱々として血の道などといふて、左右神經に

かかは やまひ や これみなこのうんどう か ゆゑん ゆゑ ふじん なにびと
關る病を疾む。是皆此運動を缺くの所以なり。故に婦人にて農工商を
ち(か?) そのしごと をどこ とも はたら また そとで しごと たす み ひと
問はず、其業を(15丁オ)男と俱に働き、或は他出の業を輔け居る者
か また ぶらつくこと じゆう ところ な う ごと ふじん いたつ これら
歟、或は散歩の自由も心のままに爲し得るが如き婦人に至ては、是等の
やまひ かか ひと はなは すくな これ より これ うんどう つね かなら か
疾に罹る人あること甚だ尠し。是に因て之を觀れば、運動は常に必ず缺
くべからざるものなり しか いへど このうんどう せす すで やまひ
むに及んでは、人々勸奨なすも、病人は其運動するを好まず。其勸めを聞
およ ひとびと すすめ びやうにん そのうんどう この そのすす きく
も煩はしく思ひ、益々精神鬱結して漸々に其疾を重ねるものなり。時に
これら びやうにん わたくしかた
是等の病人に弊家の
ひかんやくわうゑん もち ちやう い ととのへ りやうべん ころろよくつうじ その ち
脾肝薬王圓を用ゐたまはば、腸胃を整理し兩便を快通せしめ、其血液を
めぐら そのふさげ さん すす うんどう ころろ しやう ころろ さつぱり
循環し、其鬱氣を散じ、勸めざるに運動する意を生じ、精神を爽快ならし
むること、實に神の如効あり。依て之を用ゐたまふ人々の便宜に供る爲め、
をはり わたくしかたせいやく うけうりどころ あげ み な さん つぐ しかいふ
終に弊家製薬の販賣所を掲て、愛顧諸君に告と云爾。

第二世¹⁸³⁾

時に明治十五年二月、之を改正す。

石田勝信謹識

脾肝薬王圓効能書 大尾

京都市五條橋東貳町目

脾肝薬王圓本舗

營業人

第三世¹⁸⁴⁾

石田勝秀謹製

(15丁ウ－17丁オ)

各地の代理店、賣取次所一覽

(17丁ウ－22丁オ)

広告 消虫丸・健胃丸、解凝丸、たいどく下し、神壽散、せきの妙薬、
梅の雪、日神丹、壮快丸、自由丸 *翻刻は省略

(22丁ウ)

あめ もと
天のしたいずれのわざも本はみな

かみ
神のいさをにあらざるはなし
ひ もと かみ みち みち
日の本に神の道とて道あらば
ひと ひと みち
人の人たる道をまなばむ

明治三十四年十一月七日 印刷

全 年十一月十一日 発行

著作兼

京都市下京区五條通橋東二丁目

発行者

石 田 勝 秀

印刷者

京都市下京区大和大路三條下ル四番戸

奥 田 吉 之 助

非賣品

京都市上京区三條通東洞院東エ入曇華院前

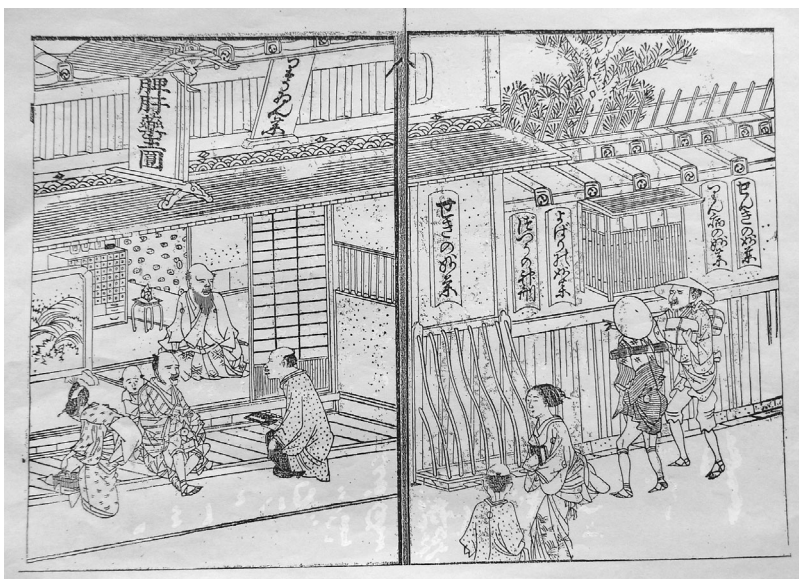
前町十七番戸

印刷所

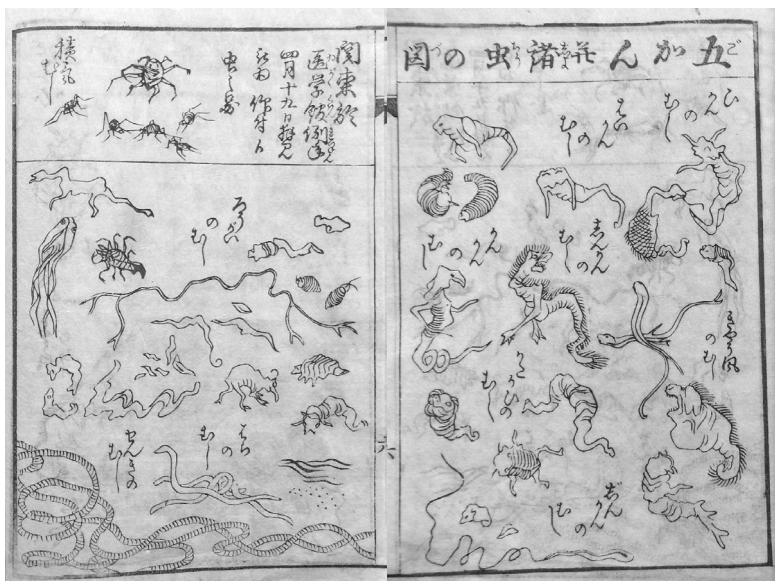
合 資 商 報 會 者

(裏表紙裏)

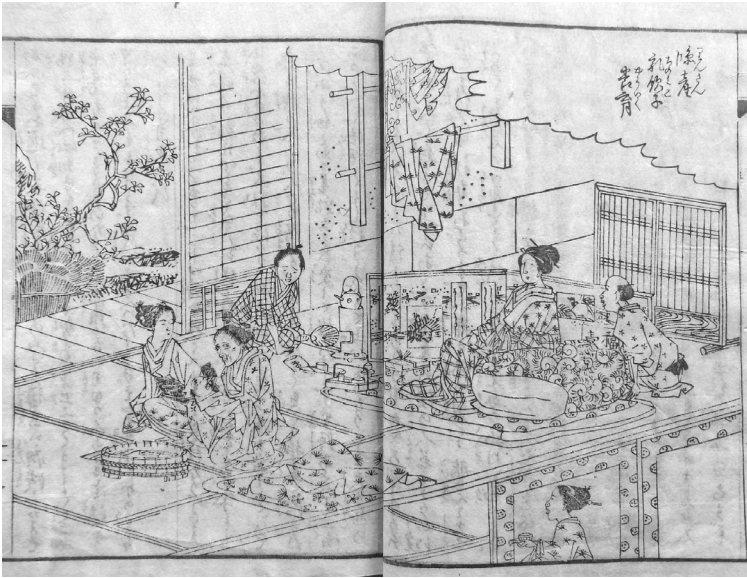
乳の張る奇方 *翻刻は省略



〈図版8〉店構え



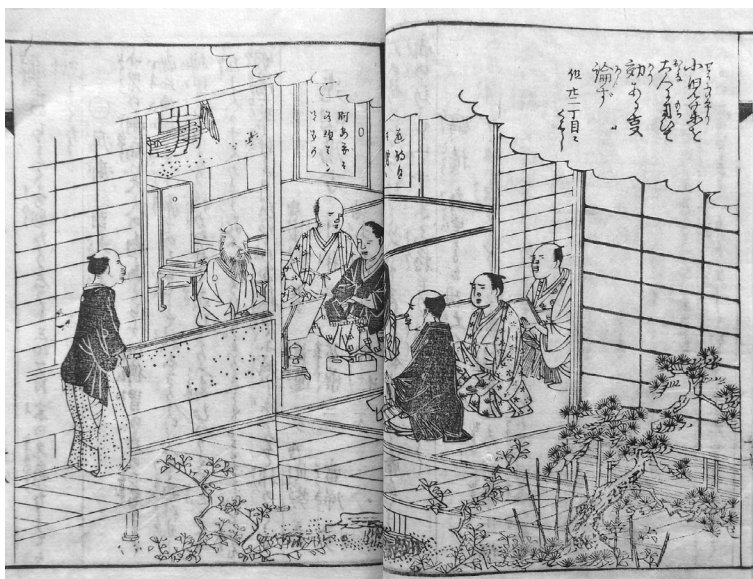
〈図版9〉五疳并諸虫の図



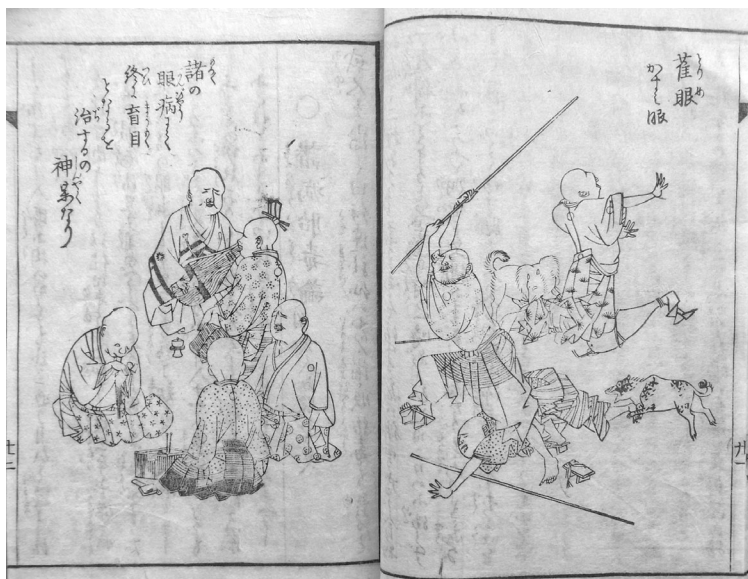
〈図版10〉臨産乳飲子養育



〈図版11〉小児養育の心得



〈図版12〉大人に用ひて効ある事



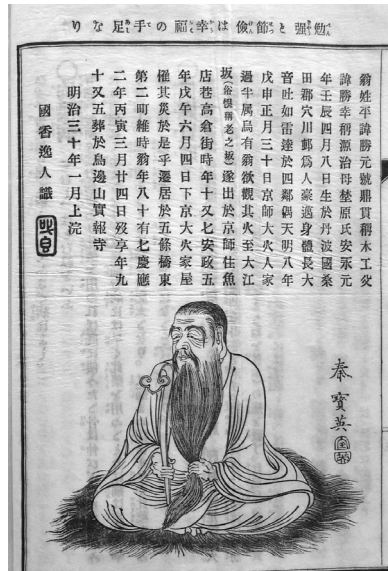
〈図版13〉眼病



〈図版14〉動悸・留飲・吐逆



〈図版15〉鼎貫肖像（慶応元年）



〈図版16〉鼎貫肖像（明治34年）

文献表

王符

『新語・潜夫論 全』台湾中華書局・中華民國60年（1971）。

落合泰蔵

『和洋病名對照録』、明治16年（1883）。

梶谷真司

「母乳の自然主義とその歴史の変遷——附 岡了允『小児戒草』の解説と翻刻」,「帝
京大学外国語外国文化」(帝京大学外国語学部編) 第2号、87－163頁。

本田濟

『易』朝日新聞社(朝日選書1010)、1997年。

優々館主人

『文化増補 京羽二重大全』文化8年（1811）。＊東京大学鷗外コレクション

【付記】

『小児養育金礎』の翻刻、および内容の理解に際しては、順天堂大学名誉教授の酒井
シヅ先生と帝京大学医学部付属病院の加藤大基先生から多くご教示いただいた。心よ
り感謝したい。

注

- 1) 岡了允と『小児戒草』については、拙論「母乳の自然主義とその歴史の変遷——
附 岡了允『小児戒草』の解説と翻刻」：「帝京大学外国語外国文化」（帝京大学
外国語学部編）第2号を参照。桑田立齋と『愛育茶譚』は、「江戸時代の育児書か
ら見た医学の近代化——桑田立齋『愛育茶譚』の翻刻と考察」：「帝京国際文化」
（帝京大学文学部国際文化学科編）第20号を参照。千村真之と『小児養生録』につ
いては、「江戸時代の育児書の黎明——千村真之『小児養生録』の翻刻と考察」：

「帝京大学外国語外国文化」（帝京大学外国語学部編）創刊号を参照。

- 2) 江戸時代、庶民は貸本屋から本を借りて読んでいたが、多くは娯楽本であった。育児書のようなものがどれくらい読まれたかは分からない。ただ、口伝でその内容が庶民の間に広まったことは少なくなかったと思われる。江戸時代の書物の流通に関しては、長友千代治『江戸時代の図書流通』を参照。
- 3) 慶応4年版では、「此能書御熟覧被下、御全快なされ候御方より、御知音の御方へ、此本、御融通・御披露被下候様、偏御頼申候」(K4 13丁ウ)とあるので、売り物ではなかったのだろうが、当初は必ずしもたくさん配布してはいなかったのかもしれない。この点が明記されるのは明治の版からである——「此能書は別に代料に及ばず進ずるなれば、飛脚など薬料の外に能書本の代料何ほどなどと若云人有共、必取あへ給ふな。」(M7 4丁ウ；M11 2丁ウ) なお江戸時代、貸本屋を含めて本屋は、薬の製造、宣伝、販売に深く関わっていたらしい。その意味では、脾肝薬王圓とその能書本『金礎』は、ともに迅速かつ広範に流通する制度的基盤をもっていたのではないと思われる。長友千代治、前掲書、第六章「本屋と売薬」を参照。
- 4) 石田家が正確にいつまで薬業を続けていたかは分からない。第1章の2)で述べるように、勝秀の代で終ったと思われるが、彼の享年大正11年に公刊された『京都商工人名録』（京都商工人名録発行所編）の売薬のところには石田勝秀の名前が見える（cf. 137頁）。少なくとも大正時代に入ればしくは続いていたと思われる。
- 5) 小城製薬会長の小城忠一氏によると、昭和22年刊の『家庭薬全書』に藤村薬品工業株式会社の藤村伊兵衛氏の製品として、「脾肝薬王丹」というのがある（cf. 存219）。効能から考えて、これが脾肝薬王圓を受け継いだものであることは間違いない。処方香附子、五味子、茯苓、莪朮、檳榔子、延胡索となっている。ただしこれが鼎貴の処方と同じかどうかは分からない。
- 6) 江戸時代に京都で発生した最大の火災。天明8年（1788）の1月30日出火し、2月2日に鎮火するまでに、京都の大部分が消失した。御所や二条城まで焼け落ち、町1424（6万5340世帯）、家3万6797、寺社238、武家屋敷67が焼けた。応仁の乱以来の大惨事と言われる。

- 7) 京都の鳥邊山、東山区五条橋東6丁目588番地にある日蓮宗の寺。
- 8) 石田家に残る「石田家中古家譜並補遺」によると、石田家の先祖は、豊臣秀吉の五奉行で僧侶の前田玄以（1539－1602）に仕えた。玄以が京都奉行に任ぜられ、丹波亀岡に知行を得ているので、そのときに丹波の石田家も成立したと考えられる。石田敏氏によると、石田家は鼎貴以前、農業と葉業を営んでいたらしい。
- 9) 他にも、「脾瘡」、「肝瘡の虫」については、手遅れになった場合は、用いるべきではないとしているし（cf. K4 14丁オ・ウ）、大人の痼病には必要ないとしている（cf. K4 18丁オ）。
- 10) 「^ひ日^{おなじ}を^{ろん}同ふして論ずべからず」は、文化10年版では「^ひ非^{おなじ}を同ふして」となっている。意味から言うと、文化10年版のほうが正しいと思われる。
- 11) 時期によって呼称の指すものが変化しているが、嘉永4年版の「出店」、慶応元年から明治7年までの版の「出張弘所」、明治11年版以降の「弘所」、明治34年版の「代理店」は、今で言う支店が販売代理店に相当する。嘉永4年版から明治7年版までの「元弘所」、明治11年版以降の「賣弘取次所」は取扱店に近い。本文中の「販売拠点」という語は、この両者を指している。
- 12) 私が所有する版の一つが、書誌データから明治28年版と同じだと思われるが、これは今のところ実見していない（日文研に所蔵）。販売拠点146というのは、私がつもっている版によるもので、ここで「明治30年ごろ」と書いたのは、私のが明治28年版より丁数が多いので、これより少し後だと判断したことによる。
- 13) 明治20年には、裏表紙の見返に勝秀の跋を付した版が出ているが、おそらくこれは、勝信が死去し、勝秀に代替わりしたことがきっかけになっているのだろう。勝信、勝秀の生没年は、石田敏氏の資料による。
- 14) 石田敏氏の資料によると、その後石田家は後継者に恵まれず、薬屋は勝秀の代で廃業したようである。
- 15) 写真は国会図書館所蔵のもの。他に内藤記念くすり博物館発行の収蔵資料集『くすり広告』の70頁にも同じものが掲載されている。
- 16) 書誌データは、国立国会図書館のデータベース、Webcat Plus、日本古典籍総目録、さらに私自身が収集した版や、所蔵先での調査によって確認したものである。
- 17) 嘉永4年版の以下の記述を見ると、文化10年と嘉永4年の間に改訂が行われた可能

性も排除できない——「文化十酉としより弘化四未とし迄出せし能書本に、痘疹^{はしか}後の眼病^{がんびやう}治せず、用ゆべからずとしるし置し所^{おき}、病家より右痘疹^{びやうか}後の眼病^{はうさう}にも用ゆるに奇妙^{きめう}に効あるよし、追々^{おひおい}申しきたるにつき、猶又驚と試るに、ほし入すでに盲目^{まうもく}となるも、ふしぎの功能ありて、十人に八九人まで悉く治す^{ことごと}。故に此所にこれをあらたむ。」(K4 21丁ウ；同様の文は文化10年版にもある。Cf. B10 12丁オ以下) また明治3年版の奥付にそれまでの「再彫之期改補」と記されており、明治7年版の序(明治5年)にこの年に「再彫期改補」があったことが示されている。

- 18) 明治時代は、11年に一度活版印刷になったが、15年には木版に戻っている。その後34年版にふたたび活版印刷になった。34年版は内容的に明治15年版にも11年版にもないものを含んでおり、その点で15年版は11年版に近い。だが3つの版に共通する部分の表現については、15年版と34年版はほぼ同じである。全体として見ると、15年版は11年版と34年版の中間的性格を示している。
- 19) ここで言う「改訂」は、本そのものの中でその旨と時期が明記されている場合を指している。しかし実際には、書誌情報の上で版が同じで、本文が変わっていても、序の日付だけ変わっていたり、広告が違うものになっていたり、弘所や取次所のリストに変更があったりしている。場合によっては、実際には中身がかなり違うのに、発行年は以前のままだっていたりすることさえある(明治15年と28年の版。新たに活版印刷になった明治34年の版ですら、本文は明治15年となっている)。逆に版が異なっても、本文は同じか、ほとんど変わらないというケースもある(例えば、慶応元年と明治3年の版)。したがって版の取り方によっては、改訂は合計8回以上になる。
- 20) 内藤記念くすり博物館刊『くすり広告』、72頁；『薬の広告文化』、19頁を参照。
- 21) UCSF LibraryのHP内にある、East Asian CollectionのJapanese Woodblock Print Collectionのサイトで閲覧できる(cf. <http://asian.library.ucsf.edu/>)。
- 22) ここで本文の著者が鼎貫から息子の勝信に代わっているが、このことじたいが本の内容の変化に与えた影響はそれほど大きくはないと思われる。石田敏氏に提供していただいた資料によると、勝信は文政4年(1821)に生まれ、明治19年(1886)に67歳で没している。家業を継いだのが元治元年(1864)であり、『心得』を出版

した明治11年（1876）には57歳になっている。要するに、彼は江戸時代の人間だと言える。したがって内容的な変化の大きな原因は、やはり近代化・西洋化という社会全体の動きに求められる。

- 23) 石田秀美監訳『現代語訳 黄帝内経素問 上巻』、482頁。
- 24) 傅維康・呉鴻洲編『中国医学の歴史』、394頁以下；根本光人監修『陰陽五行説』、100頁を参照。
- 25) 香月牛山『小児必用養育草』；山住・中江編注『子育ての書1』、329頁。
- 26) 香月牛山、同上、329頁。
- 27) さらに薬王圓は、「胎毒を消解する」（K4 7丁オ；B10 後4丁オ）働きももつし、初乳も「母の胎内にて受たる胎毒を瀉さんが為に自然と出る薬乳」（K4 10丁ウ）であるから、鼎貫からすれば、胎毒のことはさほど心配なくていいのだろう。
- 28) 次の文も同様のことを言っている。脾胃の虚損が病気の根本的な原因であるという「此理にうとき人は、肺疳といへば肺の療治し、心疳と見れば心の療治をなすゆゑに、いつまで薬を用ゆるとも、疾根を治することなく、終に大病の礎となる。これ根本の脾胃の療治をせざるゆゑなり。」（K4 6丁ウ；B10 4丁オ）
- 29) さらに薬王圓には、妊娠検査薬としての側面もある。「懐胎して三月あまり過て、瘀血の滞りとも、又妊娠ともしれざるとき、此薬王圓式廻り用ゆれば、懐妊ならば子宮（こぶくろ）をよくあたむるゆゑ、月満るまでいよいよ月水なく、至て産安し。又瘀血の滞りならば、十人が十人ながら速に月水あること、此薬の妙なり。」（K4 7丁ウ）。『心得』期になると、このような効能は書かれていない。
- 30) 緒言では薬一般に関して、同様のことを述べている——「健康の原は其身の養生に在なり。薬も時に由ては生力を助け、病ひを治するに必要なる物なれども、是は唯加勢を致すのみなり。」（M11 6丁オ）
- 31) 予防薬としての効能は、『心得』期にも見られる。ただし、『金礎』期のように養生全般や無病長寿のためではなく、胃に関してだけである——「或は常に之を用ゆれば、常に食物消化の加勢を致し、其病の發すべきを發せざるに防ぐ。」（M11 14丁オ）「凡て胃の弱き人は、常に之を用ゐれば、胃を強壯にして、如此の病あること無らしむ。」（M34 1丁ウ以下）
- 32) 逆に桑田立齋の『愛育茶譚』（1853）では「血液」を「きけつ」と読ませている。

- 33) ただし医学館への言及は慶応元年版までで、その後の版の挿絵では削除されている。
- 34) ただしこれらの虫は、外部から体内に入ってくるのではなく、消化力が弱り、胃腸で食べ物腐敗することで自然発生すると考えられている。「是れ全く彼のこなすさいく消化機こなすちからの消化力くいのものよわり、食物こなれおそくの消化遅々して腐敗停滯蒸るに因る。例は、芥溜場くさりとどころりむせにある腐敗物くさりのものむせて虫せうを生ずる如きものなり。」(M11 15丁オ；M34 10丁ウ)
- 35) 『小児養育心得』に次のような記述が見られる——「小児に病こどもひあれば、其何病やまたるを問わず、人概とて之を虫むしといふ。故に小児の虫こどもといふは、小児の病やまといふべきの代語ことばに似たり。然れども虫の病は大人しかにもなきにあらず。又、小児の病こどもひ必らず虫かきに限るにあらず。」(M11 14丁ウ以下)
- 36) 養拙齋退春編『小児療治調法記』、66丁ウを参照。また平野重誠も『病家須知』において、虫は一部の限られた病気の原因ではあっても、子どもの病気は何でも虫によるとするのは誤った俗説だとしている (cf. 『病家須知 翻刻訳注篇・上』、218頁以下)。
- 37) 身体を動かすことを健康・養生のために有益とする考え方は、すでに近世の養生論でもあったが、それらはもともと導引・按摩のような気の循環を主とするもので、その後武芸、散歩、掃除など、実用と結びつけられた (cf. 瀧澤利行『近代日本健康思想の成立』、95頁以下)。それが明治時代になると、徒手体操や歩行のような身体そのものを鍛え、その機能を増進することが意図される (cf. 同上、172頁)。また、北澤一利『「健康」の日本史』、9, 48, 167頁以下も参照。
- 38) 拙論「江戸時代における身体観の変化とその哲学的意義——蘭医方以前と以後の育児書を手掛かりにして」、『実存思想論集XXIII アジアから問う実存』第2期15号、113頁以下を参照。またこの論考で述べたように、こうした入浴に関する指示の変化の背後には、身体観の転換が潜んでいると考えられえ。すなわち、従来の見方では、身体は気を通して周囲からたえず影響を受け、不安定で明確に境界づけられず、したがって、入浴という行為は、下手をすれば、気を体から消散させかねない危険を秘めていた。それが、外界に対してより自立的で安定した個体になってはじめて、体を清潔にするために入浴することが可能になったのであり、これもまた、西洋的な人間観に由来すると思われる。
- 39) 石田敏氏に提供していただいた「勝信略伝」による。

- 40) 医療人類学者のアーサー・クラインマンは、専門家以外の人たちの間に見られる一貫性や整合性が欠如しながらも、独自のまとまりをもった知のあり方を「民衆的合理性 (popular rationality)」と呼び、専門家の理論的で一貫した合理性と対比している。これについては、「医療における現実の多元性と多層性——アーサー・クラインマンの現象学的・解釈学的医療人類学」、「帝京国際文化」(帝京大学文学部国際文化学科編) 第19号、108頁以下を参照。
- 41) 表紙裏のこの文は、短冊状の別紙に刷って貼り付けたもので、明治3年版までついている。明治7年版は、私が所有しているものでは、嘉永4年から明治3年版まで奥付の後に載っていた薬の広告(「せきの妙薬」「づつうの薬」「せんきの妙薬」「癩病せうかつの薬」の四つ)が手書きで筆写されている。おそらくこれは、旧所蔵者が書いたもので、もともとは同じ文の紙が貼ってあったのかもしれない。
- 42) 1807年にあたる。
- 43) もともとは仏教語で「仏教が広まること」を指す。
- 44) 昇殿を許された身分の人。公家、殿上人。
- 45) 原文では「弥薬製」全体で「くすりこしらえ」と訓をつけているが、本来これは「薬製」の訓で、「弥」は「いよいよ」であろう。
- 46) 「一廻り」とは一週間のこと。
- 47) 「かるがゆへ」は、「かあるがゆえ」の略で、「こういうわけだから」「それゆえに」の意味。
- 48) 1856年に当たる。
- 49) 初版文化10年版でも、似たような店先の情景を描いた挿絵だが、人物とその配置や人数などが異なっている。見開きの右端には次のような文がある。「ひかん薬王圓味追々高直に付、苓服に付五十四穴づつ、但し此本御持参の方は、丁五十穴に而て進候。猶又暑寒中本御持参の方は貳わり下げ。尤是は本家斗なり。」また安政6年の序文がついた版では、五條橋東の店の遠景を描いた挿絵に代わっており、火事のために店を移した旨が付記されている。
- 50) 『潜夫論』は後漢末の知識人、王符の著作。原文では、引用されている部分の前後も含め、以下のようになっている。「易稱、其亡其亡繫于苞桑。是故養壽之士先病服藥、養世之君先亂任賢。是以身常安而國永永也」(『新語・潜夫論 全』思賢

第八を参照) この文に出ている『易経』の一節は、十二「天地否」にあり、「それ亡びなん亡びなん」といって、^{ほうそう}苞桑に^{かか}繫れり」と読む。安泰なときこそ、「それ亡びるぞ、それ亡びるぞ」と自分を戒め、頑丈な桑の根に物を繋ぎとめるように慎重にすべきだということ (cf. 本田濟『易』、145f.)。続く『潜夫論』の一節は、「これが故に^{いのち}壽を養うの士は病に先んじて薬を服し、世を養うの君は乱に先んじて賢を任ず。これを以て身常に安く、國永永なり」と読める。つまり、養生のためには病気になる前に薬を飲み、国を治めるには乱れる前に賢人の力を借りる、ということ。

- 51) 「ふさひ」は「ふさわしい」の意味。
- 52) 扁鵲は前漢の伝説的名医。耆婆は古代インドの名医。
- 53) この「あらあらしき」は「おおざっぱ」の意味。
- 54) 『京羽二重』とは、貞享2年(1685)に水雲堂孤松子が公刊した京都の地誌・名所旧跡を記した本。鼎貫が念頭においているのがいつの版か分からないが、文化8年刊の『京羽二重大全』(優々館主人編)の三下巻には脾肝薬王圓が紹介されている (cf. 38丁オ)。
- 55) 嘉永4年版とおおむね同じだが、「^{あつ}中暑」の前に「^{たんせき}痰咳」、^{かく}「翻胃」の後に「^{かんらう}疳勞」、^{しら}「^ち赤白滯下」の後に「^{とけつ}吐血・^{がいけつ}咳血」、^{ちやうまん}「^{ちやうまん}脹満」の後に「^{ろうがい}勞咳」がある。
- 56) 初版文化10年版でも、真ん中に「脾肝薬王圓」と大きな文字で書かれているが、右横に「小兒むしくすり」と記されている。その両側には、嘉永4年版の「小兒養育金礎標」の冒頭にある「可憐夭兒疾病非無治之方此乃為不擇用能藥遂死矣」(右)と「潜夫論日養壽之士先疾服藥云々」(左)が写いてある。
- 57) 「当歳」は生まれた年。数え年で一歳の間。
- 58) 初版文化10年版では、最初の頁に相当するものだけで、絵柄も違っている(上2丁ウ)。
- 59) 「うらとをく」は「裏遠く」で、「裏」は大便のことであろう。「大便が遠い」とは「大便がなかなか出ない」、つまり便秘のこと。
- 60) 通常の音読みは「はくう」、夕立、にわか雨のこと。
- 61) 「こも」は「薦」や「菰」と書き、藁などで作ったむしろのこと。
- 62) 初版の文化10年版では「右安生散薬法は、先祖より^{やくはふ}代々秘蔵せし薬法なれども」(5

丁オ) となっており、石田家が代々薬業を営んでいたことが分かる。

- 63) 「知音」は親しい人。
- 64) 初めの「出産^{しゅつさん}の節^{せつ}、…」から「口中^{こうちゆう}をよく拭取^{ぬぐひとる}べし。」までの文が、文化10年版には見られない。
- 65) 元代の医家、孫允賢の『医方大成論』か、その注釈、抄録本を指すと考えられる。
- 66) 「乳をつくる」は初乳を飲ませること。
- 67) 初版の文化10年版では、「薬王圓一ふくに甘艸^{かんそう}壹匁五分」(6丁オ) となっており、薬王圓を併用することが明記されている。
- 68) 陀羅尼助丸のこと。関西に古くから伝わる下痢・腹痛の薬。修験道の祖、役小角が生み出したと言われる。
- 69) 昔の一時は、現在のおよそ二時間に当たるので、二十四時は二日になる。江戸時代は不定時法(日の出から日の入りまでを昼とし、日の入りから日の出までを夜として、それぞれを6等分する)なので、一時の長さが季節によって異なる。
- 70) 初版の文化10年版では、ここに記されているような、初乳(「新乳^{あらちち}」)を胎毒下しの薬乳とする説明がない。二十四時過ぎるまでは、乳をつけないのが普通で、その間は乳を与えなくても子供に害はないとした後、「是自然^{しぜん}の理^りなり。早く^{はや}吞^{のま}すがゆへに彼胎毒^{かのたいどく}脾^ひ腑^ふに沈^{しづ}みて大病^{いしづえ}の礎となる」となっている(cf. 6丁オ)。つまり、「自然の理」「天理」に背く行為は、文化10年版では早く乳つけをすることだが、嘉永4年版では初乳を捨てて子どもに飲ませないことになっている。ちなみに初乳を胎毒下しとして位置づけるのは、文献上はやはり文政3年(1820)の岡了允『小児戒草』が最初ではないかと思われる。文化10年(1813)の段階では、まだそうした考えはなかったか、一般的ではなかったのが、嘉永4年(1851)に盛り込まれたと考えられる。胎毒下しとしての初乳については、拙論「母乳の自然主義とその歴史の変遷」、『帝京大学外国語外国文化』第2号、98頁以下、130頁を参照。
- 71) 初版文化10年版にはこの章がない。ただし嘉永4年版11丁ウの3節目「脾^ひつよき小兒^{せうに}は…」だけが、文化10年版の「小瘡心得の事」という別個の章に書かれている(cf. 後4丁ウ)。
- 72) 「しつけ」はそのままの漢字を当てれば「湿気」、梅毒や疥癬のことも指した。
- 73) 「たいん」は「多淫」、情事の多いことを指す。

- 74) 「しきあたり」は「四気あたり」で、四季それぞれの気（春の温、夏の熱、秋の涼、冬の寒）に当たって病になることだと思われる。
- 75) 「深窓」は、家の奥の深いところ、転じて「大事に育てられた」の意味。また振る仮名の「よいしゅ」は「好い衆」で、身分や財産のある町人を指す。
- 76) 「かたかひ」は千村真之の『小児養生録』で、「^{むなだれのやまひ}癖疾」と表記されている。小児に多い病気の名前。脇腹など結塊があって、腫れや痛みを伴う。後の「^{むしおこり}癖癰」の項に出てくる。
- 77) ここでは「^{やくわうあん}此症に^{もち}薬王圓を用ひあらば、…、^{いつしやう}一生根を切る」になっているが、初版文化10年版では、「^{いつしやう}此等の虫に^ね薬王圓を用ひあらば、… 一生^きむしの根を切る」（7丁ウ）となっており、病気の原因が「虫」であるという記述になっている。
- 78) 文化10年版では、「^{しんかん}心肝^{ぞう}二臓のわづらひ也」（7丁ウ）となっている。
- 79) 「まへめ」は漢字では「前目」、未熟、未発達なこと。
- 80) 「はぎり」は齒ぎしりのこと。文化10年版では「はぎしり」となっている（cf. 8丁ウ）。
- 81) 「咽のひこ」は、「のどびこ」と同じで、口蓋垂を指す。
- 82) 「烏犀角」はインドサイの角。解熱剤として用いた。
- 83) 初版文化10年版では、たんに「^{やま}其疾^ひ」ではなく、「^{そく}五臓の不足より^{はつす}發^{やまひ}る疾」（12丁オ）となっている。
- 84) 文化10年版では、「^{をぐらげんたつ}小倉元達^{せうに}小兒^{しよびやう}諸病を問て日」（13丁オ）となっている。
- 85) 文化10年版では、「^{げんたつ}元達の日、^{しか}然れば^{りやうせん}龍仙がごとく^{たいどく}胎毒より^{しよびやう}諸疾を^{はつ}發^{ある}すこと有、^{その}其^{やまひおこる}發病に前後ある事い^{ぜんご}かん。其故は^{そのゆへ}小兒^{しゆつしやう}出生して^ま間もなく、…」（13丁オ）となっている。
- 86) 文化10年版では、「^{こたへ}予答て日、^{いたつ}至て^{かんやう}肝要の^{たづね}間なり。夫、^{それ}小兒^{せうに}胎内…」（13丁オ）となっている。
- 87) 文化10年版では、この後に「^{ふうかんしよしつ}風寒暑濕におかされ」（13丁ウ）があって、後に続いている。
- 88) 文化10年版では、「^{げんたつ}元達が日、^ひいかにも^あ脾胃の^{よわきつよき}虚実より^{やまいいづる}發病に^{もつとも}遅速ある事、尤^{しごく}至極せり。然れば、^{しか}胎毒多^{たいどくおほき}小兒…」（13丁ウ）となっている。
- 89) 文化10年版では、「^{こたへ}予答て日、^{もちろん}勿論のこと也。^ひ脾胃^{あつよき}実小兒…」（13丁ウ）となっ

ている。

- 90) 「しらくぼ」は、「しらくも」とも言う。漢字では「白癬」と書く。小児の頭部にできる皮膚病で、円形斑が次第に大きくなり、灰白色になって髪が抜ける。
- 91) この後の問いと答は、文化10年版では以下のようになっている。「元達^{げんたつ}感じて日^{いほく}、
しか ^{たいどく}然らば胎毒おほ多き小児たりとも、^ひ脾を^お補益する時は疾なく、たとひ^{たいどく}胎毒もなく
^{むびやう}無病なる小児たりとも、^{せうに}脾虚すれば疾を^ひ發すゆへ、^{きよ}先生の良剤を小児諸病に用ひ
^{ことごと}て悉く^ち治する事、^{すみやか}速に^{しやうち}承知せり。然るに他薬は拾五才までとあり。…」(14丁オ)
- 92) 『金匱』は『金匱要略』のこと。
- 93) 「かたかひ」は漢字では「癰疾」と書く。小児の病で、胃腸に食べ物が滞り、みぞおちのところが腫れて息苦しくなり、やせ衰える。
- 94) 文化10年版では、飯のうえの蠅の比喩はなく、「予が神劑^{くすり}は左^さにあらず。人の根本^{こんぽん}
^ひたる脾を^{ととの}調へ^き氣血を^{けつ}順す^{めぐら}ゆへ、大小児ともに大効あり。勿論大人小児とも薬に異
^{しか}ことなし。然れども大人は小児と違ひ、…」(14丁オ以下)となっている。
- 95) 「せぐるし」は「せぐる」(息が詰まる、胸がいっぱいになる)と「くるし」が合わさった言葉で、「息苦しい」「胸苦しい」の意味。
- 96) 文化10年版では、「勞咳」は最後の章になっている (cf. 17丁オ以下)。内容的には文化10年版とほぼ同じだが、文の順番が入れ替わっている。
- 97) 文化10年版は、この後以下のようになっている。「これには香附子^{かうぶし}一味^みを黒焼して三匁五分常のごとく煎じて藥王圓大丸藥を兼用て奇功あり。三四貼用ひて…」(15丁ウ)
- 98) この節は文化10年版にはない。
- 99) 文化10年版では、これに相当する節がより詳しく、薬方が先祖の誰によるものかも明記されている。「右良法^{みざりやうほう}加味^かの義^ぎは、予が先祖丹波守谷神先生^{せん ぞたんばのかみ せんせい}の教^{をし}へおかれ
^{ほう}し良方^{りやうほう}、代々^{だい}数百人にあたへしに壺人^ちも治せざる事なし。かかる良方をむなしく
^ひ秘し置ば、遠國山野の人々の病に悲んことを深く嘆じ、世の嘲をもかへりみず著
^{をけ}もの也。近郷^{ちかいなか}の人々、予が宅^{たく}へ来り^{きた}給へ。それぞれ病症^{びやうしやう}を見わけ、御薬^{くすり}調合^{てうがふ}いたして進候。」
- 100) 文化10年版には、各薬の値段が記してある。「せきの妙薬」と「づつうの薬」は一服が「五十四穴」、「せんきの妙薬」は一服が「百廿四穴」、「癰病せうかつの薬」

は一服「百四穴」、「よばりの妙薬」が一廻り「三百六十二穴」となっている。

- 101) この箇所と、後の「右よばりの薬の外は、…」の箇所は、慶応元年の版では、「よばり」ではなく、「ね小べん」となっている（意味は同じ）。
- 102) 「叡聞に達する」とは、天子、天皇の耳に入ること。
- 103) 「維」は発語の「これ」。
- 104) 1864年にあたる。
- 105) 「たてかけ」は、ここでは「立て続け」という意味。
- 106) 「さしあう」は、「重なり合う」、「争う」の意味。ここでは薬と悪い反応を起こすというような意味であろう。
- 107) 「どくいみ」＝「毒忌み」とは、薬を飲むとき、薬と一緒にになると悪い作用を及ぼす食べ物を避けること。
- 108) 嘉永4年版では、「潜龍陳人愚謙誌」
- 109) この場合の「気分」は、生まれつきの気質・体質を指すと思われる。
- 110) 「こも」は菰ないし薦、ここではお産のときに下に敷くむしろのこと。
- 111) 「漿水」は破水して出てくる羊水のこと。「とあけ」は「戸開け」、子供が出てくる戸が開いたと考えたということか。
- 112) 旧版では、安生散の処方に麝香と竜腦は含まれていない。
- 113) 「一七夜」は最初の七日間ということ。
- 114) この芍歸湯方は、旧版では記されていない。
- 115) 産後の女性の「乱心」について、旧版では二頁にわたって書いているが、この版では一行だけで簡単に済まされている。明治になると、あまり問題にされなくなったのだろうか。
- 116) 振り仮名の「にちう四とき」は、昔の時間では一時が現在の2時間だから、かつての24時は今の48時間に当たり、したがって「二昼夜」となる。
- 117) 明治6年に新暦に変更されたためだと思われるが、この箇所は新しい時間単位（現在と同じ）にしたがっている。しかしここ以外は昔のままで修正はされていない。
- 118) この版の一部では、脾肝薬王圓の「王」を「玉」に置き換え、「脾肝薬玉圓」と表記している。振り仮名も、「玉」のところは抜いてある。
- 119) 「あらざれば」の誤植であろう。

- 120) 普通は「びほう」と訓じる。つくろい縫うこと。転じて欠点や誤りをとりつくろ
うことを指す。
- 121) 「額」の字はこの明治11年版では「額」となっているが、慶応元年版に倣い、訂正
した。
- 122) 循環する「氣血」を「ち」と読んでいるのは、西洋医学の影響であろう。
- 123) 原文では「服中」となっているが、「腹中」の誤植であろう。
- 124) 「萎黄病」は漢名が「黄胖」、和名で「^{あをのやまひ}阿遠病」や「^{ふくびやう}浮苦病」、^{ふか}坂の下」と呼ば
れた。明治16年刊の落合泰蔵『和洋病名対照録』、143頁を参照。
- 125) 「うら」とは「裏」で、肛門ないし大便を指す。
- 126) 読み方は「キステル」、ヒステリー (hysteria) の意味。他に「喜斯底里 (ヒイス
テリ)」、「歇似私的里」「歇倚私的利」(ともにヘイステリ) などの表記がある。
Hysteriaの語源に倣い、子宮病とも訳された。漢名では「心風」という。落合泰蔵
『和洋病名対照録』、145頁を参照。
- 127) 読み方は「イボコンデル」、ヒポコンドリー (hypochondria) の意味。「依ト昆垚里」
とも表記された。漢名はヒステリー同様「心風」。『和洋病名対照録』、40頁を参
照。
- 128) この「こん」は根氣(忍耐力)の「根」であろう。明治15年版の「依剥昆垚兒」
の説明では、「^{こん}耐に^{かな}叶はぬ」、明治34年版では「^{こんき}耐氣に^{かな}適はぬ」となっている。
- 129) 明治15年版では、この文の前に「^{みぎら}右等^{やまひ}の病ある時は、^{とき}速く^{はや}此^{この}脾^{ひかん}肝^{やく}藥^{やく}王^{おう}圓^{あん}を用ひ玉
へ。^{きめう}奇妙^ちに治す」とあり、この広告の前文も「^{このはう}弊家^{せい}に製する^{くすり}藥、^{ひかん}右脾^{やく}肝^{やく}藥^{おう}王^{あん}圓
^{ほか}外に^{つき}左に^{かかぐ}揚る^{くすり}藥あり」となっている。また宣伝されている薬も、「^{せき}胸和散 せきの
妙藥」「^し止痛散 頭痛の妙藥」「^{けん}健胃丸 むねのつかへをすかす妙藥」「^{しょう}消虫丸
「^し是妙丸 せんきの妙藥」「^い即妙散 痲病せうかつの藥」と表記され、順序、レイ
アウトが変わっている。
- 130) 「くさぎる(耘る)」は、雑草を取ることに。
- 131) 「よしや〜とも」で「たとえ〜しても」の意味。
- 132) 「なまじひ」は、今の「なまじ」と同じ。
- 133) 振り仮名の「たいどく」は、通常「胎毒」と書く。
- 134) 原文では振り仮名「のう」のみで、漢字の「囊」が欠落している。

- 135) 下線は本文中の傍点を表す。以下同様。
- 136) ふりがなの「ろう」は「労」、精神的な消耗のことか。
- 137) 「さしひき」は、ある症状が現れたり消えたりすること。
- 138) 「ぎやうてい」は本来なら「業体」の振り仮名。意味は職業、家業。
- 139) 振り仮名の「しゆう」は「自由」の意味か。
- 140) 原文では「飯食」だが、「飲食」の誤植であろう。
- 141) 「肝」は誤字で、正しくは「發汗」であろう。
- 142) 「依剥昆垚兒」はヒポコンドリーの漢字表記、振り仮名は「気の病」の意味。
- 143) 「喜斯的兒」はヒステリーの漢字表記、振り仮名は「血の道」で、元来は婦人病一般を指す。
- 144) 振り仮名の「ひゃくせう」は「百姓」、農作業の意味であろう。
- 145) ここに掲載されている「勅語」は、明治23年に公布されたいわゆる教育勅語の全文である。この「勅語」と続く「貴顕御製勸學唱歌」、「誓詞の唱歌」は、明治15年版の本文に後から追加されたもの（この版の定本は明治34年刊）。
- 146) この節の文章は、明治11年版の「廣告功能の附言」（3丁オ以下）、「告」（2丁オ）、「斷」（1丁ウ以下）の文から成っており、表記や振り仮名は違うが、内容的にはほぼ同じである。明治15年版とは、表記も構成もほとんど同じ。
- 147) 明治15年版では、このあとに明治11年版の2丁オの挿絵と漢文が来ている。
- 148) 以下の「^{ひかん やくわうあん こうのう}脾肝薬王圓 主治」は、明治11年版の「功能書」（3丁ウ－5丁ウ）に相当する（15年版の表題は「^{ひかん やくわうあん かう の ふ}脾肝薬王圓 主治功能」2丁ウ）。明治15年と34年の版も、表現や表記は以前と若干異なるが（漢字が多い）、内容的には11年版とほぼ同じ。ただし明治34年版では、「白帶下」だった項目が「赤白帶下」になり、「尪癩病」の説明が長くなり、新たに「^{れう ま あちす}癩麻質斯」と「^{つうふう}痛風」が追加されている。
- 149) 「黄胖病」は漢名、振り仮名の「ふくびやう」は和名で、元来漢字では「浮苦病」と表記する。黄胖はその他にも「坂の下」という和名がある。落合泰蔵『和洋病名対照録』、143頁を参照。
- 150) 「うら」は「裏」、肛門・大便を指す。
- 151) 振り仮名の「つきやく」は「月役」、月経のこと。
- 152) 「喜斯的兒」については、明治11年版の注を参照。この項目の記述は、明治11年

版と15年版はほぼ同じ（15年版のほうが漢字表記が多い）。34年版は「事物念に念をいれても氣がすまず」以降の部分が異なっているが、これとほとんど同じ文章が次の「依剥昆埵兒」の後半部にあることから、15年版を活字にするさい、誤写したのではないと思われる。

- 153) 「依剥昆埵兒」については、明治11年版の注を参照。
- 154) 火事などですべてなくなるという意味の「烏有に帰す」と同じであろう。
- 155) 安政5年の時点で鼎貫は87歳なので、この「年十又七」は「年八十又七」の間違いであろう。
- 156) 鼎貫の来歴を記したこの文章は、明治15年版にはない。
- 157) 「上浣」は月の初めの10日間、上旬を意味する。
- 158) 明治15年版は、この第2節と第3節から成り、表現も表記もほとんど同じ。第1節と第4節は、明治11年版にも明治15年版にもない。
- 159) 振り仮名の「はつめい」は、元来「発明」と表記する。賢い、利発という意味。
- 160) 「蓋」は「蓋（けだし）」の俗字。
- 161) 「おんど」は女性語で尻、臀部のこと。漢字では「御居処」と表記する。一説には日葡辞書に出ているポルトガル語のvoidoに由来する。
- 162) この一節は、明治11年版の「懷妊中養生の心得」（6丁ウ以下）と内容的にはほぼ同じ。
- 163) この一節は、明治11年版の「生兒養生の心得」（7丁オ以下）と内容的にはほぼ同じ。
- 164) 振り仮名の「かねふで」とは、元来「鉄漿筆」と書き、お歯黒を塗るための筆。
- 165) この一節と続く「注意」は、明治11年版にも15年版にもない。
- 166) この章は、明治15年版の「小兒摂育の心得」とほとんど同じ。
- 167) この一節の内容は、明治11年版の「赤子養育の心得」（8丁オ以下）の一部と重なっている（第1節の初めと第2節の終わり）。
- 168) この一節は、明治11年版の「赤子養育の心得」の後半の一部とほぼ同じ（cf. 9丁オ）。
- 169) この一節は、明治11年版の「小兒養育の心得」（9丁ウ以下）の一部とほぼ同じ。
- 170) この章は明治15年度版とはほとんど同じ。他方、明治11年度版では、第1節（10丁ウ－11丁ウ）に胃の解剖学的構造、機能、消化のメカニズムが詳しく記されている。

るが、明治15年版以後の第1節ではそれがずっと簡潔になっている。全体的にこの章は、明治11年度版の記述のほうが詳しい。

- 171) この挿絵は、明治11年版でいったんなくなり、15年版以降ふたび採用されている。
- 172) この一節は、明治11年版の「脾胃養生の心得」の11丁ウ－12丁ウの節の内容におおむね重なる。
- 173) この一節は、明治11年版の「脾胃養生の心得」の12丁ウ以下と内容的にはほぼ同じ。
- 174) この一節は、明治11年版の「脾胃養生の心得」の13丁オの節の初めとほとんど同じ。
- 175) この一節は、明治11年版の「脾胃養生の心得」の13丁オ以下の節と内容的にはほぼ同じ。
- 176) この章は、明治11年版にも15年版にもない。
- 177) 「なめ」とは白痢、白色の液状の物が出る下痢。^{びやくり}
- 178) 「ほし」とは、眼球の病でできる白いかげり。
- 179) 明治11年版と内容的に重なる部分も多いが、表現が違い、またこちらのほうが若干説明が詳しい。ただしこちらでは、明治11年版にあった條虫が登場しない。明治15年版とはほぼ同じ。
- 180) 原文では「因るものなり」となっているが、「因るものなり」の誤植であろう。
- 181) 「とつけなし」は「途方もない」「思いもよらない」の意味。
- 182) この章と、続く「食物の注意」と「運動の心得」は、明治11年版では「大人養生の心得」（17丁ウ以下）に一括されている。内容的にはおおむね重なるところが多いが、11年版のほうが全体的に記述が詳しい。とくに「食物の注意」にあたる部分は、11年版は消化の仕組みと結びつけながら何がなぜ悪いかを説明し、指示を出しているのに対し、明治15年以降の版は、そうした理屈は前面に出さず、具体的な指示を列挙している。15年版と34年版は多少の表記の違いはあるが、ほとんど同じ。
- 183) 明治11年版にも15年版にもない。
- 184) 明治11年版にも15年版にもない。

